

551

108



始



文學士齋藤清衛著

國文學の傾向

東京不老閣書房

大正
15. 5. 14
内交

緒言

緒 —

一、「俳諧の不易流行説と言ふのは、どんな意味と思ひますか——」
この質問は、わたくしが学校を出る時、口授試問の席上で尋ねられた問題である。出されたのは、藤村先生であつた。そこには上田先生や芳賀先生も並んで居られた。その刹那の光景を、今なほ明瞭に、わたくしは思ひ浮べることが出来る。

言 —

やられたな——と、その瞬間、わたくしの心臓は一時に縮み上つた。不易流行論を、麗々しく、卒業論文の末章に持ち出した

ことを今更乍ら悔いた。しかし、それも既に及ばぬことだつたつまり、柿普問答程度にしか、諒解されないこの難問を、自分は、定見ありげに上壇に構へて、牽強の斷定を下してしまつたのである。それを、今更口頭でどうして巧に附會し糊塗するこゝとが出来よう。いどろもどろの體たらくで引きさがつたのであつた。

不易流行、この言葉は、それからと言ふもの、機會に觸れてわたくしの胸裡に滲みついてきた。時には、痛々しく腦髓を嚙んで、わたしを腦み苦しめた。しかし、藝術に、果して絶對的

の價値の存し得るものか否かの問題は、容易に解釋の光明を示顯してくれそうもない、わたくしは、ひたすらに、底へ底へと鍬を打ち込んでいつた。しかも勞は容易に酬いられさうにもなかつた。

と、わたくしは、意外の方面から意外の曙光を與へられた。それはベルグソン流義の見方である。いや、ベルグソンをまだ諒解してゐないわたくしにとつて、ベルグソン流義などいふことも僭越至極だろう。とにかく、不易絶對の相は、何もそれを靜止の相においてのみ索める必要のないことに氣付いてきた。

わたくしは、却て、流動の相に、はた、發生の中に、展開の姿に、絶對なるものゝ閃光を認めうるやうに感じたのである。

こんなことは、思索の人にとつて、自明當然のこととて、今更ことごとく擔ぎ出す事柄でないかも知れない。わたくし自身すら、自分の鈍感にあきれてゐるのだから。しかし、現在ですら、なほ、わたくしは半解の人である。わたくしには、これを信條として叱呼するだけの勇氣すらない。たゞ、どこまでも、文學の流動を凝視する小心な學徒にすぎない。

一、本書は、さうした立場にあるわたくしの足印である。その一

片一片を振返つてみると、それ／＼に就いて輝いてきた刹那々々のわたくしの心の影が宿つてゐる。それがわたくしを嬉しくさす。もつとも、本書中總論を除いた全部のものは、何れも最近、「國語と國文學」「國文教育」「國語教育」「大東文化」等の諸雜誌に掲載したものゝ選集である。しかし、各章の連絡統一の點については、本書として懸念なしに讀んで頂きたい。それについては、なほ遺憾の點もあるが、出来るだけ考慮を旋しておいたつもりであるから。無論論すべき問題は、この以外に澤山、殘されてゐる。特に、近世の傾向に關しては、文學以外の姉妹

藝術についても言ひたいことは尠くない。むしろ、本書の問題は、近世の一般的藝術の研究によつて、最後の結論を與へらるべきものときへ考へてゐる。もし、皆さんの中で、この見方に共感されて、この方面に頭をつゝこまれる機縁を、本書が幾分でも背負ひ得たら、自分としてこの上ない満足である。

大正十五年 初春

著者 しるす

目次
總論
各論

— 目 —

A 上 代 (人麻呂より家持へ)

藤原期より天平期に及ぶ詩歌の結晶……………三

B 中 世 (貫之より俊成定家へ)

一、貫之より西行へ……………七

二、新古今調の完成……………一〇七

三、源氏物語の薫の描寫……………一五

C 近 古 (俊成定家より觀阿彌世阿彌へ)

一、觀世父子の藝術觀 (その一)……………三五

— 次 —

二、觀世父子の藝術觀 (その二)……………二二七

三、觀世父子の藝術觀 (その三)……………二二五

D 近 世 (芭蕉より蕪村へ)

一、芭蕉の俳論考 (その一、俳諧の目的について)……………二九三

二、芭蕉の俳論考 (その二、俗談平話説)……………三〇九

三、芭蕉の俳論考 (その三、不易流行説について)……………三三二

四、蕪村の完成……………三四二

E 現 代

今日の小説の持つ一つの底流について……………三七三

國文學の傾向



總論

史學といふものが、「社會的生物としての人間の、過去の推移展開を研究する學問である」と、言ふことが出来るなら、文學史を以てその中の文學的活動、文學的生活の發展の跡筋を辿る一分科であるとする考に異論は起るまいと思ふ。しかれば、文學史は、過去の人類の文學的生活、文學的活動の不斷の流れを如實に記述した書物であると定義することが出来るであらう。

處で、自分は何故に、かくは萬葉集や源氏物語を繙いてこれをよんで行つてゐるのであるか自分は書により耽つてゐた眸を反らして、時折、さうした懷疑心にふとつきあたることがある。「不_レ管好_レ之、亦樂_レ之忘_レ寢食」と宣長は、文學に對する己が執着の程を語つてゐるが、自分としては、たゞに

面白いから歌集を読むといふ解釋にのみ此場合満足してゐる譯にゆかない。更に、何故に愛讀するかといふやうに、疑問を追求したくなる。そこで、自分は、やはり右の歴史主義ヒストリシズムの價値を冥々の中に認めてゐる自分に氣付かされてくるのである。

惟ふに、一切の存在は、その流動の形においてのみ、その真相を捉へうるものではあるまいか。特に、文學の如き精神現象にあつては、その中に超歴史の分子を有せず、すべてが推移流動の過程の中に成立すべきものではあるまいか。更に言へば、文學的價値は、絶對的に存するものでなくして、相對的に史的に存しうるものではあるまいか。

近松の淨瑠璃を読む時、たゞ面白いから讀むだけのものであり、別にそんな時間的關係において作を鑑賞してゐるわけでない——と、さうとかく、われ／＼は思ひがちになるものである。しかしこれも考へて見ると、やはり偏した皮層的の見方たるを否むわけにはゆかぬ。と云ふのは、われ／＼は、單純な寫生文においてすら、作者の創作心理といふものを度外視しては、これを鑑賞することは出来なくなつてゐる。われ／＼は、作者が如何に題材を見つけてゐるか、如何に題材を取扱つてゐるか、と云ふ様な點を考へてみて、そこに作者自身の片影をみるとき、われ／＼の鑑賞は完全に遂

行され得る。近松の時代物なき、同時代の西鶴や芭蕉の作に比して、いかにも没主觀的、叙事的である。しかし、「國性爺合戦」なきについても、單にその筋に興味を持つてこれを辿る如き低級讀者はいざしらず、われ／＼が一步味識の世界に立入るならば、やはり、創作の態度如何と言ふことが、玩味の中心に入つてくべきだと思ふ。

しからば、かく作を通じて讀まれる作者とは如何なるものであるか。言ふまでもなく、美術的意識統一の主体者としての一人格者の謂である。この意識統一といふことは、半面に必ず意識の分裂といふことを豫想して上の言葉で、この分裂の背後には、更に大きい統一の可能性が作用してゐる。かくて、分裂と統一との交互作用は、意識成立の根本要件をなしつゝ、その藝術的人格体を、無限に展開せしめてゆく。その経路は、他の哲學や宗教等に屬する人格の伸長してゆく情態と、全然一致同調のものである。

こゝにおいて、一作品鑑賞と、文學史の研究といふ出發點を異にした二つの命題は、互に關聯してくる。更に、これを順序立て、言ふならば、一つの作品は、これを作者の全部の作品の体系の中にあつて見られる時、その眞味を顯はし、進んで、その時代の全部の作品の体系の中において讀ま

— 總 —

— 論 —

れる時、その眞價を一層明らかにし、なほ進んで、一國文學史の体系の中に置かれて玩味される時、いよくその眞相を顯現せしめる。もし、これを更に、世界文學史の体系に照應せしめるなら、われ／＼は完全に一作品の價値を認めることが出来るといふことになる。かく評價といふことは、相對的にのみ存しうるからに、文學についての史的知識が、如何に重大になつてくるかは、改めて言ふまでもない。

二

自分は、文學史の意味を定義して、本文の始めに、文學的生活の流動の記録であるといふ風に言つた。しかし、われ／＼がわが國文學史を瞥見したゞけでも分るやうに、文學史と言つても、各時代各人の正しい記録の傳はらない限、一般の歴史と等しく、取捨選擇された上の記録であることも必然である。かつ文學史の第一資料である文學作品の淘汰される情態を見るに、時代々々の文化目的の力に左右される點が甚だ多い。つまり、われ／＼は、資料によつて、價値觀念の個体化されたものを見るといふことにもなるので、従つて文學史と言つても、それは單なる記録だけのものでは

— 國文學の傾向 —

ないと言ふことが言へる。資料の上に時代の文化價値の淘汰をうけ、更に作者によつて歴史的經過を叙する目的に價値あるものが選ばれてすべてが價値關係の上に叙述されるのである。

さて、文學史はかく、(たゞ一回しか起らない)表現事實を、價値に關係せしめて研究したものである以上、所謂、それはリツケルトの個性記述の學であつて、果してそこに法則といふもの、交る餘地は、全然無いものであらうか。例を以て言へば、「歴史は繰更へす」といふやうな考は、文學史の上には、これを到底適用出来ぬものだらうか。この解決は、甚だ面倒のやうでありながら實は、反覆といふ語義を決定すれば、自ら分ることだらうと思ふ。

文學史を以て、藝術意識の創造的進化の体系といふやうに見るならば、その中に、一物として同じ物は無い、すべてはたゞ一回だけ起り得るものである、従つて正しい意味の反覆といふものは生じ得ない。これは、一個人の意識展開の情態におけると全然同一事である。しかし、個人意識がたえず、一縮一伸して統一的状态と分裂的状态とを繰更えず狀況と等しく(統一及び分裂の内容は、逐位的に増大はしてくるが)、文學史の流れにも、その相に反覆的のものがあることを認めることが出来る。例へば、理想主義文學の後に、浪漫主義の文學が續き、浪漫主義文學の後に自然主義の文學

— 論 —

が来る、そして自然主義文學の衰亡と共に理想主義文學の時代が再現される。しかしその理想主義は新理想主義とも稱せられてゐるやうに、内容において、前者と懸隔のあるものであること言ふ迄も無い。たゞ、われ／＼はこゝに態度状態において相互に類似したのを見る事が出来るのみである。リツケルトの言ふやうに、それは正しく二回目の反覆ではない、しかしまた、反覆的である意味に、歴史的法則を立てようとするコントなどの思想に共感しうるもの、そこにあることを否むわけには行かない。

作品の鑑賞は、その作品を文學史の體系の中に置いて見る時、完全を期し得られることは前説した通りである。この文學史の大系といふ意味は、單に史實を價值關係によつて叙述したものと異なる意味以外に、系列的に整理概括された文學史の内容を含ませたものである。漫然と叙述されたものだけでは、その價値の、現下の作品價値と相即する點がはつきり出ない。われ／＼自ら、文學史を考究して、興趣を覺えるのも、つまり、この大系に逢着して、そこに、文學者の相を捉へ得るからにある。更に言へば、文學史によつて、われ／＼は、われ／＼自らの文學の展開すべき方向を暗示せしめられるからである。

— 國文學の傾向 —

三

さて、われ／＼は、かゝる文學思潮の流れを、ひろく、インクワイネーション傾向と呼ぶことが出来る。しかし、

自分の問題にしたいのは、世界的普遍的に存する傾向でなくて、わが民族の生んだ文學史上に現はれた特殊の傾向についてである。しかも、なほ、傾向といふ言葉は、思潮の特色といふ廣い意味以外に、特に、狹義に没意志的な安易陶酔的推移のみ指す場合がある。倫理學上では、この傾向をカントが感覺的愛と同視して、偶然のもの、従つてその道德的動機たるを拒んでゐる。自分は、かゝる意味に於ける國文學の傾向について、些か短見を述べて見たいと思ふのである。

今、二千餘年のわが國文學史を回顧するに、われ／＼は極めて、類似した思潮の反覆されてゐる如き事實を認めることが出来る。もとより、再現されるもの、内容は、古いもの、追慕憧憬の情から將來された場合が多いから、兩者は類似してゐるだけのもので、内容においてはそれ／＼差別がある。所謂、文學の暗黒時代と稱されるものすら、時代を異にすれば、自ら、その性質を異にするといふ風である。

なほ、この國文學思潮の流れを、人一代の意識の展開に比して見るに、すべてが一致してはるない。と言ふのは、人一代の思想の變化は、ある時間的法则（ともいふべきもの）に準ずる外に、肉體的變化の影響を脱することが出来ない。例へば、文學者一代の文學的意識が、浪漫主義、自然主義、理想主義といふやうな徑路をとるものと概観されるときも、文學の時代思潮は、その三階段に止まつてゐない。かれは、更に、幾度もこれを繰更えす。それも、外來思想や、政治的革命等の影響をうけて、その週規律が様々でそれ〴〵に狀況を異にしてゐる。もつとも、巨細に檢べると、個人意識の進化にも、轉換期の起る關係は、一々これに類したものと云へようが、時代思潮の様に、はつきりそれが表現されてゐない。それに上述の肉體的影響は、到底これを擺脫することが出来ぬ故に人は、時代の流れのやうに、いつでも若返る譯には行かないといふことになる。

それと今一つ、過去の國文學（正しくは大和民族文學）は、多くそれ自體の中で生長して來た。恰も、孤寥獨歩の人の倂がある。一般の人間の生活は、かく迄、獨立するわけにはゆかない。もちろん、國文學は、過去において、大陸の影響もこれをうけてきた。しかし、わが國に新文學を提供した國といへば、僅かに支那あるのみで、それも、間斷なしに輸入されたといふ譯のものではなかつた。

た。むしろ、靜に受け納れて、すべてを順調に齟齬し得た程度においてあつた。これは、偏に、わが國が島國であつたがため、譬へば双が岡に庵居する隱者のやうな地位にゐたのであつた。そんな場合にも、自分だけの世界を持つてゐて、盲目的に他の勢力に屈從せしめられるといふことは無かつた。

しかし、この特色は、今後の國文學に保證することは不可能であらう。先月、モーランがかきあけた作品が、此月はわが新聞紙上で紹介されるといふ時代である。例へば、日野山の奥にもラヂオが据ゑつけられ、都の消息が間斷なく入らうものなら、鴨長明も、香氣に三十一文字を繰つてゐるわけには行かなかつたであらう。大和民族の現情と等しく、國文學の流れも、かくは、明治大正に到つて、絶大な試練を経しつゝあるのである。

以上、わが過去二千年に亘る文學的意識の流れのおほむねを、個人意識の流れに比較すれば、ほかやうな關係を認めることが出来るやうに思ふ。

さて、わが國文學思潮の流れの中で、最も、鮮かな形をとる情態は、分裂の時期におけるものより、むしろ統一の時期におけるものである。これは、つねに破壊的であるより、崇古的保守的建設的である島國民族の特種に基づくものとも言ひ得よう。また、文學が現實相のために左右されず、つねに、高踏的超越的であつたといふ國文學者の特質にも由來するであらう。また、外國の侵略を被つて、一時に國民文化が根柢から履返されたるといふ様な危機に遭はなかつた國狀にも關係してゐるであらう。

— 國文學の傾向 —

およそ、一時代の文學は、傳統的要素以外に、民族の特性、中心人物の個性、及び世相等の諸要素の影響によつて、特質を構成するものである。その結果、文學の發達は大體、古典主義浪漫主義自然主義の徑路を辿るものであるとしても、その展開推移の狀況は、各國各民族によつて千差萬別となる。

國民性の中、その崇古的集成的態度について考へて見るに、それは、そのまゝ、各時代の文學に反映してゐる。例へば、和歌史上に現はれた古今集の勢力、小説史上に現はれた源氏物語の影響などは、それら作品の本質的價值以外に、その古典的魅力といふものを考察の中に入れないと、十分の

解決がつかねるであらう。故に、公家文化の崩壊して興起した鎌倉の尙武的時代においてさへ、また、浪漫的思想の没落後の現實的思想の時代においてすら、一味の古典思想の流を拒絶することが出来ないのがわが文學の特質であつた。

○ 高踏的唯美的傾向の如きも、一般にわが文學者に共通した傾向である。かれらは、決して自我の面目を發揮しようとはしない。しかし、空麗な詩神の殿堂に參する敬虔な一使徒であることを喜ぶ。故に、現實を離れ、民衆と手を別ち、獨り幽玄の徑を辿る境遇を恐れない。かれらは、醜なる現實に面接するには、餘りに勇氣に乏しく、あきらめの甘味を知つてゐる。また、詩心への陶醉の甘

美さも感じてゐる。故にかれらは、藤原朝時代の歌謠を、容易に天平期の世界にひき入れてしまつた。古今調といふものを新古今調に移していつた。神樂や催馬樂或は唐樂といふやうな舞樂を、程もなく能樂といふものに大成せしめた。突兀として現はれた俳聖芭蕉の藝術を天明の俳風に推移せしめた。そこには、爛熟期を招致する文學自體の傾向流遷の力も關與してゐるであらうが、また家持俊成、世阿彌、蕪村等の等しく持つてゐた詩心的特質に負ふところも尠少で無いのである。

儒教と佛教は、相並んで、二千載のわが文化の大きな基調をなしてきた兩勢力である。特に兩者

— 論 —

— 總 —

の持つ形式主義や理想主義は、甚大の影響を國文學の上に印してゐる。例へば、平安朝文學の主情的浪漫的に見えながら、半面に極めて濃厚な形式的理想的色彩の陰を落してゐる如き、また、徳川時代の町人文學が、遂に生えぬきの奔放さを示し得ず、諧謔の世界に閉ぢ込められた如き、いづれもわが文學思潮の特色を形成してゐる。いはゞ、わが國には、眞に浪漫的の宗教運動や思想運動の起り得なかつた如く、文學上にも華々しい浪漫主義的革命は將來されなかつたのである。スツルム。ウント・ツラングは、その臭味だけ止めて、復古へ、摸寫へ、成型へと轉向したのである。

— 國文學の傾向 —

以上、これを要するに、國文學の流れは、史的方面と環境的方面とに支配されて、わが國特有の情態を示してゐるが、その中、最も、國文學の特色と見做すべき傾向は、新文學興起の瞬間でもなく、外來文學舶載の刹那でもなく、成型し、完成し、爛熟するその推移にあるやうに思ふ。その経路における妙趣ある傾向は、全く、わが文學の第一特色をなすものと斷言しても介はない。

五

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其實通す

るものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずと云ことなし。おもふ處目にあらずと云ことなし。思ひ、花にあらざる時は夷狄にひとし。心、月にあらざる時は、鳥獸に類す。夷狄を出、鳥獸をはなれて、造花にしたがひ造花にかへれとなり。

— 總 —

この一節は、いふ迄もなく芭蕉の「笈の小文」の冒頭にあるかれの藝術論の一端である。造花に従ひ造花に歸れ——と叫ぶところに、かれの自然本然の性に復歸しようとする要求が顯出してゐる。歌道、連歌道、畫道、茶道(のみならず、すべての文化的現象の)すべては、自然本然の位置に置かれる時、始めてその正しい面目を發揮し得る。この説明は、最も簡明に國文學の本質を穿ち得た言葉ではあるまいか。

— 論 —

なほ、芭蕉の言ふ自然(造化)たるや、雜然荒涼たる自然の相を意味してはゐない。即ち、夷狄鳥獸の持つ如き本能を指さない。何處までも、われ／＼自らに調和を得た自然相をのみ指す、統一を得た本然の姿をのみ意味する。それが所謂天地の風雅である。しかし、かゝる自然の調和相、風雅の中から、さうして文學が生み出されるか、また、藝術發生の理由が存し得るか。

花や月は、そのまま調和を得た美相に相違ない。しかしわれは、これら自然の現象そのものを勝手に更えるわけにはゆかない。さりとて、天空の月を中庭の池に映して眺め、丘の櫻樹を庭前に植ゑかえて觀賞する程度のことなら誰にも出来る。これは、自然現象の生起をわれは人間の意思によつて、その隨意の方面だけを動かして見たものと解釋され得る。即ち、人間の意思創造の作用が見えるわけで、そこには、粗野な自然の美と異なつた人間美、藝術美が生み出される。雪舟の繪は決して自然の摸寫でなく、利休の庭造は、自然の移植でもないが、しかも獨特の美を持つ所以のものはこの點にある。人間はかゝる創造の意識なしには、到底そのまゝには生き得られない。

しかし、これを以て自然への反逆と誤解してはならない。人間は自然に背いて一日も生存し得ないものである。たゞ、人間は（鳥獸夷狄と異り自意識を持つ動物として）、その特有の自由意志なる意識によつて、自然の上に働きかけることにより、創造發展の生活を營み得るといふだけである。芭蕉の造化に還れと絶叫したのもこの問題である。不遜な人間は、いつか自然の根本を没却し、自然に依存すべきことを忘却して、傲慢にも獨り立ちし得るものゝやうに誤解する。こゝに似而非文化、似而非藝術が、わが物顔に横行する。芭蕉は、西行を想ひ、宗祇を忍び、雪舟を追慕し、利休

— 國文學の傾向 —

— 論 —

を敬慕して、更に現代を望見する時、いよゝ自然依存の意義深いことを痛感せざるを得なかつたのであらう。特に、徳川時代初期二百年の間は、民族思想の分裂の最も鮮やか時期であつたから。しかし、眞の美境が、自然と人間との交渉状態の中に發見するべきたと言つて、一にも二にも造化への還源を主張することは誤りである。東洋藝術の短所は、かゝるイメージ・ゴイングに伏在してゐるやうに思ふ。われは、芭蕉を以て、西行宗祇の上に置く所は何か。言ふ迄もなく、かれは自らの中における多様の分裂と、その眞摯な統一の態度において、はないか。なるほぎ、かれは造化への復歸を稱導した。しかし、かれは半面、世相、混沌たる環境を直視する勇氣を忘れなかつた環境や事情やは、これを異にするけれど、古今調の基礎を作つた貫之、萬葉調を樹立し得た人麻呂なごの特色にも、かゝる努力が預つて力あつたゝらうと思ふ。かれらの態度には、何れも血の滲み出るやうな苦患の跡が印せられてゐるのである。

六

家持、俊成、蕪村等は、更に、これらの人々を繼いで、それら藝術の世界に遊適して行つた。

かれらの藝術の本質が、なほ、東洋流の風雅の世界に屬するものであること言ふ迄もない。やはりかれらは自然を基調としてゐる。むしろその題材から見れば、より多く自然現象から材料を選択してゐる觀すらある。しかも、われ／＼は、前衛の人々に比してある危険、ある薄弱さをかれらの中に感ずるのは何故であらうか。

人事を題材にするといふことが、そのまゝ、自然への反逆といふやうに考へてはならない。藝術の中でも音樂を見よ、建築を見よ、かれらは自然の摸寫といふことから全然解放されてゐながら、なほ、自然本然の相に冥合し得てゐるではないか。古今調や蕉風は、まことに、かゝる状態に存するものである。

しかるに、新古今調や天明調を見るに、それは叙景的ではあるが、嚴密に客觀的ではない。われらの詩境はあまりに狭められ、既に多様の統一味から受けうる健全性を排除してゐるのである。爛熟しかけてゐる。頽廢の臭味を洩らしてゐる。統一のための統一となつて、そこからはすでに新生面の打開が期待されてゐない。行きつまらうとしてゐる。切れようとする糸に繋がれた寶玉のやうな幽美さのみが、われ／＼を包んでくれる。

— 國文學の傾向 —

— 總 —

自分が、多少とも古典に親しんでいつたのは、漸く京都の學校にゐた廿三四歳の時期からであつた。以前に、受験準備として徒然草を通讀し、教科書として源氏物語や枕草子を教へられたけれどそれらは少しも自分の興味を惹かなかつた。むしろ自分の好みは、歐米の近代小説の上に一年々々深められていつたのであつた。しかし、その中にも、國文學に對する會得が、少し宛進んでいつてまづ詩歌に興味を抱いた。そして、萬葉集も面白いと思つたが、むしろ新古今集を愛讀し、元祿の俳風も立派なものだと思つたが、むしろ天明調の方により多く心を惹かれた。つぎに、散文風のものでは、更科日記、平家物語、芭蕉の紀行文などを面白いと思ひ、それらを材料として論文めいたものを綴つたりした。

しかし、今から追想すれば、その當時、人麻呂赤人の歌風、古今調の甘味なき、殆んゞ鑑賞出来なかつた爲めに、かくは疎外したのである。もつとも今ですら、貫之の歌の本質や芭蕉の句の眞味が、ほんとうに分り切つたもののやうには思つてゐない。たゞ、この三四年、さうやらその骨につきあつたやうな、大體の目當めあてがついたやうな氣がするだけのものである。徒然草なきについても同様であつて、ある時期に、かうだと信じてゐたことが、いつか年と共に朦朧となつてくる。以前

の解釋に對する新しい疑惑が昂じてくる。そして第二段の新解釋に這入り、それがまた、いつか崩されるといふ風で、中々、最後のものに打ち當つて來ない。

これらに比較すると、新古今調や天明調や、更科日記や平家物語や謠曲詞章などについては、會て、こゝだと目處めどをつけておいたことが、殆んど動搖しないのである。無論、見方に多少の推移もありはあつたけれど、その原因は本質的のものでなく、主として技巧方面にのみ係はつてゐた。すなはち、その骨は動かないけれど、肉付けの技術だけのものに新しい發見なきして、今迄見落してゐたものに美を見出だすといふ風であつた。全くそれらの美に對しては、一般的の尺度を用ふることを許されない、それはその雰圍氣にある者のみ鑑賞することを許されるやうな特殊の性質のものである。これは、能樂や歌舞伎の鑑賞における心理なきとも一致してゐる。熊樂や歌舞伎に對しても、一般の演劇上の批評を應用することを許されてゐない、また、恐らくそれらも時代の推移と共に消滅するものであらうがしかも、その保存を強要される如き特殊の甘味をすらその中に含んでゐる。

それは、われ／＼を環る現實的生活とは、餘りに懸け隔たつた、そして直接に、われ／＼に迫り

— 向傾の學文國 —

— 總 —

われ／＼を動かしてくれない世界である。しかし、それは萬物の眠におちる深夜のやうな蟲惑を持つものである。八百煩惱に燃えてゐるわれ／＼の心も、一步その扉を叩いて入れば、忽ち、慈母の愛撫をうけてゐる幼兒の心に還り得る。そこは藝術界の淨土である。佛教徒にとつて西方淨土は、いかにも縁近い、親しい境地である。その様に、われ／＼にとつて、この美の玄境は、一本橋隔たつたその向ふなのである。古今調が金葉詞花の諸集あたりで、崩れかけようとする、その流れは極めて順調にこの幽玄境に滑りこんでしまつた。室町時代をめぐる連歌能樂茶道繪畫等諸藝術の精神、天明時代の諸藝術の精神（それはかなり雑多に亘つてはゐるが）何れも、かやうな過程において醸出されたものと見て、大した獨斷とはなるまいと思ふ。そこには、魔訶不思議な心の飛躍がある悟脱がある。しかも、それはわれ／＼東洋人にのみ許された秘密と見るべきものである。われ／＼の全身のうけいれた傳統性の持つ一つの型、心の構へ方である。（拙著「國文學の本質」参照）

七

時代はうごく、自分は、今更、現代の同胞に、この夢幻郷の效能を述べようとは思はない。しか

し、われ／＼の心が、何等かの鋭角にうちあたる時、果して、かゝる傾斜面を知らず識らずに描いてゐないだらうか。大正の現代にすむわれ／＼が、つねに、かうした傾向の傳統的反覆を避けえてゐるであらうか。

本書は、各方面に亘つてこの解決に役立つであらう。

藤原期より天平期に及ぶ歌詩の結晶

萬葉集の内容と言へば、それは醇真である、表現と言へば、それは素樸であるといふこと、それは、もはや殆んど一つの定説として一般に承認されてゐるところである。さらに、萬葉集の歌を古今集の歌に比較して、後者を完璧洗煉情景一致の詠藻であるとするに對し、前者を未完成未熟しかも男性的遒勁味に富んだ歌集であると評價することに、誰も多くの疑ひを抱かぬやうに見える。しかし、これらの評價には多少の早合點の嫌ひは無いであらうか。「こもよ、みこもち」をもつて始まる萬葉集卷一か乃至卷二位の範圍を讀んで、全集を臆斷してゐるやうな手落ちは無いだらうか。總じて古典鑑賞の當初における缺陷は、第一に熟讀玩味の不足、第二に簡結な評語を求めすぎた點にあるやうに思はれる。源氏物語の批評においても、須磨明石の卷までか、せい／＼宇治十帖あたりを見渡して、全部を手短かに要領よく評價し去らうとする。これは、源氏物語のみに止まらぬ

古今集全體を、季歌のみを以て評品しつくされるやうに思ひ、芭蕉の藝術を芭蕉發句集のみで鑑識されるやうに思つてゐたのは、さう古い昔のことではない。明治に到つて古典研究の趨勢と共に續出した國文學史の多くは、かゝる意味においてそれ自らに多くの誤謬を含んでゐるのみならず、古典評隋の上に一つの公式を立て、しまつたそのことは、かなり好ましからぬ結果を遺してゐるやうに思ふ。上述の萬葉集に對する評語なきがその一例であると自分は思ふ。

そこで、自分は、萬葉集の主要歌人の作を爛熟期の藝術と見た上で、少し管見を次に述べて見たいのである。憶良や旅人の作は言ふまでもなく、赤人や人麿の作をも一種の完成した藝術、むしろ類廢期の藝術として見ることに、さまでの支障のないことを、自分は信ずる。

惟ふに、批判といふ精神作用は、それが印象的のものであると、科學的のものであると、差別なく、それが一つの判断である以上、すなはち評價である以上、比較による認識作用と歸納的精神を缺くわけにはゆかないだらう。こゝにある一つの作品の批判にあつて、その全部を味識すべきは勿論、最後の判定を下すまで、出来る限りに環境や作者を考へておくべきことは、假令プロセスがテ—又流義で無くとも、大切な用意ではあるまいか。それは、品隋しようとする作品に對し、批評家

の懷抱すべき徳義心であり義務であると言つて差支あるまい。

萬葉集に對する批評の落ち度も、多く、この點に原因してゐる。例へば、藤原奈良朝時代に對しても、千餘年の上世で、その世相は杳として究明しがたいもの、やうに早合點し、各作家に對しても漸くかれらは紀記の編纂時代に生存してゐた文化程度の幼稚な者のやうに思ひ込んでしまふ。その結果は、散逸したであらう作品や、外來文學の咀嚼の程度等には、ほとんど無考察に、獨斷を下すといふやうな結果になる。われ／＼は、上代歌謡の研究にあつて、須臾も念頭から離してならない點は、現存の上代歌謡といふものは全部の一部分であること、持統天皇の即位の年代は、かの百濟の王仁が論語千字文を獻じた年から、すでに四百年目であること——まづ、かうした大綱目の上にあるのではあるまいか。

わが上古における行吟傳誦文學(遊離的)時代と、記載筆録文學(固定的)時代との境界線は、他民族の文學史上の事實におけるやうに、はつきり定める譯にはゆかない。しかし、紀記の編纂以前に

多數の記録の存してゐること、歌集などの編まれてゐたことは、疑ふことを許さない事實で、この資料は無いけれど、かなり古くまでこれを遡ることが出来るやうに思ふ。「始之於諸國置國史」記言事達四方志」とは履中紀に見えてゐる所で記録的事業の、應神天皇の御代から程もなくおこされてゐたことがこれで分る。

世の多くの文學史家が、敘事詩を以て詩歌の發生的性質のやうに言つてゐるのは、全く記載文學の上についてであることを思はねばならぬ。もちろん、泰西文學の祖と考へられてゐるホーマーは行吟詩人であり、そのイリアッドはかれの手で記載されたものではない。しかし、文學を記載し傳寫して後世に遺さうとする意思の確立した始めと言へば、やはり、イリアッド的敘事風の民族詩でなければならぬであらう。かくて詩經にしても、吠陀の歌にしても、わが紀記中の歌などにおいても、多分の歴史的、物語的、敘述的要素が、その中にある。しかし、われわれは筆録されず、一度語はれたまゝで埋滅して仕舞つた多くの抒情詩の存在を、それら記載文學以前に、乃至その時代に想像することが出来るのである。

と言ふわけは、わが民族精神が漸く統一の端緒につき、所謂物心の二元的意識が成立し、回顧的

史述的要求から、纏められた紀記、しかも敘事上裝飾的に説明的に挿入された二千年間に關する僅か二百首足らずの歌謡を以て、その敘事的詩味を重視しわが萬葉集以外の上代の藝術のすべてあるかの如く考へる人に、反省を求めたいのである。

應神天皇の御代に、王仁が千字文をわが國に輸入したことは、わが國にそれ迄特有の文字が発生せず、文化の低かつた、めとはいへ、ある意味では、甚だ、悪い結果を生んだことになる。漢字そのものは、今日から見て色々の點に長所を持つてゐる。さりながら、始めて文字を持つ民族、始めて文字を學習する人間にとつて、その表意的であつて非表音的であることは、想像以上に不利益なものであつたに相違ない。もし、文字を持たない應神時代のわが民族に、王仁によつて假字のやうな表音文字が將來されたのであつたらう、わが文學の面目がその後如何様に展開されてゐたかは、全く想像も出来難いほゞであつたらう。主觀的、抒情的歌謡が紀記歌以外に傳はり、敘事的詞章もかの紀記中の如く、故意に改竄され、誤傳もされるやうなことはなかつたであらう。

それはともかく、舶載文字の性質上、わが歌謡が記録されず、正しく傳へられなかつたといふ事實は、別に、わが歌謡の發達がいつ迄も原始状態に止まつてゐたといふ證左にはならぬ。完全で便

利の記述法を持たないといふことは、多くの作品を散逸せしめたといふ結果には陥つたが、傳誦により聴取によつて、自らその間に練技彫琢の施されて來た事實は明らかである。まして、漢字を表音文字として取扱ひ、隨分面倒ではあつたらうが、國歌を記載する方法を殊更講じてからは、意識的の修辭が凝らされること、なつた。例の古事記の序文に「已因訓述者詞不逮心、全以音連者事趣長云々」とあるやうに、記述法についても、それ迄長く試練を経た結果、古事記的記載法、萬葉集的記載法やがそれ／＼編み出されたのである。

こゝに、書紀所載の歌謠、なほ古事記所載のものに到るまで、これを仔細に檢べると、そこには所傳のものを殊更、素樸化せしめようとする技巧の跡さへ見える。神代紀中の歌謠にしても、それが盡く、太安麻呂なきの手によつて始めて記載されたものでないことは言ふまでもない。口より耳へ、耳より口へと時代を追ひ傳誦する間に、漸次、流動變形したまゝ、——あるものは、夷曲ヒキョク、宮人振、天田振といふやうに純粹歌詞として——記録されてきたのである。同一の歌も、記録者を異にする時、二様にも三様にも別物になつて傳へられる。紀と記とは、かゝる原本を異にするのであらうが、總じて紀の方には、反覆句も反覆なき句とし、結句もこれを傳へないといふ風に、簡結に

なつて傳へられてゐることは、一目兩者を比較して見ればすぐ肯かれる。かゝる記載上の相違が雄略天皇の御代頃から、漸次無くなつてゐる事實は、やはり、記載法が幾分でもその頃から確實になつたことを語つてゐるものではあるまいか。

これを要するに、紀記中の歌謠は、内容からこれを見るも、形式からこれを考へるも、正しい所傳でなく、萬葉歌以前の歌謠の情況を考へるに不備の點が多いことが知られる。自分は、大體、應神天皇時代以前の諸詠はもつとこれを原始化して考へ、その時代以後の詞藻には、それら以外に、様々の形態の作を假想し、萬葉集なきを参照してもつと完全なものに考へて見るべきものではないかと思ふのである。

三

萬葉集の全歌數約四千五百餘首の中、明瞭に天武天皇時代以前の作と見得るべきものは、僅かに九十四首だけであるが、この點からして萬葉集中心の生命は、さうしても藤原奈良朝時代に索めねばならぬことになる。そして、その時代の初頭において、すでに歌聖柿本人麿を見るといふことそ

のことが、如何にも餘りに、唐突すぎることはあるまいか。果して、かれは傳統的に何等教へられるものなく、また外來的にも何等導かれることなく、もつばら天成的に詩心を恵まれて出現したものであらうか。在來の文學史家が、その點を資料の少ない理由か、あまり明らかにして居らぬのは、まづ自分の遺憾としたい點である。

しかし、自分が源氏物語、平家物語、蕉風俳諧などを考へる都度、同一の結論に到達したものはそれら傑作の作者達が、創造的精神と共に多分の集成的能力を活用してゐるといふ事實であつた。一面からこれらの諸作を見れば、完全に創始であり發見であるけれど、他の半面から見れば、環境をなす諸作品の巧妙な統整である。従つて一度新鮮味ある表皮が脱落すれば、中味は爛熟の芬香に充ち満ちてゐる。故に創始者一たび逝いて、追隨者の時代になれば、必ずそこに頹廢感が生ずる。支離滅裂がおこる。「幼年未_レ遂_ニ山柿之門_ニ云々」と言つてゐる大伴家持の言葉を思へば、人麿から家持への流れには、明らかに芭蕉から蕪村への流れに、や、鬚髯たるものがありはすまいか。人麿によつて集大成された藝術が、半世紀の間に美事に腐爛してゆく様を、自分はそこにあり／＼と感ぜられるやうに思ふものである。

先づ、持統天皇即位前約半世紀の歌壇を追懷して見るに、紀記には、ほとんど資料として擧ぐべきなきの資料が無いと言つてよい。元來古事記の方は、仁賢天皇の御代より以後歌謡の所載は絶対に無く、書紀の方に載せられたものと言つても、主として童謡か、然らずんば歴史のものに過ぎない。その舒明紀以後を見るに總計廿二首の中、童謡十一首、猿の歌一首（これは童謡に準すべきもの）、他の作十一首の割になつてゐる。他の作十一首といふも、その中、抒情味のある數首の弔歌を除けば、他は諷諭的の歌のみである。思ふにこれは、當時すでに、私歌集なきに多くの相聞歌、羈旅歌なきの名歌が傳へられてゐたために、修史的編述の方針から、すべて、これらを割愛した結果によるものではあるまいか。

然らば萬葉集自らの中には、この半世紀間の作が如何様に遺されてゐるか。まづ持統天皇即位前五十年間にこの世を去つたと推定され得る歌人の主なるものは、舒明、齊明、天智、天武の諸帝の外額川女王、中皇命、藤原鎌足、倭姫太后、麻績王、十市皇女、鏡女王、藤原夫人、紀皇女、大津皇子、草壁皇子、高市皇子、弓削皇子、大伯皇女、なきである。これらの歌人の作は、直接間接に人麿に影響したことは當然である。しかも、これらの宮廷文學は、かの童謡の朴直であるに反し、如

何にも洗練彫琢を経たものである。そこには、すでに明瞭な創作意識が働き、詠歌上の成心が出来てゐる。漢文學の影響が見えたと共に、これに對抗しようとする自負精神も見え、なほ、その貴族味、ブルジョア精神、遊戯的態度が藤原奈良朝の爛熟期を豫想せしめるに充分である。

すなはち、内容上からすれば、舒明天皇の國見歌や、額田女王の春秋優劣論歌などには、大陸文學の投影が見え、挽歌の中には極めて觀念的のものが現はれ、天武天皇と藤原夫人の降雪に關しての贈答歌のもつ諧謔味には貴族的機智が働いてゐる。また、形式上から檢べて見ても、對句聯句の修辭は、中皇命の作、天智天皇崩御の時某婦人のよんだといふ挽歌、天武天皇崩御の時大后の御よみました御作等に十分の進歩を示し、序詞歌も「玉くしけ見むろの山の狭なかづら——さねすば」とか、「河上のいつ藻の花の——いつもいつも」とかいふ風に中々巧妙に使はれてゐるし、天武天皇の御製といふ「よき人のよしとよく見てよしといひし——」の作は、全然文字的遊戯歌である。その中でも、井戸王、額田女王、天武天皇御作の諸長歌は、内容と表現との間に隙のない、いはゆる一枚になりきつてゐる絶品の作品ともいふべきである。なほ、一般に回顧的述作の多いのも、感覺的原始歌に遠ざかり、久米禪師が石川郎女を憐うての五首の贈答歌の如きも、原始的戀歌と成立を

異にしてゐることを語つてくれるものである。

四

天智天皇の御代前後は、大陸の文化が荒まじい勢を以て流れ込んで來た時代であつて、歌謡記載の術もその間に甚だ普遍化したものかと思はれる。即興的刹那的吟詠が記載的普及的詞歌に推移する時代程、歌謡史上大きい時期を劃するものはあるまい。情歌さへも、相手にのみ與へられるものでなく、博く世人に鑑賞せられるものだといふ意識によつて作られる。その心理は、傳誦文學時代の童謡の創作心理に近いものである。雜歌も挽歌も、結局、世人並びに後世の人に見せるための歌といふことになる。その意識が、表現法の普及と共に、俄かに勃興し、こゝに藤原奈良朝といふ詩歌の爛熟期を形成したものはあるまいか。書紀を見ると、齊明天皇が愛孫建王を悼んでよまれた作を、後世に遺す様、勅されてゐるが、かく表現欲の中にその永續性を希ふ分子の醸出することは當然の徑路と見るべきものであらう。

さて、創作意識を明確にせしめた第一の原因は、大陸文學との交渉の上にあつた。論語千字文の

輸入されてから四百年に近い年月、漢學の普及は眞に遅々たるものであつたには相違ないが、この日月の力は必ずしも徒爲では無かつた。かの聖德太子を始め、大友皇子、太津皇子、川島皇子の如く自ら漢文漢詩を作り給ふ方々も輩出された。常初歸化人の手に委ねられた史官も、わが國人の手に移るといふ有様となつた。こゝに、國人漢魏六朝の文學を味識すると共に、心に浮ぶものは國歌の培養育成の希望でなければならぬ。低い文化の中に、高い文化が浸蝕してくる時、低い文化國に無意識の摸倣、盲目的追隨が行はれることは、いかにも否みがたい事實である。わが歌謡は、かくてこの時代に人爲的に、漢詩のレベル迄引きあげられ、一種の爛熟時代を來したのであるが、その可なり不健全のものであつたことも、當然の結果と見るべきであらう。

人々は棄て、餘り顧みて居ないやうであるが、當時の漢詩文の力はしかく輕蔑するほどのものではないかと思ふ。

更廻車駕幸現原之丘供奉御膳于時天皇四望顧侍從白停輿徘徊舉目盼望山河海曲參差委蛇峰頭浮雲谿腹擁霧物色可憐鄉體甚愛宜可此地名稱行細國者後世追跡猶號行方……これは常陸風土記の一節であるが、恐らくこれらは高橋蟲麿の如き、餘り高からぬ地方官の筆致

だと想像されるが、すでに當時かなり漢文學の普及した情態の一般が想像されるではないか。なほ、「近山自覽黃葉山林之色、遙海唯聽蒼波激磧之聲」(常陸風土記)とか、「街巷之談猶有可取、庸夫之思不易徒棄」(古語拾遺)とか、それから古事記序や書紀の中に多く散見する對偶靡麗の辭用についてあるが、これは魏の陸機から熾になつたといふ六朝排偶と同傾向のものであり、屢々その摸倣である。とかく内容より彩麗な辭句を過重するこの特色には、自分も贊意を表しがたい一人ではあるけれど、それがために、これに類する文學の全部を抹殺すべきものではないと思ふ。まづ懷風藻にとられた前記の大友、川島、大津の三皇子の詩をあけて見ると、

五言侍宴一絶——大友皇子作

皇明光日月。帝德載天地。三才並泰昌。萬國表臣義。

五言述懷一絶——同

道德承天訓。鹽梅寄眞宰。羞無監撫術。安能臨四海。

五言山齋一絶——河島皇子作

塵外年光滿。林間物候明。風月澄遊席。松桂期交情。

五言春苑宴一首——大津皇子作

開_レ衿臨_ニ靈沼。遊_レ目步_ニ金苑。澄徹_ニ苔水深。曖曖_ニ霞峯遠。

驚波共_レ絃響。呀鳥與_レ風聞。群公倒載歸。彭澤宴誰論。

五言遊獵一首——同

朝擇_ニ三能士。暮開_ニ萬騎筵。喫齏_ニ俱豁笑。傾_レ盡共陶然。

月引暉_ニ谷裏。雲旌張_ニ嶺前。曦光已隱_レ山。壯士且留連。

七言述志——同

天紙風筆畫_ニ雲鶴。山機霜杼織_ニ葉錦。(コレニハ後人ノ聯句アリ)

五言臨終一絶——同

金烏臨_ニ西舍。鼓聲催_ニ短命。泉路無_ニ賓主。此夕誰家句。

これらを誦して、自分はその以外に同時代の作の多く傳はるところのないことをいよく怨むものである。しかし、奈良時代にかけて索めるなら、この外に懷風藻やまた經國集の中から、なほ多少の漢詩文の佳作を挙げることが出来ないでもない。

惟ふに、六朝時代はわが藤原奈良朝時代と、ある氣脈において共通するところがありはしないか。

六朝時代の思潮は、その文學に立派に反映してゐるやうに、漢末の争亂の後をうけた疲憊と頹廢の時期である。例の竹林七賢流の清談が行はれ、佛老の虛無淡泊の思想が割込んで來たのは、儒教に隙が出來たからである、儒學を口にするものがあるけれど、それも形骸にすぎず實踐道德としての論ではなかつた。その後半期は遊宴荒怠と言はうか刹那主義享樂主義的思想が益々流行すると共に、幻滅憂苦の人は、隱逸安住清閑孤棲の道教的趣味や罪滅懺悔未來托生の宗教上の救濟を求めて行くといふ風であつた。従つて、當時の文學は流麗彩華でありながら、その底に倦怠と枯寂の味を含めてゐるものが多い。わが國にひろく行はれた文選を繙いて見るがよい。それには出師表や過秦論の如き表類論類も見出されるが、前半の賦類や詩類を見わたすと、その彫琢鏤心の間に却つて行きつまつた世相が顯現し、才華富麗の間に一脉の哀調が漂つてゐるではないか。陶潜の歸去來辭、潘岳の閑居賦、共に人の知る通りであるが、確に外枯中膏の味に富んでゐることは肯かれよう。と、較べて來ても自分はこの文藝的色彩を、直ちに萬葉集の上に適用しようとするものではない。

しかし藤原朝から天平期に移つてゆく時代思潮の跡を追へば、そこには、ある六朝氣分に感觸してゆく徑路を辿り得るやうに思ふ。かつ、文選が白氏文集に連なり、その兩書が國文學者鍾愛の流

れを作つたことは、いかに、國文學の大成にそれらが大きい影響を印したかが窺はれる。こゝに、萬葉集の中に、文選白氏文集の氣分の萌芽を嗅がうとすることの必ずしも無暴でないことを思ふのである。

さて、人麿の眼前にも文選がぶらさがつてゐた。また、六朝から初唐の詩人の私集が、咫尺の間にちらついてゐた。周圍には藤原不比等、山前王、三方沙彌、刀利宣令、調古麿、長屋王など多くの漢詩作者が群立し、時の帝、文武天皇も自ら延臣の中にあつて詩作されてゐる。人麿の天賦的詩心がこの際、傳統的國詩の發揚に對し、その觸手を動かし始めることは、餘りに當然である。

人麿の歌人としての特色は、いふ迄もなく長歌作者としてある。既にかれ以前、中長歌に數ふべき軍王の從駕における詠出もあつたけれど、句數は未だ三十句に足らない。百四十九句迄の長篇を堂々と賦し得た才幹技倆は、確かに人麿の詩才において始めて求め得られるところであつた。しかもそれが、張衡の西京賦や左思の三都賦等大陸の賦類の影響であること殆ど疑ひなき事實である。曾てわが歌謡には、情歌で相當スケールの大きいものもあつたが、未だ構想的に雄渾莊重なものはない。かの潘岳の西征賦に比すべきものなく、木華の海賦に並ぶべき作もなかつた。

— 國文學の傾向 —

た。こゝに、「玉だすき畝火の山の——」と、近江の荒都を過ぎるや、その感懷を詠じ始めた人麿の着眼には、驚嘆すべきものがあると共に、六朝の辭賦の影響を一面に聯想せざるを得ないのである。

集中、人麿作と明記された長歌はすべて十六首であるが、この舊都の詠歌を除き他を類別すると從遊における作四首、挽歌八首（その中四首は皇子皇女の殯宮時の作）獻歌一首、相聞二首の割合になつてゐる。從遊獻歌や殯宮時作歌における人麿の詩才には絶妙のものが出てゐるけれど、それは最も格式的のものであり、詠草のための詠出であつて、如何にも素樸味の乏しい辭令文學の臭味を感じざるを得ないものである。内容は大分違ひはするが、陸機の挽歌詩三首などと、如何程の徑庭がその間に存するかを疑はざるを得ない。侍宴の作は前掲大友皇子や大津皇子の所詠の中にもあつたとほりで、かの從駕の作などと等しくすべて應詔的の作品は、その性質上形式化し生命感の乏しいものになりがちなことは、懷風藻中の諸作が適例となつてゐるのみならず、大陸の諸作が立派に例證してゐる。つぎに、懷風藻中の吉野從駕の作（計五首）と、萬葉集中の吉野從駕の長歌の作（計十首）とを比較して見ると、

— 藤原原期より天平期に及ぶ詩歌の結晶 —

五言從駕吉野宮應詔二首——大伴王作

欲尋張騫跡。幸逐河源風。朝雲指南北。夕綉正西東。嶺峻絲響急。谿曠竹鳴融。將歌造化趣。握素愧不工。山幽仁趣遠。川淨智懷深。欲訪神仙迹。追從吉野澤。

五言扈從吉野宮——紀男入作

鳳蓋停南岳。追尋智與仁。嘯谷將孫語。攀藤共許親。峰巖夏景變。泉石秋光新。此地仙靈宅。何須姑射倫。

五言從駕吉野宮——吉田宣作

神居深亦靜。勝地寂復幽。雲卷三舟谿。霞開八石洲。葉黃初送夏。桂白早迎秋。今日夢淵々。遺響千年流。

五言從駕吉野宮——高向諸是作

在昔釣魚士。方今留鳳公。彈琴與仙戲。投江將神迎。拓歌泛寒渚。霞景飄秋風。誰謂姑射嶺。駐蹕望仙宮。

これらすべて何といふ型に倣まつた説明や敘景であらう。あまりに辭體に捕はれ形式にすぎてる。この外、吉野に關したもののすべて六首、何れも大同小異であつて、敢へて吉野の作としなくても、笠置や十津川の作として通ずる程普遍的概念的説明で終始してゐる。水智山仁、姑射嶺の使用なごまかに公式的になり切つてゐるではないか。

しかるに、萬葉集の人麿二首、金持二首、千年(車持)一首、旅人一首、赤人三首、家持一首の詠は如何に。人麿。金持。旅人。赤人。家持、いかにも萬葉歌人の中堅を網羅してゐるのであるが、出來榮は全く漢詩のそれと伯仲の間にある。その内、人麿のものが長さから言つても構想から言つても最も佳作であるから、つぎに擧げて見ると、

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌

やすみしし わこ大君の 聞こし食す 天の下に 國はしも さはに あれども 山川の 清き河内と 御心を
吉野の國の花散らふ 蜻蛉の野邊に 宮柱 太敷きませば 百敷の 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船並ひ
夕川わたる この川の 絶ゆることなく この山の いや高からし 岩走る 瀧のみやは 見れどあかぬかし

反歌

見れど飽かぬ吉野の川のとこなめの絶ゆることなく復たかへり見む

この一首の中に、果して幾分でもの觀照的態度が窺ひ得られるであらうか。餘りに概念的語句の羅列に過ぎないではないか。自分には、かの吉野從駕の詩作を無視しようとする人に對し、よろしくこれら長歌の價值をも無視せよと勸めたいのである。そこには、正しい吉野を歌はうとする良心が

見當らぬではないか。これは、他の諸作においても同様で、「神からか貴とかるらむ、國からか見が欲しからむ」上へには千鳥しば鳴き、下へには蝦妻よぶ（共に金持の作より）といひ、「開けくれば朝霧立ち、夕されば蝦鳴くなり」（千年の作より）「山からし貴くあらし、川からし清けくあらし」（旅人の作より）といひ、「山高み雲ぞ棚引く、河早み瀬の音ぞ清き」（赤人の作より）といひ、殆ど創意らしい痕跡が無いのである。殊に、神龜三年五月聖武天皇の吉野行幸の際、赤人の作つたものは、人麿の吉野從駕の兩作を補綴したものに過ぎない。それは次の通りである。

やすみししわこ大君の高しらす 吉野の宮は 疊づく青垣こもり 川なみの 清き河内ぞ 春べは 花咲きををり

秋されば 霧立ち渡る その山の いやますくに この川の 絶ゆることなくも、しきの 大宮人は つれに通は

當時、古歌の一部を自作の中に入れることは、多かつたことである（卷十八、越中國守大伴家持報贈四首の中、「答所心即古人之跡代今日之意」の如きそれで、かく、はつきり次第を斷つてあるものもある）決して剽竊としてかれの良心を責めることは出来ないけれども、われ／＼はかれ赤人の詠出態度における不純さはこれを認めざるを得ないのである。あれほゞ、暢びた態度に自然を三十一文字に詠み得た赤人が、かゝる從駕の作では、不思議な矛盾を見せてゐる。それは、また、多くの萬葉集

長歌の持つ缺陷不自然性を語るものと言はねばならぬ。おほらかで自由な感じについて、それらは六朝文學の賦類にすら、遙かに及ばないものであつた。

今一つ言ひのこした家持作の一首は、「爲幸芳野離宮之時儲作歌一首並短歌」（卷十八）といふ、客觀的叙景的のものでなく全然辭禮的形式的のものであるが、この儲作歌については後に纏めて言ふ。

五

懷風藻を繙くと、また、大友皇子の作に見えたやうな侍宴の作が甚だ目につく。その多くは應詔であつてその大陸の風俗に基づいて摸作されたものであることは言ふまでもない。「皇慈被萬國」といひ、「聖情敦汎愛」といひ、尊王の讚辭で終始してゐるが、やはり型に箝つた空疎の感じのみがその全部を蓋うてゐる。その他、一般に遊宴の席上における作の多いこと、當時の詩作の心理の本質をよく語つてゐる。しかも、悲しいかな萬葉集においても、漸次、この風習が増して行つた跡を辿り得られるのである。

讚酒の作や、宴飲の歡樂愉悅を歌つたものは、例の酒樂の歌（さけがらみ）のある通り、非常に古いものである

— 國文文學の傾向 —

が、萬葉集で宴歌と呼ばれるものは、これとや、意味を異にしてゐる。すなはち卷六に數首ある豊御酒を壽ぐ如きは、他の宴歌には殆ど見出されず、すべて酒歌でなく宴席における一般吟唱歌の義である。すなはち、そこで情を抒べて様々の自作を吟誦したもの(例へば、卷四池邊王宴誦歌なき)の外、傳誦した他人の作を、曲付けしてそこで朗吟發表するもの、それらのすべてを宴歌と言つた(例へば、卷十八の作新歌並誦古詠各述心緒の題詞なき)。しかし、その宴歌は、いつか、今日われくゝの見る詩會や句會と同體裁のものとなつてしまつてゐたらしい。宴歌と稱するものが、卷五、卷六、卷八、卷十七、卷十八、卷十九に見わたされることは、天平期頃、さうした風習が日にまし著しくなつたことを語つてくれるものである。

天平二年正月十三日。萃于帥老之宅。申宴會也。于時初春令月。氣淑風和。梅披鏡前之粉。蘭薰珮後之香。加以曙嶺移雲。松掛蘿而傾蓋。夕岫結霧。鳥對穀而迷林。庭舞新蝶。空歸故雁。於是蓋天坐地。促膝飛觴。忘言一室之裏。開衿霞靜之外。淡然自放。快然自足。若非翰苑。何以據情。請紀落梅之篇。古今夫何異矣。宜賦園梅聊成短詠。

この梅花類三十二首の序は、恐らく旅人の筆かと思はれるが、宋書や離騷や煬帝老松詩なきの句を

隠引し、私かに羲之の蘭亭記に擬してゐるかれの自負を想像されると共に、旅人あたりから、詠草のことが社交化されていつた状況を推察されるではないか。

その他、巨勢宿奈麻呂の家にての宴歌(卷六)橘奈良麻呂の宅にての宴歌(卷八)家持の館にての宴歌(卷十七卷十九)等、その主なるものであるが、詠草の内容は多く敘景歌、即ち季節歌である。かつ、自然に對する着眼が、寫生的より觀念的に推移してゐるさまは、やがて古今集の季節歌を豫想せしめてくれる。例の支那流の「既以爲調、風化俗莫尚於文、潤德光身孰先於學」(懷風藻序)とか、「古有採詩之官、王者以知得失」(經國集序)とかいふ思想も、その間に潜入して來て、侍宴應詔歌なきで、「天地と相榮えむと大宮を仕へまつれば貴く嬉しき」(家持作)「ふる雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるかな」(諸兄作)的のものも、段々數を増して來てゐる。

先太上天皇。詔陪從王臣曰。夫諸王卿等。宜賦和歌而奏。卷二十、幸行於山村之時歌二首の序詞)
二年春正月三日。召侍從豎子王臣等。令侍於內裏之東屋垣下。即賜玉箒肆宴。于時內相藤原朝臣奉勅。宣諸王卿等隨堪任意。作歌並賦詩仍應詔旨。各陳心緒。作歌賦詩(卷二十、家持作「はつばるの」の歌の題詩)

これらで見ると、應詔の風習は、元正聖武の御代頃から、いよ／＼熾んになったものかと思はれる。讚國土、讚都、讚宮殿等に類する作も、かの班固の兩都賦的の味を持つて、「大君の御ことかしこみ」大君のまけのまにまに」といふ敘事振である。久邇の新京を讚した長歌は集中五首許あるが、これらは何れも形式的で、吉野の離宮を讚したものと殆んゞ區別をさへ立てかねる。

讚三香原新都歌一首並短歌——境部老麻呂作

山城の 久邇の都は 春されば 春咲きををり 秋されば 紅葉ばにほひ おげせる 泉の川の 上つ瀬に
うち橋渡し ぶと瀬には 浮橋わたし ありがよひ つかへまつらむ 萬代までに

反歌

たゝなめて 泉の川の みを絶えず 仕へまつらむ 大宮所

これは、五首の中最も短いものを挙げたのもあるが、何といふ通り一遍の敘事であらう。卷一の藤原京に關する長歌兩作にしても潑刺な感じを内包してゐた。讚云々と辭禮歌になれば、かうも凡庸化硬化してゆかねばならなかつたのかも知れないが、今更天平期の思潮を悲しまずには居られぬ。社交的の意味に、挽歌はまた、從駕や侍宴讚都等の作に和へて見られる。しかし挽歌は、死者を

追悼するのであるから、しかく、遊戯三昧虚飾弄辭的に歌ひ出すことは出来ない。一舍人として人詠が殯宮の前に哭した卷二の諸作は、何と言つても純粹なものである。紀記中にも挽歌はあるが、それは未だ抒情的の小編にすぎない。人麿のものは、挽歌にして一面敘事詩の俤を持つてゐる。しかも、かれの詠草が後世の挽歌に對し、やはりある型を提供したことは、爛熟期の文學であつたとしても惜しいことであつた。卷三の家持や高橋朝臣の挽歌は、中々構想の大きいものでありながら、われ／＼は一誦直ちに人麿の影響を感知せしめられるであらう。また、當時途上の死人といふものが多かつたやうに思はれるが、それらを詠じた數首のものが、すべて例の人麿の狭岑島の石中の死人を視て詠んだ作の影響を脱してゐないのである。あまり剩滿になるから、こゝにはそれらの例證を省くことにしたい。

六

ともかく、かう見て行くと、われ／＼はぎうしても萬葉集の中に躰居するが如き、大陸文學に對し、ある壓迫感を免れることは出来ない。特に、それも、卷五と卷十七以後卷二十迄の卷のやうに

長い漢文の序や、漢詩までが、和歌の中に介在するものに至つてはさうである。短歌一首といふ所を、殊更、短歌一絶(卷十八)と漢詩ぶつた書方をしたものもある。それらの卷で分るやうに、書簡の文は各自駢儷的の文致を凝らしたものらしく、また前例の旅人の梅花歌の序文でも分るやうに、一かき詩人ぶつたらしい態度を特意としてゐるのである。

こゝに、われ／＼は、大陸の行事が輸入されると共に、いよ／＼大陸趣味が文人を蠶食して行つた跡を見せつけられる。曲水の宴や七夕祭がまづそれである。人麿なきが既に、兩星交歡の傳説を歌のための歌として詠んでるらしいのを想へば、如何に當代すでに、詠歌といふことが生活から遊離して來てゐたかが分るだらう。

七夕歌三十八首もその一つなのであるが、「柿本朝臣人麻呂之歌集」と断られた歌を見渡すと、詠天、詠雲といふやうな題詠的のものや寄衣紐、寄路といふやうな所謂寄物陳思の作が甚だ多い。なほその詠物の品名が相當獨特の整理によつて配列されてあるらしい所を見ると、人麻呂が既に生前自ら、部立をしておいたものかとも想像される。しかし、詠物とは言つても大體それは題詠だけの作のものでは無いらしい。すなはち、體よく後から題詞を加へたものが多いことは分る。また「天

の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎかくる見ゆ」なき、天海雲波月舟星林といふ如き漢語を碎いて、體よく組立てたものではあるが、その巧みさから感ぜられる別種の味が無いでもない。ともかくかうした、特に詞書を要しない作、乃至、詞書の失れた作を、大陸文學の部立の聯想から、かく分類した迄のものであらう。また奇物歌の方もこれと同様な整理を経たものと思ふが、この方には、多少題詠的傾向がありはしないかと思はれる。假令、題によつて詠出されたのでなくても、かの神武天皇の御作に見える殆んゞ物心一如的象徴歌と比較すると、これらの作は著しく觀念的であつて、白氏に多い諷諭詩に近いものさへある。(寄物陳思は、卷十八に屬物發思とも屬目とも別稱されてゐる)

今一つ、漢詩の著しい影響と思はれるのは、追和歌である。この追和は漢唐の詩に甚だ多い。單に和すとも見え、尊者の詩歌に和する時は敬和とも言つてゐる。萬葉集における廿餘首の追和歌を見るに、有由縁歌に和したものが多のは、その性質上然らしめたものであらう。卷十七の池主の追和歌のやうに、長歌のものもあるが多く短歌であるのも、必然のやうに思はれる。追和者の名は未詳のものが多いやうであるが、これもつまり、原歌と共に追和歌が作者未詳のまま、傳誦されてい

つた、めではあるまいか。

旅人の松浦佐用嬪傳説をよんだ作と、その追和歌を例證すれば(卷五)

遠つ人松浦佐用姫つま戀ひに領巾ひれふりしより負へる山の名

後人追和

山の名と言ひ繼げとかも佐用姫が此の山の上に領巾を振りけむ

最後人追和

萬代に語り繼げとし此の嶺たけに領巾ふりけらし松浦佐用姫

最最後人追加二首

海原の沖行く船を歸れとか領巾ふらしけむ松浦佐用姫

行く船を振り止み兼ね如何ばかり戀ほしくありけむ松浦佐用姫

これらも、ともすれば空虚で無内容の形式歌になる傾向がある。机上の名所歌なごもさうした間に
出て來さうである。また、當時すでにさうしたものが生じてゐた形跡もある。

なほ、これらから、類推されることは、題材の固定である。文學史家は、萬葉集を古今集に比較

して、題材の豊富であることを重大な特色として擧げてゐる。しかし、これも比較した上だけのこ
とで、決して絶對的の意味を持つてはゐない。誰しも、萬葉集の特色を原始的素朴的といふやうに
言つてしまふが、情歌以外に何處に、原始的素朴的題材が見わたされるか。かの紀記題に見られたや
うな戰爭武事の作は十指に充つまい。防人歌においてすら、勇壯激勵の精神を詠じたものは僅か三
四首しか残つてゐないのである。狩獵歌も、原始味の多いものであるが、狩獵を詠じた作数は、や
はり八九首の界であらう。紀記中に多かつた飲酒類も、倒の旅人の十三首を除いたら、他に見るべ
きものは全くない。かう考へて見て、おちつく所が漢詩の題材の畑であることが、やはり分るので
ある。遊覽、宴集、饒別、贈答、詠史、述懷、艷情、樂府、梵門、哀傷、雜といふ十一種の部立は
文華秀麗集に用ひられたものであり、分類法としても幼稚なものであるが、これから詠史樂府梵門
の部を除けば、そのまゝに萬葉集の部立とならぬこともない。

以上、大陸文學に範を取り、そこに育てあけられた萬葉集の要素を概観したのであるが、純情、
素樸といふ評語の不當さは、これだけでも充分肯定されうらと思ふ。

— 國文學の傾向 —

この間に、一つ述べて添へておきたい問題は、萬葉歌の修辭法についてである。特に、枕詞、懸詞、序詞、縁語及び、反覆法對句法の諸用法であるが、これら何れも純粹に國語の中に發達したものである。たゞ人麿の疊對を巧妙に使用したのを以て、四六駢儷文の影響であると考へられないでもないが、むしろ、それは傳統的のものとして見ておきたい。

允恭記を見ると、既につきのやうな完全な對句の使用が行はれてゐる。(「上……下……三粟のその中……」式の修辭は、なほ早く應神天皇の御作の中に出てゐる)

こもりくの	泊瀬の川の	上つ瀬に	い枝を打ち	下つ瀬に	眞杖を打ち
い枝には	鏡をかけ	眞杖には	眞玉をかけ	眞玉なす	吾が思ふ妹
鏡なす	吾が思ふ妻	ありと	いはゞこそに	家にも行かめ	國をも偲ばめ

かの、モウルトンなどもバラッドダンスを以て韻律の起源を説明しようとしてゐるやうに、わが國歌も、舞踊歌の持つリズムに助成されて發達したことは、紀記歌のもつ根跡で分る。舞踊において

— 藤原期より天平期に及ぶ歌詩の結晶 —

同一の所作が繰更され、歌詞が二様である時、二つの歌詞が聯立することは自然のことで、別に大陸の影響を俟つまでもない。のみならず、五七調の組織から放射される韻律は、四六駢儷の示すものとは、特殊の崇高味を持つてゐるにおいてをやである。

こゝに祝詞の文が、人麿の詠歌に影響したことを指す學者があるが如何にもと首肯される。眞淵は祝詞式の諸文の成立年代を主として天智時代から奈良朝の初期に當てゝゐるが、その發祥はなほく、以前に遡られようと思ふ。と言ふのは、殆んど半ば反覆的な幼稚な對句法——例へば「天翔、國翔」彼方能古川席、此方能古川席爾「疆若叡爾御若叡爾」(以上出雲國造神賀詞)——が重用されてゐるからである。色々比較して見るに、「大峽、小峽」「天之御翳、日之御翳」(以上大殿祭)といひ、「朝御食、夕御食」「自下往者下乎守、自上往者上乎守」(以上祈年祭)「朝之御霧、夕之御霧」「高山末、短山末」(以上大祓)などといふやうに、これらは單に大小、天日、朝夕、上下、高短といふやうな對立語を上冠するといふだけのやり方である。しかも、人麿の愛用した「春へは……秋たてば……」「朝……夕……」「沖……邊……」「上……下……」的の對句法は、この祝詞の修辭を少しばかり複雑にし、却て素樸的莊重さを生み出し得たものではなかつたらうか。

祝詞には、また「手肱爾水沫畫垂。向股爾泥畫寄氏」下都磐根爾宮柱太知立。高天原爾千木高知氏」(以上祈年祭)「上津石根爾踏堅米。下津石根爾踏凝」(出雲國造神賀詞)などいふやうな、かなり複雑な對句法も見えてゐる。それらのよく重厚さを維持する所以は、強辭的接頭語にもよらうが、むしろその簡樸な内容の配列されてゐるためと、音律單位の上から見て2・3及3・2の五音節、3・4及び4・3の七音節の配合が自然的に要を得てゐるためであると言ひたい。その韻律感は、人麿の長歌、例へば本論(四)に例證したかれの吉野における從駕歌の中などに、そつくり取込まれてゐるのである。そこには莊重味と共に、健康と彈力性の快さをさへわれくは感得することが出来る。

祝詞における他の修辭上の特色は、「神攘攘氣武止神議議給時爾」神和和給氏」(以上遷都崇神祭)「荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會」千別爾千別氏」(以上大祓)といふやうな單純な紀記歌的の反覆法と、「甘菜、辛菜」、「鮭廣物、鮭狹物」、「明妙、照妙、和妙、荒妙」といふやうな並列法とである。また、「八束穗能伊加志穗爾」千穎八百穎爾」燒鎌乃敏鎌以氏」千秋乃五百秋爾」といふやうな對句の變形で高調的感と與へるものが屢々ある。そこで人麿の作の「やすみししわが大君、高光る日の皇子」とか「秋山のしたべる妹、なよ竹のとををる兒等」とかいふ一種の並列法、「浦なしと

人こそ見らめ、濁なしと人こそ見らめ、よしゑやし浦はなくとも、よしゑやし濁はなくとも」とか、「いくりにぞ深海松生ふる、荒磯にぞ玉藻は生ふる、玉藻なす靡き寝し兒を、深海松の深めて思へど」といふやうな段梯子式配合法を思ひ浮べて見ると、前者との間に明に氣脈相通する點があるではないか。そこに、かれ人麿の推敲彫琢の跡が歴然として出てゐる。なほ、一般から求めるなら、「鶉じ物頸根つきぬきて」(廣瀨大忌祭)とか「本末をば山の神に祭りて、中らを持ち出で來て」(大殿祭)とかいふやうな紀記歌などにも散見する語句法もあるが、何れも萬葉集完成の素因をなしたものと思はざるを得ない。

人麿の歌には、祝詞の思想の反映のあること、また、早く認められてゐる所であるが、その共通點は積極的のはりの強さと言つてよからう。反撥性である。殊に人麿は、滔々と漲り來る外來思想を清濁併せ呑んで、人々の如くその中に溺れなかつた。自分は前節まで、かれの詞藻の上に大陸の投影の著しいことを述べたが、人麿にはその影響外の半面があつたのである。それがよく、糜爛せんとするかれの環境を喰止め得た理由であつた。しかし、惜しいかな結極かれも過渡期の一人であつたために、その反噬は永續すべき性質のものではなかつたのである。

祝詞文には、少ないが、紀記歌に多い修辭の一つに枕詞がある。枕詞は散文にも用ひられて、すでに古事記にも「もたらす八十桐手」など、見えてゐる。今、推古天皇迄の上代歌謠を諸書からより出して概算するに、五十有餘の枕詞が用ひられてゐる。なほ、枕詞に準すべきものが別に十種ある。(冠辭考にはこれらをも枕詞としてゐるけれど。)これを思ふ時、かくも不思議な修辭法が古くからわが文學に發達したることについて、誰しも一度は疑惑を抱くに相違あるまい。

こゝに枕詞論を詳説する暇はないが、つまり、韻文における句數關係とその裝飾的意義、今一つは國語の特質上(例へばホノニムの多い如き)から發生流行したわけで、枕詞が韻文に從屬してゐる性質上、かく發生も早かつた次第であらう。しかも、人麿ほど、枕詞を有意義に活用せしめた歌人は前後見あたらない。これもやはり、かれの韻律感から出てゐるやうに思ふ。ある莊重悲壯幽艶なものを生み出すために、平明の内容に觸覺をつけピラミッドを立てたのが、かれの枕詞や序詞の効力であつた。

古く、舒明天皇の世、軍王は、「心を痛みうら嘆き居ればかけのよろしく云々」といふだけのこと
を、「村肝の心を痛み、ぬえこ鳥うら嘆き居れば、玉襷かけのよろしく」と律格的に表現して、枕詞

— 國文學の傾向 —

の効果を相當に收めてゐるが、人麿の技量は、更に、それを延ばしたものである。近江荒都の長歌などは地名の枕詞が多く未だその味は十分發輝されてないが、「——しきたえの袖携はり、鏡なす見れども飽かず、望月のいや珍らしみ、思ほしし君と時々、幸まして遊び給ひし、みけ向ふ木踏の宮を、常宮と定め給ひて、あぢさはふ目ごと絶えぬ、そこをしもあやに悲しみ、鶉鳥の片戀しつ、朝鳥の通はす君が、夏草の思ひ萎えて、夕づの彼行きかく行き、大船のたゆたふ見れば、慰もる心もあらず——」(明日香皇女木踏殯宮時歌)といふやうな絶唱に及べば、技巧が全然板につき切つてゐる。この不思議な修辭力が完全に内容化されて居り、波立つ律動の中に完全に融け込んでゐるのが分る。

しかし、冠辭(枕詞及び序詞)は、それ自らの中に、遊戯化されかちな陥穽餘弊を持つてゐる。すなはち、韻律を自ら創造するのではなくて、それが卅一文字とか五七調とかいふ固定形式に利用される時、乃至、懸詞的聯想の機智に弄ばれる時、冠辭は空虚な骸となつてしまふ。人麿、一面あまりに利巧にすぎたかれは、やはり、その誘惑に陥つてゐるのである。

鳴神のおとのみ聞きし卷向きの檜原の山を今日見つるかも

兒等が名にかけて宜しき朝妻の片山岸に霞棚引く

これは、さうしたものの、ほんの一例にすぎない。しかしわれ／＼はすでにこの中に、天平期の遊戯的歌章、さては平安朝時代の弄智的詩歌の胚胎期を見せられるではないか。

— 向傾の學文國 —

八

つぎに、藤原奈良時代の生活と和歌との關係を考へて、更に萬葉集の本質を明らかにして見よう。文學が若々しく、簡樸健實であるがためには、その表現は國民全部の所有に屬し、一つの特權階級のものに歸すべきではない。勿論、作家は大臣大將であらうが、一行吟詩人であらうが介はないけれど、その表現中の何處かに、民族の精神が籠つてゐるべきである。童心的鑑照と、愛すべき稚拙味が宿つてゐなければならぬ。神代記中の歌謠は、すべて神々の誦詠であるけれど、すべてに若々しい香味を失はないのは、その理由に外ならない。

しかるに、萬葉集歌の創作心理は如何。われ／＼は、既に遺憾ながら、その中に貴族的濁流の捲き込んでゐるのを見逃す譯にゆかぬ。歌人の範圍が漸次、官人廷臣的に制限されてゐるのは勿論、

前々節に述べたやうに題材は減少すると共に固定し來り、生命的表現はいよ／＼失はれて詠出は一つのあそびと化して來、従つてその内容と言へば、機智的觀念的のものか、然らずば閑人趣味的のものかといふ風になり至つた。爛熟期の臭味、結晶期の硬化があり／＼とそこに感ぜられてゐるのである。

まづ、第一に歌人の範圍であるけれど、すでに撰者の態度には官僚臭が芽々として現れてゐる。多く年序的に編まれたから、經國集の様に「人以爵分」といふ様な點は暴露してゐないけれど、庶民の作にはその姓名が多く省かれてゐる、一首だけ乞食の歌(卷十六)が掲載されてはゐるが、それも後撰集に檜垣姫、新古今集に遊女妙の作を選入した程度のもので、たゞ好奇的の心からだけのものであるらしい。もつとも萬葉集には、遊行女婦の作が甚だ多い。これも實は萬葉集が「情歌並に旅歌集」であつたがためである。しかしこの集では、不純粹ながら東歌と防人歌といふ部があつてこれが後の歌集に求められぬ大きい收穫あるで、「劍の尻種蒔く田井に何時までか」(卷十)とか「稻春けば輝る我が手に今宵もか」(卷十四)とか、何れも庶民的の香味の豊かなものである、こゝには岐路に亘りすぎるから特に論じない。

ともかく、萬葉集を概観するに羈旅に關するもの、數と、一般の相聞（旅中の情歌は加へぬ）に關するもの、數とは、互に伯仲して居つて、その兩部が全數の約八割をしめてゐる。純粹敍景歌、旅中敍歌と思はれるものは省く。季節歌は藤原朝期奈良朝期と年を追うて増していつたが、なほ全數の一割見當で、残り一割が挽歌等以上に屬しない歌といふ割當になる。こゝに怪しまれる點は、萬葉集のどこにも萬葉人の日々の生活が殆んど表現化されてゐないといふ事實である。「百敷の大宮人は今日もかも暇をなみと里に出でざらむ」（卷六）と天平年間豊島安女の詠んだ作があるが、この大宮人の繁忙はある特殊の日だけのことを言つたもので、一般には宮人とても閑日が多かつたものと想像される。何にしても、もつと、羈旅歌や相聞歌でなく、日々に見聞する環境が詠出されなかつたかゞどうも疑問である。しかしこれも、當時すでに詠誦といふことが概念化される道程にあつたといふことを思つて見れば、それも當然の歸結であつたのかも知れぬ。

一つの階級に文學が獨占されると、その文學は一種の遊藝になる。まして、文學が貴族階級の手に入れば、そこに師弟關係が出来たり、競詠が行はれたりする。生活と文學とが別れて二枚になる。

ひさ方の雨も降らぬか蓮葉にたまれる水の玉に似たる見ゆ

右歌一首。傳云。右兵衛多能歌作之藝也。于時府家備設酒食。饗宴府官人等。於是饌食盛之皆用荷葉。諸人酒酣舞踏駱驛。乃誘兵衛云。關其荷葉而作歌者。登時應聲作斯歌也。（卷十六）

この臨機的の右兵衛某は、まことに歌作上の藝人であり、それ以上で無いのである。それは、聽者乃至讀者を、情緒的に動かさうといふ藝術的良心から歌はれるものでなく、只、あつと言はせたり巧致さに感心させればよいのである。狂歌師と思へば大した誤がない。集からは、なほ一層機巧的になつた作を例證することが出来る。

○無所由之歌（無心所著歌）

吾妹子が頼に生ひたる雙六のことひの牛の倉の上の嶺（卷十六）

吾背子がたぶさきにせるつぶれ石の吉野の山に氷魚ぞさがれる（同）

○泊物歌

天なるやさらの小野に茅草刈り萱刈りばかに鶉を立つも（卷十六）

神つ國しらす君がしめ屋形ものの屋形神が門渡る（同）

（注、なほ、これらの作詠心理については疑問を残しておく）

○詠數種物一歌（この部に屬すもの十首あり）

さすなへに湯沸かせ子供いらひ津の檜橋より來む孤に浴さむ（卷十六）

右一首傳云。一時衆集宴飲也。於時夜漏三更所聞狐聲。爾乃衆諸誘與磨曰。關此饌具雜器。狐聲。河橋等物。併歌者。即應聲作此歌也。

○並列歌

萩が花尾花葛花暈多の花女郎花又藤袴朝顔の花（卷八）

一二の目のみにあらず五六三四さへあり雙六の采（卷十六）

一昨日も昨日も今日も見たれども明日さへ見まくほしき君かも（卷六）

○頭韻歌

來むといふを來ぬ時あるを來じとふを來むとば待たじ來じとふものを（卷四）

よき人のよしとよく見てよしと言ひしよしのよく見よよき人よく見つ（卷一）

○關助辭一歌

我が門ゆ鳴き過ぎわたるほとよきすいや懐しく聞けどあきたらず（毛能波氏爾乎、六箇辭關之）（卷十九）

○揶揄的戲吟歌

（卷十六等に多し。こゝに引例を略す）

もつとも、これらは特殊の例であることは言ふ迄もないが、特殊から一般が想像されようと思ふ。惟ふに、萬葉集書體の戲書などが、これらと同じ心理によつて出來てゐる。二五をトテ、山上復有山をイデ、義之をテシと訓讀せしめて記載した最初の人の機智的發想を思ひ描くことが出來よう。

九

さてかうなると、人々は歌詠みでなく歌作りといふだけのものになつてしまふ。相手なしに、戀歌のために戀歌が作られる。卷十一卷十二の古今相聞往來歌類の中には、如何にもいかゞはしく思はれる戀歌が多い。大抵、頭から二句三句までを序詞にした種類のは、何等の情味もなくだれきつてゐる。古今集や新古今集によく見る技巧だけの戀歌と殆んど差別のつかないものである。

此川の瀬々にしく浪しくく、に妹が心に乗りにけるかも（卷十一）

沖つ藻を隠さふ浪の五百重波千波しくく戀ひ渡るかも（同）

住吉の岸の浦回にしく浪のしばく君を見むよしもかも（同）

時鳥とはたの浦にしく浪のしほく君を見むよしもがも(卷十二)

六二

かやうに、浪は「しくく」或は「しほく」、また、白露は「消ぬがに思ふ」といふやうにつづけるのが、動かない型となり切つたのである。「吾が戀ふる千重の一重も思むる心あれや」といふやうに入麿の名語句は、争つてこれを摸倣する。「橘の蔭踏む路の八衢に物をぞ思ふ妹に逢はずて」「三方沙彌」といふ古歌を、「橘の本に道踏み八衢に物をぞ思ふ人に知らえず」「豊島采女」と焼き直して詠むものが出てくる。その他類歌が別人の作とされたのが多いが、それには摸倣といふより誤傳も多きではあらう。しかし、後世の如き本歌取といふやうな變態が未だ生じなかつたのを以て、ともかく幸とすべきである。

なほ、卷十六に、「右歌者。舍人親王。令侍座曰。或有所無所由之歌者。賜以錢帛。于時大舍人。安倍朝臣子祖父。乃作散歌獻上。登時以所募物錢二千文給之也。」と後書のある作があるが、まづ、これは今の懸賞歌といふ所ではあるまいか。所で、卷十七には、「右件卿等應詔作歌。依次奏之。登時不記。其歌漏失。但秦忌寸朝元者。左大臣橋卿諺曰。靡堪賦歌。以麿贖之。因比默止也。」と、唐から歸つた朝元が歌會に和歌を得詠まず、贖物をとられたことも見えてゐて、前のもの

といふ、對照をなしてゐる。要するに、これら何れも詠歌といふ事實の遊戲化されてゆく上の一現象と見ることが出来る。

儲作歌については、本論四節に一寸言つてもおいたが、豫作とも記され、集中八箇所に出づるもの、盡く家持の作である。これ言ふ迄もなく、卷十七以後はかれの私歌集であるので、記憶のため附記してかくは斷つたものであらう。從駕歌や侍宴歌など、豫作されたことは、何も家持の上だけのことでなく、當時は専ら行はれたことに相違ない。それは直觀を表現したものでなく、只、概念の說敘にすぎないものである。春季にあつて秋物の敘景歌を作り、京にあり乍ら、吉野の風景を歌ひ、また東路の旅を詠ずる。こゝにおいて、歌謠の生命は地におちざるを得なくなつた。

卷十九に、詠筆公鳥並詠花詠一首並短歌と題した家持の作の後附に、「右二十日雖未時依興豫作也」とあるは、必ず時、天平勝寶二年三月二十日、霍公鳥は啼き出でないのに、しらくしく「往き還り鳴きとよむれど、如何で飽き足らむ」などと歌詞を並べたものと見える。一般に、天平期の名所歌に嶄新のものが無いのは、それが寫實的のものでなく、かゝる想像歌に類してゐたためだと言つてよい。古今集以下の羈旅歌の内容の乏しい淵源も、尋ねて見ると甚だはるかであるではないか。

六三

「幼年未逕山柿之門」と言つても、何も中世のやうに、人麿や赤人が、朱筆を採つて弟子の作を添削してゐた譯でもあるまい。怖らく漢詩人の間には、それに近い現象があつたから、家持の筆がかく走つていつたこと、想像される。しかし、師匠ぶつて詠作、代詠するといふことは、かなり古くから行はれてゐる。これも、詠歌といふことが社交的になれば、當然生じうべき現象に相違ない。笠金村や大伴家持など師匠株の歌人は、つねに女子供に頼まれて代作してやつてゐるのである。(巻四、卷十九等)

また、史的述懐的物語的興味も、傍觀的餘裕が生じて始めて生ずるものであるが、晩期になるほどそれが顯著に現はされてきた。(修史事業も勿論その一現象と言へる。)一般に大陸文學に、述懐詠史の作が多いに反し、わが歌謡にその珍らしいのは、形式があまりに少さいためである。萬葉集には、長歌の存するため故跡を詠んだ作に、かなりとるべきものが多い。かの卷十五卷十六の有由縁歌の如き、その多くは長歌の形式を俟つて始めて表現しうるものである。その「昔者有壯士」で始まつてゐる序詞をよむと、かの伊勢物語が聯想されると同時に、歌謡の形式外に、説話文學に新しい意義を認めそこに推移してゆく人の心の斷面が感ぜられるやうである。高橋蟲麿はその第一人者であつた。

であつた。

顧るに説話に住する心は、やがて、自己を話中の人物に擬する傾向をとる。大陸文學の影響の一つとして前述した追和歌の中にも、その心持のはつきり出たものがあるが、擬意歌においては特にさうである。丹比真人が死んだ人麿の心に擬して、その遺妻の歌に應じたもの(卷二)憶良が臨終の態擬の心になつて詠じた長歌やかれの貧窮問答歌(卷五)家持が防人の心になつて悲別の情を陳べたもの(卷二十一)等、擬意歌は必ずしも説話中の人物に擬したもののみではないが、その精神においてはどれも傾向を等しうしてゐる。文華秀麗集に、「代神泉古松一傷哀歌一首」といふ御製があるが、人間外の動物無生物に擬して情を述べること、漢文學にもまゝある。その點から見て、卷七にある千鳥の心に擬して應じた短歌や、卷十六の鹿や蟹の心になりそれらのために痛心を述べた童謡味のある長歌など、物語的小説的表現としてこれらを見ることが出来る。

以上を要するに、歌人の生活に對する態度が著しく傍觀的、高踏的になつて、よい意味にも悪い意味にも餘裕が生じ、既に生活圏に潜入して赤裸にそれを歌ふものの減じたことが自明されたこと、思ふ。物語の時代は、かくてこの變轉期から派生してゆくのである。われ／＼は竹取物語や大和

物語の生み出された平安朝初期を、この時代に連続して考へることが出来る。

十

卷十七の、大伴池主と大伴家持との書簡の應答に、つぎのやうな一篇がある。

昨日述短懷。今朝汗耳目。更承賜書。且奏不次。死罪死罪謹言。不遣下賤。頻惠德音。英雲星氣。逸調過人。智水仁山。既耀琳瑯之光彩。潘江陸海。自坐詩書之廊廟。聘思非常。託情有理。七步成章。數篇滿紙。巧遣愁人之重患。能除戀者之積思。山柿譚泉。比此如蔑。彫龍筆海。粲然得看矣。方知僕之有幸也。敬和歌。其詞云。

これは、池主が、その前日、家持に

餘春媚日宣恰賞。上巳風光足覽遊。柳陌臨江縵袂服。桃源通海泛仙舟。雲鬢酌桂三漉漉。羽爵催人九曲流。縱醉陶心忘彼我。酌無處不淹留。

といふ七言詩を贈り、家持から更に答詩をうけたのに對し、和歌を以て答へたその詞書である。更に、池主の書に對し家持の答へた書を見ると、

昨暮來使。幸也。以垂晚春遊覽之詩。今朝累信辱也。以睨相招野之歌。一看玉藻。稍寫鬱結。二吟秀句。已獨獨愁緒。非此眺視。孰能暢心乎。云々

とある。自分は、その往復文の中に、はつきり、池主や、家持の詩歌に對する態度、理想を推測し得るやうに思ふ。

まづ、「巧遣愁人之重患能除戀者之積思」といふ句と「一看玉藻稍寫鬱結。二吟秀句已獨愁緒」といふ句とを吟味して見よ。これ、前者は表現の上から、後者は鑑賞の上から、慰安を以て文學の目的と見てゐる思想の現はれではあるまいか。すなはち、生活を歌ふ詩歌の提唱でなく、現實苦救濟の文學を讚美したものであるまいか。「春日遲々、鶴正啼。悽惻之意非歌難撥耳。仍作此歌。式展縮緒云々」の卷十九の家持の語は、また明らかにこれを裏附してゐるやうに思はれる。その言葉に、大陸文學の影響もあらう。しかし、自分は、かれら自らの生活態度が非現實的になつてゐる點をも否定することが出来ぬ。風流閑雅の生活は、いつしらすかれらの理想境となつたのではあるまいか。

想へば、大伴家の人々は、人麿赤人の場合とは、また異なつた意味に、時代の象徴的役割を勤め

てゐるのである。大伴氏は神代からすと、「次ぎて来る君の御代々々、隠さはぬ赤き心を、すめらへに極め盡して」(家持の喩族歌) 來たのであつたが、その武力の餘蘊は平和の世に、しかく馥郁たるものではなかつた。否、新しい勢力のために、多くの傳統保守的の勢力階級は衰滅する機運に遭遇してゐた。天平時代には、未だ、運命の破滅は到來しなかつたけれど、冥々の内に周圍を取捲いてゐる暗翳にかれらは氣付かざるを得なかつた。現實の中には、見通しのつかない雲霧があつて、かれらを包んでしまつてゐた。されば現實の齎す懊惱の忘却と、逸宕とが、氣弱な家持——かれは族長としては如何にも氣弱の大將だつた——の求める第一のものであつたのである。

自分はこゝで本論の始めに一寸説明した六朝の世相を回顧し、その頽廢味をそのまゝ、大伴一族の心に移さうとするものである。否、六朝の佛教や道教文學を繼承してゐる奈良朝末期の人心の中に、それを見出だし得るやうに思ふ。しかも、文人は一般に、聖武天皇光明皇后の御信仰を、そのまゝ、自分のものとするものが出来なかつたのである。旅人や家持の心を醫してくれたものは、僅に、道教的虚淡と詩文的風流道と酒、そして、女とのみであつた。

旅人の如きは、ともかくに右大臣迄昇進したのであつたが、さうしてかれの口から讚酒家十三首

の如き虚無的放膽の言が出たのであるか。この疑問は誰にもおこること、思ふ。しかし、これを以て、かれの主義とか人生觀の様に考へてはいけない。われ／＼は、かれの生活がしかく享樂的放縱的であつた史實を持つてゐないし、むしろ、かれの他の諸詠から考へられるかれは、篤實ではなくとも温厚で角のない人物のやうに想像される。やはり、讚酒歌に見える儒道への反逆、虚無的色彩は、かれの詩の世界、幻想の世界だけのものではなかつた。らうか。酒中の氣焰ではなかつたらうか。況んや「寛政情既遠。迪古道惟新。穆々四門客。濟々三徳人。梅雪亂殘岸。烟霞接早春。共遊聖主澤。同賀擊壤仁」(懷風藻) の如き詩を、ある年の初春宴にも侍して詠んでゐるやうなかれである。

「獨仰天漢作之」(卷二十)「獨憶秋野聊述拙懷作之」(卷二十)、これらの詞書は何れも家持の作に見えるものである。かれは父旅人の様に酒を好んだが、また、現實の外廓に出て閑適することをも愛した。かれは、かく寂寥を友として自然を眺め、甘美な憂愁に耽るのをむしろ樂しみとした。しかし、かれの目に映する自然は、原始人の目に映じたそれとは、そこに隔段の差異があつた。それは、悪い意味に歪められた自然であり、善意に見て、風流化された自然であつた。

萬葉集の各卷の撰定者となると、大部疑問も生ずるが、各卷の輯録者が大伴家持であつたといふことは殆んど疑ひを挿みがない。そこで、隅々とは行かなくとも、全部の上にわが家持の意志の及んでゐること、これも認めて差支あるまいと思ふ。天平時代、大伴家持、行詰まつた歌壇——かう思ひ見ると、萬葉集を以て簡樸の藝術と評することに對して、以上自分の抗議したことはあながち無謀のことではなかつたらうではないか。

高圓の宮の裾回の野つかさに今咲けるらむ女郎花はも
高圓の秋野のうへの朝霧に妻よぶ牡鹿出で立つらむか
といふやうな、ともすれば、古今集の季節歌への過渡期を語つてくれる歌が、その際詠まれてゐる。相聞——といへば、自分は、集の卷頭歌となつてゐる雄略帝の「こもよ、みこもち——」を想起して、かく迄も純真率直に我を表現し得られた帝を、上古に仰ぎ見ることに對し、ある矜持をさへ抱くのであるが、今それと家持の情歌とを比較して見るにその中には、あまりにも、雲泥の差があるではないか。家持の心には、すでに頽廢と爛糜の血が鬱凝し、かれはひたすら、戀歌に、戀そのものに、夢をのみ求めてゐたのであつたらしい。萬葉集を見れば、かれは幾人の異性と情歌の贈答をしたものか、殆んど豫想もつきかねるほぎにその數が多い。自分は、源氏物語の光源氏の佛、かれにさへ認め得るものである。それが徒らな戀歌の遊戯でなくて何であらう。かれは、白樂天程、現實逃避の態度を明らかに詠つてはゐないが、徒らな兩者の對文學の態度には、大きい共鳴のあることを否定することは出来ない。

貫之より西行へ

自由に、わが信ずる道程を辿る、途上の物皆には惜しまざる抱擁を與へる。かくて、尙も我を妨害せんとするものあらば、潔く突き當る、當つてなほ碎けざる時、叩くもなほわが進路の開けざる時、始めて展望を與へる、反省を加へる、わが道に立歸つてくる、往相から還相へと廻向してゆく。還相の背後には一味清淨の泉が輝いてゐる。その透徹、鏡の如き清澄さには、歴然として自己と社會の相が映されてゐるだらう、そこに我が真相を啓示された人々には、やがて二次的自己展開に對する勇猛心が燃焼する。さうして將來される世界は、更に高次的のものであり、その繰更しは逐次的に、人生における行脚者の開拓地を擴大してゆくのでなければならぬ。

苦悶をも辭しない衝突——それは、自我の解放と生命の自由を求めてやまない真人の覺悟を構成する。束縛を廢せよ、桎梏を破れ——そこには、崇高なる人生の嚴肅味と、偉大なる人間の眞摯さが宿る。苦悶の衝に進軍せんとする心裡に、さうして一滴の濁水さへ混じ得ようぞ。

しかし往相をして最も効果あらしめ意義あらしむるものは、先づ還相の價値を明確に認識するにある、私は明鏡を擔へる行路者を讚美する。明鏡に對しつゝ、行進の曲を奏するものこそ、眞實の藝術家ではあるまいか。藝術的表現こそ、實に高次の展開を豫想した自己復歸であるがために、その存在の意義を確保するものである。

所謂、發動反應、即ち實際生活實行生活が一時阻止せられて、心眼却つて明らかになる時、藝術の態度が生ずる。生につかすして生を離れずとは這般の消息をいふのだ。實行より脱離した爲に、更に清く更に強くなつて、生命は此時其豊富の度を加へる、但し生命は多分人間のみが有ち得る心像世界の生命、想像の生命だ

(獨語と對話)

と上田敏氏の述べたことは、いかに意力尊重の文學が主張されようとも動かぬ眞理である。否、我々は我々の論理的な生活、宗教的生活、經濟的生活においても、ひろくかゝる一刹那を要望してやまない、我々の生存する社會が刻々に復雜化されてゆくことは否むべからざることであり、又望むべきことである。只その整理條然たるべきを要項とする。しかも現代日本は何といふ混沌さであらう、不秩序極まつた亂脈さであらう。こゝに愈々心眼の透徹たる、一刹那の期待されねばならぬ。

まつ背後の泉に對せよ、省察からこそ眞の力、眞の糧が生れて來る。わが國には二千有餘年の歴史がある。東洋には五千年に近い思ひ出があるではないか。

しかし泰西文明を輸入し始めて半世紀餘を経た今日、わが國にも、漸く心眼の開かれんとする兆が見えて來た。なるほご過去において不斷の努力を惜まず續けてきた、衝突から醸される慘苦をも敢て辭さうとはしなかつた、しかも兎角に我々は眼前に暗澹さを見たのである。

何がなしに

頭のなかに崖ありて

日毎に土のくづるよことし (啄木)

この歌にも似たある感じが、つねに我々の心底に漂つてはゐなかつたか。又、猪進といふ形容が我々の日常の態度に聯想されはしなかつたか。さうだ、我々にはかゝる往相に一層強固の根柢を賦與するため、こゝに還相廻向が要求されなければならなくなつたのだ。民族に就いての正確な批判、自己に對する明徹した直觀が、愈々、重要になつて來たのだ。

然らば復歸時代における民心の狀況は如何。これには、追慕的と呪咀的との二方面をあげ得ると

思ふ。追慕的方面は、時代的には原始生活の憧憬となつて現はれ、人間の本然的自然的生計が主張される。カーペンターの議論は常にこの方面になれてゐる。職業的には、筋肉労働の價值が止揚される。ホイットマンを始め、労働の神聖を歌ふ詩人も輩出する。児童の精神は、またよく原始的人間性を彷彿せしめる。近年著しく兒童に同情した諸他の施設が、叙上の主張と共にわが國に現はれたのも同一氣運を語るものと言はねばならぬ。ボーイスカウトの如きは無論のこと、童謡の隆盛、童話劇の進歩、何れも同一轍事である。

次に、呪咀的方面は、時代に對して放笑、諷刺、譏刺を投げ出す傾向である。聲を高くして呪を放つ自由と勇氣とを得ざるものは、自暴自棄に陥るであらう、倦怠を恣にして隱逸するものも生ずるであらう。しかし、顧るに、かゝる不幸者の胸奥に藏せられる唯一のものは、眞理を求める心、只それではあるまいか。

人が皆

同じ方角に向ひて行く

それを横より見てゐる心 (啄木)

たゞにかゝる傍觀的態度に於てさへ、はたと我々の足を立止めしめて左顧右眄せしめる力があるではないか。かくて、消極的態度も、鐵路の上に注がれた膏油の如く、反對的價值として現はれ來たる。

藝術的表現が、その本質において、復歸的精神に存することは上述した通りである。文學は、「弱くて女々しい」ものだとは、宣長の如き國學者さへ、はつきりこれを認めてゐる。しかし、「物のあはれ」を知るべきを尊重し、源氏物語を愛讀した人々によつて國民精神は把持されたのである。始めてかくかくであるか、と明示されたのである。維新の大業も、實に國學精神の發露といふに異存はあるまい。イブセンの戯曲や、ツルゲネフの小説が近代精神文化に貢獻した點を考究したなら、思ひ半ばな物があるであらう。彼等の諸作必ずしも、悲憤にみちてはゐない。

特に、詩歌には所謂、抒情にすぎざるが如きものが多い。夢幻境に出入するものが多い。阮籍、嵇康は酒に世を逃れて富貴榮花を浮雲視して詠吟に遊適した。謝靈運は俗世を超脱して邱壑を愛し自ら山澤詩人を以て任じてゐた。かくて、歸らなれど田園將に荒れなんとすと、歸農した詩人に、我々はさうして現代の如き世における救濟者を見出だし得よう。我々は兎角にさう考へがちである。

道の邊に董つみつゝ鉢の子を 忘れてぞ來しその鉢の子を
歌やよまむ 手鞠やつかむ 野にや出でむ心一つを定めかれつゝ

良寛の歌こそ大人の歌つた童歌であらう。しかも、何故に大人が童歌を作り、また童謡をよむべきなのだ。それこそ、餘りに複雑化された現代と、隔絶した無用なものではないか。かうも我々は屢々考へるかもしらぬ。

しかし其處に大きい誤謬が存するのだ。

— 國文學の傾向 —

最近に到つて、漸う藝術の眞義が理解されてそれが着くべき位置に着かせられて來たことは、先づ喜びに絶えない。しかし、猶些か不満を覺えるのは、東洋藝術日本藝術の眞價の未だ周知されない事實である。それらは、如何にも古めかしい、又餘りに超現實的であるかもしれぬ。しかし舊套であり過去の産物であるがために、無條件でこれらを捨て、顧みない者の如何に多きか。猶ほ、超世的であり、浪漫的であることは、藝術それ自体の本性である。況んや、東洋藝術の隱逸精神は、現代我々が血の一部、肉の一片をなしてゐる處のものではないか、それらは、正しく復歸の念願の

前に、先づ第一に映し出さるべき影像であらねばならぬ。

私は、次に、藝術史中特に、わが文學史上における復歸的精神の鳥瞰をなしたのであるが、紙數の都合上、大凡、平安朝時代にこれを限定しておきたいと思ふ。

さてわが文化發達史を回顧して見るに、外來文明との接觸のため大革新の生じた時機が再度あると思ふ。今更云ふ迄もなく奈良朝時代と明治時代とである。その間一千年餘の間隔がある。同じく大陸文明の輸入と云へ、文明の程度を異にし事情をも別にしてゐる。しかし、明治時代の後をうけた現代と、奈良時代を後繼した平安朝時代との間に、何等か相通する所はないか、共鳴する世相はないか。私は、忠實ありのまゝに平安朝時代の一般を知るために、その時代の文學の本體を描き出して見たい。平安朝時代が、大陸文明に對し、國粹文化を發揚した時代であることは、史家の屢々口にする所である。私は必ずしもこれに異論を挾むものではない、しかし平安朝時代が、種々なる事情上復歸的精神を燃焼せしめたことは充分肯定せらるゝが、その結果の顯出したのは、かなり後の時代と認むべきが正當ではあるまいか。鎌倉時代に及んで漸く形をなした武士的精神は、著明なる

その一つである。新佛教の樹立、國民精神の認識、和、敬、清、寂の藝術を創設したこと等——すべて淵源を平安朝時代に求められると思ふ。かくて一面、平安朝文學の淵藪であることも同時に考へられ得る。當代の文學者といへば——曰く貫之、曰く紫式部、曰く清少納言、曰く能因、曰く長明、曰く西行、本論ではこれらの人々について特に、復歸的傾向の文學についてのみ述べることに止めておく。

凡そ、かれ等の文學内容の傾向を分類すれば次の諸項を得る。

- 一、社會生活に於ける敗殘者の悲嘆と愁訴を表はしたもの
- 二、生活の倦怠感の見えるもの
- 三、自己の弱少の認識の覗へるもの
- 四、自然美殊に頽廢美を讚へたもの
- 五、信仰の世界を表はしたもの

中世に就て講述する前に、やゝ時代を遡つて考へて見る。持統文武兩帝の所謂藤原時代元明帝以

後の奈良時代如何にも明治初年の國情に相似してゐる。大寶元年の新律令の發布、大學國學の制を立て、釋奠を執行した事、和銅元年の遷都、並に和銅開寶の鑄錢の事實等如何にも積蘆的大陸文明輸入が、多忙らしく繼續されて行つた。

詩歌はつねに時代の精神を象徴する。否、詩人の持つ敏感性は、時代の民衆の心底を流れてゐる心持をあらはに捉へ、更に、次の時代の精神方向を豫覺してこれを詩の中に詠じ歌として唱ふ。

萬葉集は藤原奈良朝時代の詩人の心の表象である。そこには、敬神尊王の精神を遒勁彩麗なる詞藻を以て詠出した人麿あれば、又、自然人情の優美さを簡潔端嚴な調子に吟詠した赤人がある。人麿赤人はすべての特色に於いて對角線上にある二詩人である。しかも兩詩人の間に一脈相通するものがあるがそれは何物であるか。時代思潮に對する反逆——この言葉は多少言ひすぎてはゐるが、確かにさうした半面がその中にある。滔々と瀾瀾してくる濁流に對し強く自ら擁護しようとする態度、それが兩詩人の斷章の間に顯現してゐる。燃ゆるが如き情火を持つた人麿は皇道といふ旗幟を振翳した。然し山林官てビュリタンであつた赤人は、清淨の世界を追憶と自然の懷に見出だした。そこに兩詩人の岐路があつた。山上憶良も新文明の批判的位置に立つてゐたといふ點に注意さるべ

き詩人である。いふ如く彼は、漢學に通じ佛教を信じてゐたかも知れぬ。さり乍らそれ文、彼の思想は偏狹でなく廣い立脚地からの訴嘆であつた。彼は思ひ切り自由に大膽に貧苦を訴へ愛欲を歌つた。こだはらず、暢び立つてゐる意味に彼程詩の世界において現實的繩縛を脱した詩人はあるまい。

— 國文學の傾向 —

然し天平期に及んで外來文化の勢力は國民の肺腑に浸潤する迄に濃厚になり、殆んど動きの取れぬものとなつてきた。そこに大伴旅人と家持との父子の歌人がある。旅人の讃酒歌に見えてゐる幻想には、途惑ひ者の叫びの如く物淋しい響があるではないか。家持の作には、その境遇上、一層叛逆と自責の聲が聞かるべき筈であるに、彼は回避的に、相聞歌と叙景歌との中に己が陶醉の世界を求めていつたのであつた。

人麿から貫之へ——それは餘り縁遠い連絡であるが、家持の歌から古今調へなら、誰でもすぐ首肯し、橋渡しが出来るであらう。然し、中世の復歸的精神の蕩搖を考へる前に、是非翻つて當時の大陸文學の影響を一瞥しておかねばならぬ。

懷風藻といふ現存最古の詩集の出來たのは天平勝寶四年で、萬葉集の編述された年より一寸早い。

— 貫之より西へ —

しかしこの時代とても、かの小野妹子が始めて遣隋使として大陸に遣はされた年より計算すると百五十年に近い年代を経てゐる。その間わが民族はどんなに燦然たる向岸の文化の吸収にこれ日も足らない情況であつたらう、さりながら頼るべき唯一の交通機關の不備は、全く想像外で、その百餘年の間遣唐使の立つた事僅に十回を出なかつたことで全般が知られる。しかし逐次制度の完備といふに隋唐の文學も輸入されて來た。且つ大學寮その他の私學の勃興と共に、唐制に摸して對策といふ試験制度が行はれた。抑も隋唐の諸帝が、幾度か儒學を立て、政教の基本となさんとして、却て滔々たる詩文の隆盛に壓迫をうけてゐた事實は周知の通りであるが。わが考試にも經學よりも文選を暗誦することの尊ばれ、藤原諸成は、文選の暗誦によつて三學者の一に數へられるに至つたのである。選といへばこの文選をのみ指すのが當時の習はせであつたがこれと同様に、文集といふ語のみを以て呼ばれたのは白氏文集であつた。子類についての對策すら「李耳嘉遁以示虛立之理」の解釋を求めるといふ風で如何にも紀綱樹策を専らにした政治方面とは、精神的に背馳したやうな趣が無いでもなかつた。

欲知閑居趣 來尋山水幽 浮沈烟雲外 學瓶野花殊 稻葉負霜落 蟬聲逐吹流 祇爲仁智賞 何論朝子遊

(藤原萬里)

煙霧辭塵俗 山川杜處居 此時能草賦 風月自輕餘 (隱士黑人)

これ等は既に懷風藻中に見える所であるが、かゝる回避隱逸的態度、天然自然を耽美する措辭、勿論唐詩の影響した點が尠くない。然し、凌雲集、文華秀麗集、經國集等に相繼いで現はれた「愛寂然」「閑林獨座」、さては「天籟相和幽洞谷」に山寺鐘に耳傾け、又老莊の説を讚美する當代詩人の聲を以て唯に、摸倣口眞似としてのみすべてを卻けるのは餘りの獨斷に過ぎはすまいか。

結庵居三徑 灌園養一生 糟糠寧滿腹 泉石但歡情 水裏松低影 風前竹動聲 聊輸太平祝 獨守小山亭
(小野永兄)——凌雲集

陶潜の清節を追慕する詩を以て、和魂に對し漢才を満足せしめようとする程度の常識とのみ限定するものも餘りの酷ではあるまいか。文選、遊仙窟の我が共鳴を買ひ得た所以は、その豊潤華麗の辭句を出でなかつたかも知れない。しかし唐詩の永く愛誦された所以は、その基調のよくわが詩心の要求を満してくれた所にあつたと考へるのが至當だと思ふ。

然も、此處に再顧を要する點は、唐詩における哀調の由來、逃避的態度の特質、更に享樂的頹唐

—— 行西りよ之貫 ——

的傾向の依る所如何である。余は思ふ。彼等は甘美な哀愁を弄ぶものであり、徒らに捨身的態度を装つてゐるものである。無爲を鼓吹した老莊の心中、經綸の志の存したことは言はずもがな、阮籍嵇康の内心、或は生計抛來詩是業、家園忘却酒爲郷の如き瞬間があつたと共に、時世に對して悲憤慷慨の涙潸然たる時が多かつた。人間榮耀固緣淺、林下幽閑氣味深は、又謝靈運の心の一端を語るであらうが、彼は一面社會批評家であつた。官途自此長別、世事從今口不言なご、は、屢々唐詩に散見する想であるが、李白に於てさへ隱遁生活に満足し難き點あるを以て、如何に諸他の詩人の心中名利に對して戀々たるもの、あつたかは想像出來るであらう。廬山雨夜草庵中にも、必ず蘭省花時錦帳下が夢寐の間に想はれたのであつた。而して詩文の世界が、現世に志を得ない徒の歸りゆく隱遁所となつたことは説明すべくもない。

隱逸を詠出した詩の外、又饒別、贈答、述懷、哀傷等に屬する諸作が多い。此等に就ては、漢以後の外征内亂の續いた史實、廣般なる面積と旅行の困難、邊土に於ける索寞たる自然等を充分考慮に入れて、氣候温暖風景絶佳な東海の島嶼國と事情を異にしてゐることを知らねばならぬ。

然し、此等大陸文學の影響を一面に受けながら先づ延喜天曆の時代をかけて萌した日本文學は如

何なるものであつたか。所謂復歸時代の文學には如何なる色彩如何なる特色が添つてゐるか。

私は、便宜これを次の四項目に分けて説明して見たい。

- 一、情景融和の世界へ（貫之）
- 二、あぢきなさの觀照へ（紫式部）
- 三、自己弱少の認識より自然の懷へ（鴨長明）
- 四、大自然的解脱（西行法師）

—— 向 傾 の 學 文 四 ——

既に述べた様に大陸との交渉、その文物輸入の事實は我民族をして神經過敏的にさせた。目に入る物、耳に聞く物、その盡くが驚愕の種となつた。今迄一點の疑惑も持たずに狩立ててゐた鳥獸をさへ天平時代には佛教に、叛く殺生の行爲として禁止を言ひ渡された。又儒學の渡來と制度の完備は、生活の上に幾重にも規範を立て、個人的自由とその自由な伸長とを踏み躪つてしまつた。自由に放膽に拘束なしで進んで來た民族の前途は、丸で八方塞がりの体となつた。勿論、一部の知識階

級には大伴旅人の歌の嘲弄的になつた「益なき物を思ふ人、一賢しきもの言ふ輩があり、上流階級の一部には、新物質文明の感濁にそれこそ全然官能的陶醉を恣にしてゐる者もあつたであらう。然しかく信仰の世界に安心立命を全うし得た者は、僅かに一少部分に限られてゐたし、増して物質的満足と與へられてその中に感濁し得た者は千人中一人も居なかつたに違ひ無い。

さて然らば、最も根柢的に彼等の心を捕へ、驚異的となつた事實は何物であつたらうか。私はそれを大、自然であつたと言ひたい。復歸者の群れが始の源泉の畔に立歸つて、そこに映された眞實な自己の相を凝視した時、彼等の胸を最も強く打つた物は、嚴然たる大自然の相に比して餘りにも微細な自己の姿ではなつたらうか。微力な人間の烏合した社會相ではなかつたらうか。それは全く彼等の眞剣な態度の捕捉し得た驚ろきであつた。些の隙間のない緊張から獲られた直觀その物であつた。そこには彼等は、佛教の眞諦をも臆測することが出來た。又唐詩の眞味をも考へて見るこゝが出來た。何故なら、宗教も藝術もすべて自然對人間の解決をその目的としてゐるに過ぎないからである。

然らば、當時の人々はそのまゝこの信仰の道程、はた又その經學の門を辿つて行つたのであらう

—— 西 行 の 之 貫 ——

か。私にはどうもさうとは思はれない。勿論中には比叡山高野山に登つて善行を積む緇衣の徒もあつたらう、又、經史の類を繙く菅原、大江氏の如き學者もゐたであらう。猶、業平や小町の如く、人生の一時期であるとは言へ、愛欲の界に耽溺して、官能的蠱惑に依る情火に己が身を焼き盡さんとしたのもあつたに相違ない。しかも、茲に私は紀貫之を思ひ浮べる事に依て、最も時代に共通した精神を呼び起こす事が出来るやうに思ふのである。私は、最初項目にこの精神を假に情景融和の界と題しておいたが、その言葉はほんの見出し迄の物であつて、眞にその精神を諒解して貫ふためには、古今和歌集を熟讀玩味して戴くより外に方法がない。實に、貫之の出現、古今集の編纂は文學史上の驚異である、全くの偶然である。私はかゝる漠然とした説明を下す以外にこゝに言葉を知らない。敢て言ふなら、此れ迄蓋はれてゐた民族の心が大陸文明の接觸による驚ろきにより啓發されたもの——かうとでも記さなければならぬ。それは恰もふとした機會から、搖籃に入れられ慈母の子守歌に眠らされた人間幼時の記憶を中年に至つてふと思ひ浮べた様なものであつた。

或人は言はむ。自然美の詠吟、それは唐詩の摸倣に過ぎないと。見よ、廷臣の苑遊といひ、貴族の庭遊といひ、何れか大陸の風で無いものはない。古今集に季節の尊重されたことも悉て大陸文學

に根據を得てゐると。私もその批評に半面の眞理の存することを否む者でない。然し摸倣の大部は只形式に存する、かう私はそれを斷じたい。古今集における序、部立等何れも詩集に準據する點がある。而も時代の歌人は、驚異の對象となつたその自然を極めて微妙な態度で表現した。否、微妙といふには餘りに素直である、餘りに坦懐である。然しその自然さは決して大陸文學に認められない性質の物であつた、それはありふれた物の様で意外に、幽妙限りない境地であつた。

袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つ今日の風や解くらむ。

霞立ちこのめもはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける。

山高み見つゝわが來し櫻花風は心にまかすべらなり。

此等貫之の歌に現はれた自然は、何と云ふ優美なもの雅味に富んだものであらう。又詠出に於ける作者の態度の無味平懐な事であらう。其處には特に著しい物、特に新たな材料が選ばれてゐない、又殊更巧妙に、殊更誇示的に表現しようなど、言ふ作者の野心は、微塵でも出てゐない。それは大自然に對する驚異を其儘歌つたらしい上古の多くの作と何と云ふ相違だらう。かくて貫之の手は、いつの間にか幽冥神秘な自然神の手と繋ぎ合されて居た。彼はなほ

春來れば宿にまづ咲く梅の花君がちとせのかざしとぞ見る。

世の中はかくこそありけれ吹風の目に見ぬ人も戀しかりけれ。

秋の野に亂れて咲ける花の色の千種に物を思ふ頃哉

— 國文學の傾向 —

とも、詠みつづけた。それは、喜びの心や愛欲の心を、自然の中に感じてその儘詠じたものとしきや解されない。然し、貫之の心は自然と一體にはなつてゐなかつた。彼には、最初から、どんな窮地どんな難所に立たせられても、心の故郷に立歸り得る丈の餘裕があつた。それは彼の土佐日記や家集中のユーモアとキツトによく現はれてゐる。即ちこだわらないで事象を達観し洞察し得る洒脱味がある。それは水の様な無味單調さである、然し深く味はつて見ると形容の出来ない妙えなる味が湧き出て来る。

日本和歌史に於て、古今調はつねに心境の故郷となつた。幾度か新傾向や萬葉の復活が稱導された。然も其の運動の落ち付いて行く點は常に古今調味であつた。然しそれは貫之が歌つた境地が絶對的價值を持つてゐると言ふ譯で無く、貫之の暗示してくれた態度に於ける無量の感謝さに於てであつた。

— 貫之のよりの西行へ —

さて同じ時代にあつて貫之に並稱せられる文學者に、小説家紫式部がある（式部は貫之の歿後約卅年して出生した）。式部は何れの意味に於ても、貫之と對比される地位にあるけれど、兩者はその心境の點に驚くべき共鳴を持つてゐる。源氏物語五十四帖は結局、五十四首の和歌であると言つた古人の言葉は、必ずしも奇言を弄したものではない。宗祇あたりの歌人が源氏物語の愛誦によつて詩想を養なつたと云ふ事も極めて當然の理である。本居宣長は源氏によつて「物のあはれ論」を立てたが、それは古今集の歌に依ても充分、實證される性質のものであつた、然し乍ら、式部の心の動きには、貫之のそれと大分掛隔てのある方面もある。此の意味に、式部は復歸に於ける他の代表的道程を辿つた者と限定する事も出来よう。此れには式部の生息した時代的背景を簡單に説明しておくべきである。

式部は、關白道長の時代に生存してゐた。のみならず、式部は暫らく道長の室鷹司殿並に其女上東門院に仕へて居つた。道長と言へば誰も知る、藤原氏中最も專横と榮花を極めた關白である。如

— 國文の傾向 —

何なる攝録も、私には、漢武帝唐玄宗等の時代を理想としてゐたのであつたらうが、此の道長の時代こそ最もその理想に近づき得たものであつた。然し悉ての花々しさは、物質的表面に止つたものである事を斷言せなければならぬ。且、それすら極めて不健實の物であつた。焔の消滅前の一刹那に燃え立つた光の花々しさであつた。群盲の走り行く行手には、既に突立つた大障壁が仄見えてゐた。彼等は長い放恣柔弱な生活の爲めにその精神力を弛緩ならしめ、その官能力を萎靡せしめてゐた。到るところ醜いエゴイズムが横行し特權階級のための犠牲者の骸は山積されてあつた。

式部の心には、絶えず鋭い自己觀照が働いて居つた。又、彼の敏感な心の鏡には、世相が如實に映つて來た。それに卅歳未滿の身空で夫に死別すると云ふ暗い運命に面接しなければならなかつた。式部にも又餘裕味があつた。その情熱は革袋の中でのみ燃えてゐた。然し式部の餘裕は、貫之の輕妙洒脫に比して、極めて重厚温雅な特色を持つてゐた。彼女の心には重く倦怠が次から次へと積み重ねられて居た。それがやがて彼女の辛辣な批判力となつて外に飛び出してきた。兩性の争闘、公私兩生活の背馳、自他の矛盾、さては人間の生存本能等に對して。紫式部日記は全くかうした彼女の自己擬視の尊い記録である。さうして結局、彼女は(その日記に示す様に)爛熟した宮庭生活に

出入し乍ら 狐獨であつた。彼女は人一倍鋭敏な感受力(文學・音樂・繪畫等に對して)を有しながら其處に己を忘れて享樂を恣にすることが出来なかつた。又關白道長から戀の矢を放たれ、上西門院の私寵を得、日本紀局或は若紫と譽名された程衆目を惹き乍ら、彼女は有頂天になり得なかつた。

澄める池の底迄照らす篝火のまげゆき迄も憂き我身哉。

とも詠んでゐるやうに、醜惡な人間の利己主義虚偽に充ち満ちた社會、無常な現實相は、はつきりそのまゝ、彼女の心鏡に映じて來た。彼女は、衆多に混つてゐるそれよりもむしろ、里の家に寂寥を友とする道を選び、骸骨の亂舞、狂態に身を交へるより沈黙の哀愁に自慰せざるを得なかつたのである。

わりなしや人こそ人といはざらめ自ら身をぞ思ひすつべき。

水鳥を水の上とやよそに見ん我もうきたる世を過しつづ。

かうした遺瀕ないあぢきなさが彼女の胸に喰ひ入つて來た。殊にも晩秋の自然、寂寞な天地は彼女の心を犇々と捉へて、信佛への希求を濃厚にしないではすまさなかつた。山深い草菴の生活を憧憬せしめないではおかなかつた。然し、彼女は同時に、さうした心持を靜かに傍觀する事をも忘れな

— 之のより西行へ —

かつたのである。

思へば、復歸の道程からかくも宗教へと入つて行つたらしい古人の歩みの跡がこの一女性の歩みの中にも残されてゐる。

白雲の絶えず棚引く嶺にだに住めば住みぬる物にぞありける (小町)

山里は物のさびしき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり (同)

住み倍びぬ今は限と山里に身を隠すべき宿もとめてむ (業平)

式部はかうして、あぢきない古人の心持をざつと嚼みしめて考へて見た。勿論かうした隱逸者が皆々自己觀照の結果あぢきなさを體驗して此處に至つた者ではあるまい。名利を求めて得ず、又は愛欲の破綻から厭世思想に導かれて行つた者なごも多いだらう。然し此等に於けるデザイナーとデスベアーとの交響に又、言ひ知れぬ妙趣が味はひ得らるではないか。式部の觀照はさうした境地迄めり込んで行つたのである。實に源氏物語中の人物、事件は盡く、このあぢきなさの傍觀とでも言ひたい。すべてさうした心の反映に出でない物は無い。根強いあぢきなさ、押込められた情熱、夕映にも似た微笑——これ等は何れも源氏をしつかり包み込んだ氣分である。かくて現世を一蹴して念

— 貫之よ西行へ —

— 國文學の傾向 —

佛三昧に身を窺す事すら出来なかつた式部の心持は、さこそ迄も傍觀と云ふ域内に立止まつた。そこには官能生活や信仰生活といふ如き實行と掛離れて極めて自由に近い境地が展開された。茲に至つて、私は始めて貫之の到達した境地を聯想して、兩者の一致に駭ろく、勿論紫式部の歩いて來た境地の方が、より廣般であり、従て、表現が散文と云ふ形式をとつてゐたり、ユーモアがペースを含んで出てゐたりする點を認める事が出来る。然し大自然の驚異乃至人生の矛盾に對しての不即不離の態度、冷靜な凝視的態度に於ける一致は見逃す事は出来ない。みやびの體驗こそ、即ちこの點にある、彼等は落涙滂沱として涕泣しないかも知れぬ。然しその心底には泣く人以上の感銘と哀痛さがある。

次に、隱遁生活を實行した人に長明がある。(式部も晩年に出家はしてゐる) 彼は全く世人との交はりを斷つて日野山の奥に方丈の庵を營み晩年を了へた。然し一人が仕官に生涯を果し、一人が草庵の生活に孤寥を保ち得たとしても、後者を以て前者より一層徹底し得た者と直に斷言する事は早計である。紫式部の現實生活に對する態度に就ては殊更述べる餘裕はないけれ、源氏を一讀した者は、恐らく式部が如何に現實美を肯定してゐたかを思ひ合はすであらう。式部は、人間の心に醜

悪を認めれば認める程、大自然の示す大きい調和を感じて来たもの、様に思はれる。否、醜あるがために現實は、より多く美はしくなつて来た。式部のかゝる觀照は、無常なるがために現實から逃避しようとするのみか、益々その傍觀の瞳を見開いたのであつた。

拾遺和漢名數には、本朝遷士といふ項目に五十有餘の隱逸者の名があげられてある。長明西行以前にも、われ／＼は多武峰少將物語に、如何にも悲慘な高光の隱遁物語を見ることが出来る。清談を愛した能因あれば、苦行を積んだ増基もあつた。而して長明に至つて、特に「後代世人之遁世遺干龜鑑耳」と評せられた。これは言ふ迄もなく過賞であるが、長明の思想を見るには、天災と戦亂の打續いた時代を考慮の中に入れる必要がある。且つ彼の遁世の動機は、賀茂の社務職を望んで叶はなかつた、めと傳へられてゐる。私は殊更に長明のみの遁世を以て凡庸事だとする者ではないが先づこの時代、晩年に於ける出家といふ事實は極めてありふれた現象であつた。俊成や家隆の如き年老いて何れもが薙髮してゐる様に、特に學者歌人輩には特別の理由なく緇衣を纏うた者は少なかつた。猶ほ、餘生を、北山や宇治あたりの山間の廢退した故人の別業の跡なきに、世俗との交渉を斷つて送つた公家なども尠くなかつたものらしい。武家の勃興後は、特にそれが著しくて中には

修驗道に身を投じて苦行を積むピウリタンもあつたし、「固より金帳七葉の榮を好まず。唯、陶潜五柳のすみかを求む」と言つた様な調子で暫し都の塵埃を避け僧形を以て旅に浮身をやつす人々も多かつた様子である。

然し彼等が如何なる程度迄、安心立命を信佛からち得たかは疑はれる。一般に漲つた武士的氣分のため相當意志は硬化されては居た。故によく大嶺越の如き難行試練に絶える徒もあつたがそれ丈半面に現實執着の根強い人々もあつた。古の商山の雲に隠れ、潁川の月に心をすました聖の跡にあこがれて、一度は草の庵を結んでも多くの人々は其處に安住しかねてゐた。現實の蠱惑は愈々胸底に増して來るのであつた。

然し、彼等の現實的の希望は、必ずしも蘭省花時錦帳本を忍ぶ所にはなかつた。此處には、同じやうであり乍ら徹底した隱逸的態度があつた。然らば、隱士の魂を惑はす物は何であつたか。言はずも哉、大和島根を飾る自然の美、春花秋葉の麗はしさのそれであつた。武士の興起と共に公卿達は肉體も魂も散々に打碎かれ乍ら、現實に於ける自然美丈けには執着を斷ち切れなかつたもの、やうに思はれる。

が、うなは少なき貝を好む、これよく身をしるによりてなり。みさこは荒磯に居る、則ち人を恐るゝが故なり。我またかくのごとし。身を知り、世を知らざれば、願はずまじらず、たゞ静かなるを望とし、愁なきを樂みとす。

これは、方丈記中に長明の語つてゐる一節である。安元、大火、治承、大風、遷都の騷、養和の飢饉、元暦の地震——引き續いて此等の憂目にあつた長明は、天地に想を馳せ、人間に就て思念し、自己に對して凝視を送らざるを得なかつた。妻子のない身であつたが、遂に五十歳の春、世を叛いて大原山に身を隠した。日野山の奥に入つたのは六十の露消えがての時のことであつたらしい。

世の人言ふを聞く。長明は似而非隠者であると。然し私は却つてその點に興味を持つ物である。彼は全く方丈の庵の庭にも藥草を植ゑる出家者であつた。念佛ものうく讀經まめならざる時は、勝手に修行を休む如き法師であつた。糸竹や花月を友にし、時流泉の曲を繰つて我を忘れ、滿誓沙彌が風情、源都督が流を汲んで適遊する圓頂者であつた。他人から「汝が姿は聖に似て心は濁にしめり」と叱責された時、心更に答ふる事なく不請の念佛兩三度申して恬然たる緇衣者であつた。彼は最初世俗と闘ひ名利を克ち得ようとして努力した。然し、最後に餘り弱少な自己を見せつけられた。

— 國文學の傾向 —

其處に於て却つて豁然として自由な天地が開かれたのであつた。それは意外の事實であつたかも知れぬ。彼の意志が最少限度に收縮した時に、必要と自由とが偶然にも融和したのであるから。

命は天運にまかせて、惜しまず厭はず、身をば浮雲になすらへて、頼まずまたしとせず。一期の楽しみは、

うたゝれの枕にきはまり、生涯の望は、折々の美景に残れり。

それは何といふ悠遊自適の境地ではないか。誠に佛者にして教にさへ捉はれなかつた自由な心境と言はねばならぬ。

長明の到達した境地、又精進の道程は、紫式部のこれとの間には可なりの隔たりがある。長明には、傍觀といふ線上に到底停まり難い事情があつた。彼の道程には絶えず男性的の反撥力が働いてゐた。方丈記の文致にすら、それが特殊の遒勁さを持つて出てゐる。然も、猶、貫之、紫式部、長明と並べて其處に同様な一線を引き得る事は此處に今更贅言を要しない。

— 貫之より西行へ —

最後に、西行に就いて述べて此の章を結ばうと思ふ。讀者の中には、又かの隱遁法師の話かと、

復歸時代の意義と内在力を説く本論に於いて、餘りに非現實的精神を羅列して來た事を不滿に感ぜられる方があるかも知れぬ。然し私は悉ての物に反對價値の存することを信ずる物である。此れは私の説明を要す迄もなく、鎌倉時代に政治上に宗教上に、新精神の生誕した極めて注意すべき時代である。國民精神の反省認識は織豊時代に屬するけれど、その端緒は又この北條氏時代に發したと言つてよい。現實否定の態度は、西行の歿後程遠からずして、肯定の萌芽を出したので、我々はさうしても其處に中世の復歸精神の要素を度外視する事は出来ない。

西行は、長明とほゞ同時代の人である。兩者とも黒衣を纏うた身であり、歌人であり、隱士である意味に、或る人は、類似した觀察を兩人に下すかも知れない。私が別に項目を設ける所以は、西行に方丈の庵が無かつたといふ事實で充分であると思ふ。長明は、靜かにして愁ひなき生活を望むあまり方丈の庵に、恰も子供が玩具に對する様な愛着を棄てることが出来なかつた。さうして言葉通りに、その簡素と靜寂さに甘えて居る。西行の開いた界には、かく草庵生活に憧れる心地さへも見出だされないのである。彼は藤岡博士の評した如く純たる自然の心友であつた。否、大自然人そのまゝであつた。

— 國文學の傾向 —

此の才能豊かな法師の青年時代は、如何なる記録に徴して見ても、餘り順調に過ぎたかの様である。且つ妻子を捨て、迄の出家遁世の理由は不判明ではあるが、その時代の年齢は未だ廿餘歳にすぎなかつたものらしい。

胡蝶の夢の中に百年の樂を食り、蝸牛の角の上に二國の諍を論ず、善しといひ、惡しといひ、たゞ苟のとぞかし。

これは一條兼良の藤河の記に述べてある一句であるが、西行の遁世の原因のかうした生ぬるい物でない事程は斷定出来る。彼の性格で第一にあぐべき點は、何人よりも顯著な排妥協的精神であつた。一本調子の燃える様な情熱であつた。彼は元々武士である。彼にはそこに長明の持った意志なき、は到底比較にならぬ強い斷行力があつたのである。

いつの世に長き眠りの夢さめて驚くことのあらんとすらんと、熟睡を貪つて來た自己が見通されると、

諸共に我をも具して散りね花浮世をいとふ心ある身ぞ

捨つるとならば浮世を出るしるしあらん我には曇れ秋の夜の月

— 貫之よりの西行へ —

と花見に就てさへもわが身の焦燥さを痛感した。

世の中を夢と見る／＼果なくも尙驚かぬわが心哉

驚かぬ心なりせば世の中を夢とも語るかひなからまし

かく彼は眞の驚ろきを感じたかつたのである。そこにはいかにも、彼の徹底的態度が見えるではないか。人間は、誰しも此の現實が濁世であり無常の物であることを、概念的には承知して居る。乃至、口に出して、「何とか矛盾に解決を與へなければいけない」と言ふ。然るに其れは空の承知であり、空の戯言に過ぎない。此れは結局、心からの驚ろきを感じないからだ。安易な妥協に、疑惑を流し去るからだ。西行、即ち佐藤義清は宇宙人生に於ける矛盾疑惑に心から驚ろきたかつた。即ち身を挺して天地の謎を切り開かずには居られなかつた。この剛毅な武士的精神が、彼を一直線に佛門に送つた事は、誰しも納得出来る事であらう。望多き地位、離れ難き妻子と最後の訣別を告げて。彼は獨りの旅路に上つた。如何に時代が亂れ初め、保元平治の亂の前兆さへ見えて居つたとは言へ、かゝる斷行は到底常人のなし得る所ではない。かくて遁世した彼が、本山派の路程による大峰入を決行するに至つた事も、よく彼の徹底的態度を語るものである。彼は進んであらゆる貧困、あらゆる

る忍苦、あらゆる困難に面接した。

岩れ踏み峰の椎柴折りしきて雪に宿かる夕暮の空

と、西行の友寂蓮は一友の身上を詠んでゐる。私は、茲に西行とは、同時代で、西行の相に極めて彷彿たる聖フランシスコの托鉢生活を聯想する。彼は、徹底的に又「汝等金又は錢を貯へ帶ぶる勿れ」といふ聖書の言葉を嚴守して漂泊の一生を了へた一隱者であつた。

深き山に住みける月を見ざりせば思ひ出もなき我身ならまし

と、わが西行は大峰中の神仙宿で詠出して居る。何といふ苦行にあつて猶虚無淡泊とした態度を持し得たものであつたらう。

然し、此等の修行も、容易に彼を佛教的開悟の人とはなし得なかつた。彼にも、紫式部、兼好等に通じた斷ち難き多くの愛着の絆があつた。その第一は自然美、第二は文學美であつた。否、私が茲に彼の愛を斯様に區別立てる事は、彼の偉大な愛に對して冒瀆となるかも知れない。彼は、常に燃え立つて居る愛を心底深く藏して居た。曾て彼が一義清のうらであつた時、衆多の中で弓術の練習中偶々愛女の頓死の報知を受取り乍ら、只其の使に目配せした丈でその練習を續けたと云ふ逸話が傳へ

られて居る。其の眞偽は別として、彼西行は全くそんな人間であつたらうと思はれるのである。彼はそれ程愛兒の死を心中に痛み乍ら、一面よく此れを押へ得る人である。人目に介せずわつと號泣する人も勿論面白い。然し逸話の如き態度にも無限の味があるではないか、西行の強い忍從耐苦の精神は、妻子に對し、友人に對しての燃ゆるが如き熱愛の情を、終生おほひ隠しはしなかつた。

淋しさに堪へたる人の又もあれな庵並べん冬の山里

松が根の岩田の岸の夕涼み君があれよと思ほゆる哉

古里の昔の庭を思ひ出で、葦つみにと來る人もがな

諸共に影を並ぶる人もあれや月の洩りくる笹の庵に

彼の家集には、素直な心に友を待つかうした詠作が非常に多い。誰かこれを以て彼を責め得ようぞ。傳説によれば、西行が庵から出て來て洛中を逍遙ふので、文覺が「西行の生真坊主」と始め嘲笑した由である。然し、一度西行と言葉をかはすに及んで、文覺は西行に百年の知己を得たと傳へられて居る。西行は多く高野山に居た様であるが、決して長明の様に一つの庵の中に執着を繋いで居なかつた。彼には、市中と山間の別さへ不要だつた。大隱は朝市にありといふが、其れは正しく西行

の如き隱士をさすのであつた。彼の足跡は六十餘州の隅々に迄及んで居る。足跡を印した所、悉く彼に取つて己が住む地であつた。然様に彼の崇拜は釋迦のみに止まらなかつた。神に壯嚴を感じ崇敬を抱いた彼は、又加茂と言はず伊勢と言はず玉垣の前に額突いた。

同様に、彼が自然に對する態度も三昧に近い物があつた。

花に染む心はいかで残りけむ捨てはてにきと思ふ我身に

憂身には聞くも惜しきは鶯の霞にむせぶ曙の聲

うちつけに又來ん秋の今宵迄月故惜しくなる命哉

行方なく月に心のすみく／＼て果てはいかにかならんとすらん

願はくば花の上にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

彼の自然愛は全然狂的である。然し此れに對しても私は一言の批評も加へたくない。

思ひかへす悟や今日は無からまし花に染めおく色なかりせば

と西行は、既に自らそれをかくは告白してゐる。

又彼が詠歌に對する執着心には、恰も、慈母から與へられた菓子を懐にしてゐる少兒の様な觀が

ある。深草元政上人の西行傳といふ物には、「西行嘗曰、和歌者禪定之修業也」とあるさうである。西行は恐らく自ら此那まの抜けた事は言はなかつたと思ふが、逸話として様々傳へられてある様な歌に對する執着こそ、西行をして西行たらしめて居る事丈は言明してよい。彼の義清時代から、信じた方角には一圖に傾倒するといふ性格があつたが、これは終生離れなかつたものらしい。

東鑑によると、文治二年（西行六十九才の時か）彼は、鎌倉幕府を尋ねて、頼朝及其の幕僚の前で弓馬の道を講じたさうである。それは何といふ興味ある場面であつたらう。私は此一史實を述べて大自然人西行の話を結ばうと思ふ。只一つ、彼の新宗教の開拓者、源空上人の生誕したのは、西行の十六七才の年であつた一事實をのみ附記するに止めておく。

新古今調の完成

一

明治時代にあつて、最も生活に立脚した歌人と言へば、誰しも直に石川啄木を聯想するに相違無い。啄木はそれ程、諸他の歌人の中にあつて逸色を持つてゐた。彼が赤裸に實生活を歌ふといふ態度は彼の明星時代にさへ視はれる程、彼にとつては根強いもので、モウパッサン等の影響に依つて一層その主張が基礎づけられ、「兩足を地面に喰つ付けてゐて歌ふ」のが眞の歌人の歌だとも彼は言つてゐる。

彼の歌集、「一握の砂」は寧ろ初期のものではあるが、その如何に光つてゐるかは今更贅言を要しない。しかし、その集中の歌の大部の詠出された心理を調べて見る時、私は更に新しい暗示を與へられずには居られない。啄木がつねに、さうした心境において詠吟したかは、よく人々の想像し得ることであり、また、その特質から實境にあつて即詠されたものであらうとは、豫想されがちな點である。しかるに、「一握の砂」中の大部の作は、北海道から出京して後、机上においてすべて作

られたものである。それも創作の方に熱中してゐたかれが幾度も自殺を決行しようとした時代に、毎夜數十首宛作つたもの、かく集成されたのであつた。いはば彼の精神が極度に緊張した瞬間、過去の體驗がそこに盛り上り、それが彼の肺腑を突いて連綿と、辭句をなして出たもののやうに思はれる。

さて此の一事實は、古今和歌集の歌が、ゆかて新古今和歌集の歌を産み出し、新古今和歌集の味が、謠曲詠章の持つ調べとなり、それが最後に蕉風俳諧に歸つてゆく所の道程を辿るに、一つの鍵となりはしないだらうか。しかし私はこの一小論においては、只その中の三代集から金葉詞花を経て千載新古今に及ぶ推移のみ考察するに止めて置かなければならない。いふ迄もなく、評論の主題となるものは、詠歌における態度論にあるけれど、私は同時に各歌人の藝術觀に就いても論及しなければならぬし、生み出された各作品の價值といふやうな問題にも觸れてゆかねばならないであらう。

古今の序にやまとうたは人の心をたれとしてよるつの言はとそなれりけると發端にかゝれたる是和歌の本體とするところにして、もつとも大切の工夫ある事也其次に心におもふことをみるものきくものにつけてい

ひ出せる也とあるか第一肝要とする所也和歌は悉く心中におもふことを言出すが本意なり今の世間の人はみなおもふことを言はぬ也皆おもはぬ事どもをかざりもていふ也よつて歌はあらぬこと云也扱又ちからなれずして天地をうごかしといふめる所をよくおもひて歌の修行とすべし此ところ和歌の肝要とするところ也能く工夫あるべき也と承りし

これは烏丸光榮卿御口授(烏丸三代口授の一)に光榮の言葉として出てる所のものである。即ち和歌の肝要とするところは第一に、思想感情を實感につけて表現する事であり、第二に、その結果において天地の精氣を觸動せしめよといふことにあるらしい。かくて、古今集的の和歌は、かれ光榮の理想とした歌集の第一位のものであつた。

古今歌の特徴が、まづ第一に、實(或は、まこと)といふ點に存することは、誰しも否み難い。貫之自らその序において

今の世の中色につき人の花になりけるよりあだなる歌はかなきことのみいでくれば—
と時代の弊風について慷慨悲憤の情を洩らしてゐる點は、おそらく萬葉調の上世の歌との比較にあつたらしい。しかし、三代集中の諸歌を通讀する時、まづ腦裏に閃いてくる印象は、詠歌といふ現象

が實生活の圏内に存することである。少くとも、文學と生活の距離が、しかくかけ隔つてゐないことである。その特色についてこれを大まかに説明すれば、更に次のやうな諸點をあけることが出来る。

第一に、即吟即詠の多い事實である。

この點は、伊勢物語とか大和物語等を讀むものの必ず氣付くことであらうが、當時の歌人は（否、一般人とさへ言つてよいと思ふが）咄嗟の場合に當つて如何にも輕妙に、所謂臨機應變的に卅一文を即興即詠することが出来た。

二條の後の東宮のみやすん所と聞えける時正月三日お前に召して仰せごとある間に日はてりながら雪

のかしらに降りかゝりけるをよませ給ひける

文屋康秀

春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞわびしき

この作なども即吟としか受取れない。また貫之の名歌の一つとなつてゐる。

人はいさこゝろもしらす故郷は花ぞ昔の香ににはひける

の作にしても、まづ即吟といふことに就いて疑ふ餘地があるまい。撰集的のものでなく私家集を尾

ればこれらの點を一層確證することが出来る。

第二に、従つて問答歌の多い點である。記紀の歌が大半と言ひたい程、問答的のものであることは、如何に當時の吟詠といふ事が生活的であつたかを語るものであらう。さて問答歌、贈答歌は後世、いかなる世にも詠ぜられたものであるが、三代集時代程、それが顯著であつたことはない。如何に和歌の贈答といふことが、様々な場合において極めて普遍的に日常的に行はれてゐたかは、源氏物語一部によつても、十分想像することが出来る。

私は三代集時代の歌人の特色を、一は贈答歌本位のもの、一は叙景歌に秀でたものと兩様に分けることの極めて自然であることを信ずる。幽齋が、後撰集を以て古今集の選り残りの歌集である、實味が出すぎてゐると批難してゐるが、その實味といふことは總じて贈答的であるといふ事に一致するものらしい。西宮左大臣御集、藤原義孝集、本院侍從集、閑院左大將朝光集、相如集等に至れば、その内容は殆ど贈答歌のみであるといつてよい。戀歌、離別歌などがその性質上贈答的のものであることは言ふ迄もないが、結局それらは日常生活に屬してゐるからである。さうして女流歌人が一般に、自然鑑照の餘裕を持たず、主觀を臨機的に詠出する傾向のあること昔も今も變らない。當

代の歌に古く小町の遺作あり、また、三代集時代双璧をなしてゐたものに、伊勢と中務がある勅撰集中に多数の歌を傳へてゐる意味で、伊勢は屈指の歌人であるが、その家集を見ればその大部は盡く贈答歌であり、眞の叙景歌は實に十餘首を出でないのである。中務にしても、贈答歌の中に、盡く讃歌が僅かに交つてゐる程度にすぎない。

第三、に輕妙なウキツトと、ユーマアの縹渺たる點をあけることが出来る。即吟即詠といふ所から導かれてくる點の一つは、當意即妙を喜ぶ一般的の傾向である。これは所謂酒脱を愛する民族性の一面と見ることが出来る。しかし、金葉集の連歌部やその他後世の誹諧歌などの技巧的裝飾的、従つて鈍重なウキツトと、古今時代のものとは區別されなければならない。尤も古今集などでも遍昭父子のある作、物名、誹諧歌などには奇を衒ひ、巧を極めた嫌味あるものもあるにはあるけれど、一般の妙趣は到底後世の作の及ぶ所でない。これ言ふ迄もなく諧謔的精神、童心、無邪氣さがありのまゝに飛び出してゐるからである。そこには屈折がない。土佐日記に現はれたユーマアは、人皆の認めるとほりであるが、古今集中の貫之の諸作の如きも、もつとこの氣持を以て解釋さるべきではあるまいか。とにかくに深い意味、勿體なさを附けようとした貫之崇拜者に依つて、彼の作が

— 國文の傾向 —

これ迄幽微なもの、やうに曲解されがちになつて來たのは却て遺憾である。

誰しかもとめて折つる春霞立ちかくすらむ山の櫻を

梅の花匂ふ春べはくらぶ山暗にこゆれどしるくぞありける

山高見みつゝわが來し櫻花風は心にまかすべらなり

櫻花とくちりぬとも思ほへず人の心ぞ風も吹きあへぬ

これら何れにしても、至極輕々しい氣持で、櫻をかくす霞を、くらぶといふ山の名を、空渡る春風を歌つたものである。最後の作の如きも、あながちに無常を感じて詠み出した作とは考へられなない。その瞬間の心持はごく輕妙なユーマウスのもものではなかつたらうか。「人はいさ心もしらず」の歌にしても、主人を前にして、梢の花を仰ぎ、微笑しながら諧謔的に詠吟してゐる作者の佛をのみ、私は思ひ浮べるのである。すなはち、萬葉戲笑歌や催馬樂中の滑稽味の如き *der lustige Hum-*
or に比較していまだ距離のあまり遠くないことを思ひ見るのである。もちろん、諸家の作、特に畫讚歌などなると随分語戯本位に墮して作爲の跡の歴然たるものがあるけれども、後世爲家が、古今調を稱揚して、「詩の心好みよむべからず」(詠歌一體)と言つてゐるやうに、殊更らしい詩心もなく

— 新古今調の完成 —

洒々落々と輕快な諧謔を即吟したものと見るべき作のその中に多いことは争はれまい。

第四に、一般のたゞごとの態度に就いて述べて見よう。たゞごとのと殊更言つたのは、必ずしも蘆庵の言つたやうな善い意味をのみ含まず、一般詠吟における鄙俗安易な態度を總稱せしめためからである。

歌はよく讀まんとおもふはわるしたゞよう聞ゆる様によむべきと心得べしよく讀まんとおもふは歌みよの毒也とぞ慎んで能くまもるべき事也
とか。又

歌はいかにも心をひきくなくしてよみ習ふべし一向にひきくならぬは人の歌もきこえぬものなりと被仰也
といふ言葉が、例の烏丸三代の口授として傳へられてゐる。新古今調より古今調へといふ讚美の結果、かうした事が稱道された。まことに、かゝる主張は、わが歌學史を通じて、一貫してゐる現象である。實は新古今集時代の歌人自らさへ、このたゞごと味を讚美してゐる次第で、この點に於いては、二條家と京極家との別さへも見えないのである。その態度は連歌者流にも取容れられ、徳川時代の知紀、景樹、蘆庵等の主張に濃厚な關聯を持つてゐる。しかし茲に、その歴史を述べる事はさ

— 國文學の傾向 —

— 新古今調の完成 —

て置くとして、誰しもその主張の甚しく濫用されたことに氣づかぬものはないであらう。「ありのまゝ」といひ「平懷」といひ、「水味」といひ、「無味」といふ、結局このたゞごとの語感を換言したものにすぎない（心の構へ方にも關係はあるが）。そこで、まづ最初に古今集歌のたゞごとの意味を考へて見るに、これこそ眞實、文字通りの平易單純味をさしたもので、歌詞なども日常語（乃至それに近い詩語）が多く用ひられたのである、その單純な使用には原始味をさへ聯想せしめ得る。私は偶然とでも言ひたいのであるが、三代集時代の歌人の一部の者は、物心一如の妙境地を、文學の表現の中に立派に捉へ得たものだと思つてゐる。彼等の表現は、いはるゝ如く極めて平坦無味なものであらう。しかも其處には無限の美が潜んでゐるではないか、力が溢れてゐるではないか。われ／＼はそれらの諸作を微吟すればする程、びつたりと胸にはりついてくるある眞實味を感じずに居られない。恐らくそれらの諸作は、不用意の裡に口をついて出たものに相違ない。しかも無量の味に溢れてゐるのである。

しかるに無意味の憧憬、摸倣から生れた詠吟、それは三代集歌人中にも澤山ある。況んや後世古今調を追慕して、平懷な作、たゞごとの歌をと、狙ひを立てた似而非古今調派の歌は、これすべて

生命の宿らぬ模型にすぎない。古今調への執着その模寫から生れたものである以上、そこにどうして、眞のなだらかさ、眞のたゞごと味が現はれ出よう。かの良寛の歌のやうに、ほんとうにたゞごととの意味を生かした者は、その後和歌史上に五指にも充たないのである。

そこで、後世の集は別として、古今集のたゞごとの作には、既に、二つの立脚地があることが認められる。作者自身は遂にこれについて意識するところは無かつたかも知れぬ。しかし結果は、拙劣凡庸なたゞごとと歌と、入神妙技のたゞごとと歌との二つの區別を形作つてゐるのである。古今集は古來あまりに崇拜せられたために、徒らに修飾讚美されてゐるけれど、拙劣讀むにたへない凡作のその中に混在することは、眼識ある者の等しく認め得るところであらうと思ふ。

問云このふたつの體いづれかよみやすく秀歌をも得つべき 答云 中古の體は學やすくして しかも秀歌はかたかるべし詞ふりて風情ばかりを詮とすへきゆへなり今の體は習ひかたくてよく心得つれば詠やすし そのさま珍しきよりすがたと心とにわたりて興あるべき故なり

これは無名秘抄にある古今調と新古今調の比較論である。私はこの批判を甚だ面白いと思ふ。何れ新古今調については後述することにならうけれど、中古の體は學びやすいけれど、又、入り難い

といふその一節は巧みにたゞごと味に淺深の區別あることを語つてくれてゐるものではあるまいか。

學びやすいところに濫作といふ事が生ずる。詠みすてるといふ事が起る。練磨もなければ推敲もない。掛詞や縁語の効果もせいゝく地口か駄洒落程度に墮してしまふ。用語はすべて日常語であるそこで全然散文脈で生命力のない題材を、卅一文字といふ形骸に安價な技巧ではめこんだものにする。大隱は朝市にあるといふ言葉を是として、俗に伍し俗化しながら猶得々としてゐる似而非法師に變らない。そこに古今調には月並におちやすい危険な陥穽がある。生活的といつても、力ある生活と安價な生活との間には雲泥の差があることを心掛けねばならぬ。

第五では、ほんの附けたりとして「一句立たない傾向」について追補しておかう。換言すれば詞書を要する作の多い事實に就いてある。これらの點は、上述の特質から當然演繹される筈のもので詠歌がその場限りのものになれば、それが樂屋落のものになることも極めて自然と言はねばならぬ。會話に代用されるに過ぎない歌は、特にさうで、相互間には理解もあらうが、第三者にはそれが全然何のことか分らない。茲に詞書の必要が生じてくる。

言ふ迄もなく短歌は、表現上餘りに短かすぎる形式である。實生活を如實に詠じ出さうとすれば、しばしば詞書や但書たがしがを要求することも止み難いことである。伊勢物語中の歌にしても、前文があるために初めて意味が通じ、乃至歌の妙趣の味は、れるものが比較的に多い。物語中の挿歌が一般的に、さうした傾向を持つてゐることは、そのプロットと相即の關係にあるからである。古今集に比すると後撰集、拾遺集など既に詞書が、總じて多いやうである。これは、後撰拾遺等の撰歌に戀歌の増加した事實とも關係がある（雜部なども大半戀歌で成立してゐる）。加茂保憲女歌集の如き詞書極めて長く恰も小物語の如き觀さへある。しかるに、これも新古今調味が漸次顯著になるに従つて詞書も少なくなつて行つた。

しかし私評をこゝに附け加へるならば、短歌の特色は矢張り卅一文字に存するといふことである。假に詞書や但書を要したとしても、結局それらは第二義的のものであり、限取的くまどりのものか豫備的のものかでないならぬ。歌は、飽くまで詞書や但書の中に、盛り出てひとり聳えてゐなければならぬ。樂屋落ちのものでは仕方がない。題材が生なまの断片であるといふこと、これは短詩形において、どうにも免れ難い事柄である。俳句などは特にさうであらう。しかし、同じく断片であつても生命

の断片であることが重大である。生の断片であれば題材は、たとひ片割れであらうと、それには必ず生命力が籠つて居り、宇宙人生に對する直觀が宿つてゐるであらう。しかるに、歌が叙事脈のたらしめない内容に和歌といふ衣装を着せたのみのものであるなら、勿論とるに足らない。こゝに、たとごと歌に就いて述べたと同様な危険が、實的まことといふ古今調味に潜んでゐることを知るのであつて、其後漸く展開していつた藝術意識の態度とも是非比較して見なければならぬ。

さて以上で、ほゞ準備的説明だけは盡したつもりであるから、次に金葉、詞花を経て、如何にこれらの傾向が動搖變遷したかを述べることにしよう。

二

(1) 文學尊重の傾向

そこで第一に述べなければならぬことは、漸次萌して來た文學尊重の傾向である。この點に就いては今更説明する必要もないやうであるが、延喜時代と、鎌倉時代初頭の建久建仁時代との間には相當變遷もあるから、そこを少しばかり考へておきたい。詩文尊重の精神には、夙に大陸の影響

があつて、凌雲集の序などにも、「文章者經國之大業、不朽之盛事云々」といふ如き魏文帝の語を引用されてゐる。古今の眞字序にも「猷和歌君臣之情由斯可見賢愚之性於是相分」などいふ嚴めしい辭句がある。まんざら隋唐の眞似だけのものでもあるまいが、おひく／＼詩歌の巧者は特に位官を昇進させられてゐた。師尹の教訓に見えるやうに、古今和歌集を讀むことが重要な學問と見なされてきた。一方花山天皇のやうに御自ら歌集を撰述される方があれば、他方後鳥羽上皇のやうに撰者に互して御自ら御合點をなし給ふ方もある。上のなす所、下これに従うた。後冷泉天皇が中殿御會において歌題を賜つて歌の披講をし給へば、臣下は百首詠をなして天覽に供し奉るといふ風で、歌道の位置はいよく／＼高められていつたのである。

これをまなびたづまばらざるは面を墻にしてたてらんが如し

と迄、千載集の序文ではこの思想がにつきす、められてゐる

さてこの傾向は最初、神歌を作り出し、次に古名歌を神聖化し更に和歌表現そのものをすら重大視せしめるに至つた。もと／＼藝術の宗教化といふ事實は、法樂としての音樂が魁だと思ふが、狂言綺語の文學も讚佛乘の方便だといふこと、は白氏にも見え、わが朗詠にも詠せられて意外に早く

稱せられてゐたものらしい。しかし貫之時代にあつては、それは空言に過ぎず、和歌に對してさほどの神聖視は行はれ得なかつた。釋教の部立が始めておかれた勅撰集には、後拾遺集があつた。源氏物語中の「御法も方便といふことありて」といふやうな考、源經信が、「眞如實和の理三十一文字におさまる」と言つたといふやうな傳説(「さ、めこと」)に、ほゞ時代の推移が視はれる。かくて題にすら「金葉」といふ如き佛臭い名が與へられるやうになつて、千載、新古今は、その一卷を釋教歌に一卷を神祇歌に當てるに及んだのである。平安朝末期は、一般に宗教思想も濃厚になつてきたのであるが、沙石集、發心集、寶物集はそれ／＼西行、實日上人、平康賴が古歌讀誦によつて讀經に代へたことを載せ、徹書記物語は、住吉明神が俊成。定家に歌による往生を告げ給うたといふ傳説を語つてゐる。

次に、恰も泰西のミューズやアポローを見たやうに、歌神を想定する風が起つた。住吉大明神、玉津島明神及び人麿を和歌三神と定める如きその一つである。その他、衣通姫、赤人、蟬丸、黒主、道眞も神社に祀られ、文學の神として尊崇されて來た。戴恩記の如き、人麿、貫之、定家を和歌三神に數へて居る。かゝる信仰心の愈々顯著になつたのは、やはり、平安朝末期に屬してゐる。さう

した傳へのものであるか、袋草子には澤山の神歌があげられてあり、新古今集の神祇部には、さうした種類のもが更に多く集められてある。和歌の神があれば、發心和歌集的な崇神の歌も詠まれ出るだらうし、又一般に奉納歌を詠むことも流行するやうになつた。古く貫之が三輪明神に奉納歌をしたといふ傳へもあるが、それは到底俊成定家時代の流行に匹敵すべくもあるまい。百首を詠じて神に献げるものもあれば、神社において歌合を催すものもあつた。歌神の詠歌が、彼等歌人に尊敬せられたこと、佛徒に對する經典に異なるない。「世の中は何にたとへん朝ほらけ云々」の作は、惠心をして悟道に入らしめたと、袋草紙は傳へてゐる。

以上、私は縷々と偽傳めいたことを説き來つたが、かく詠歌を神聖視することに依つて、吟詠の心理に如何なる變化が生じたか、この點に就いて深く考へて見たいためである。この解決は、結局本論の中心問題に觸れる譯合であるが、こゝでは取敢へず名作逸話といふ様なものを考へて見よう。秀歌を得たいがために八十歳になる迄、住吉神社に月詣をしたのは道因であつた（無抄名）。又、秀歌が得られるなら五年の命を縮めてもよいと祈禱したのは賴實であつた（袋草子）公任は三年間も案じた上やつと一首の名歌を詠み、宮内卿は血をはいて迄、名歌を得んと案じつづけた。能因が、

「都をば」の自作につき、西行が鳴立澤の自作に對し、殆んぎ狂的に近い態度を持したことも参考すべき逸話の一つである。その他登蓮に關しては「ますほのすゝき」に就いて大貳高遠に關しては「相阪の關云々」の自作に就いて、それ〴〵妙味ある傳説が遺つてゐる。長能が歌のために思ひ死にをし、爲家は出家しようとしたと撰集抄や水蛙眼目は傳へてゐる。思ふにこれ等傳説の大半は附會であらう。しかし、虚傳か否かの問題は、今の場合、必ずしも重要ではない。私はかゝる傳説の喧傳された事實によつて、如何に作歌に對して人々が眞面目であつたか、熱意を持してゐたかを知り得るのである。それはいかにも恐ろしい執着と言はねばならぬ。

(2) 多數讀者の意識

私は、こゝあたりで説明を第二の項目に移して行かう。こゝで述べたい點は、作歌心理において多數の讀者を意識して來た事實である。その結果はいふ迄もなく作爲と技巧とをこらして着想の新奇を追ふといふ態度を招致した。もつとも、勅撰の事が行はれて來た延喜時代において、讀者を豫想せずに詠吟するといふやうなことが既に珍らしいことであつたかもしれない。しかしながら、その意識の未だ一般に極めて稀薄であつたことは、樂屋落ちの作が多いとか、一首正しくなくて詞書

を要する歌の少なくなかつたとかいふ事實で判断出来る。一般わが詩歌には多數の讀者誦者を期待せず、己れ自らの満足のために詠むといふ傾向が著しく出てある。俳句なごでは、特に詠みするなご、執着のないことを怡持としてゐるが、又、一面には極端に、詠作を過重する傾向があるのである。古今から新古今への推移には、それが鮮明に覗ひ得られる。社會的の毀譽褒貶を意識することの明白になる事、即ちこれであつて、これは輕妙洒脫な詠歌心理を漸く、重苦しいものに導いてゆく。輕快な機智は、作爲の見えすいた語戲となり、なだらかな擬人的態度も、摸倣の跡の見えすいたものになつてしまふ。

さてこれに關する説明を、歌學上における花實論から入つて行かうと思ふ。まづ文鏡秘府論(空海作)迄遡つて考へて見るに、それには未だ花實の用語は見られないけれど、内容には花實論的形式内容論に及んでゐる章がある。隋唐の詩文が著しく質實味を缺いて居り、文選、白氏文集がその麗句彩辭のために當時の學者に愛讀されたことは更めて言ふまでもない。空海はこの點に氣付いては居るが、やはりこの書が一の修辭書に終つてゐることは争はれぬ事實である。さて貫之は、古今序においても花に流れることを戒め、歌は生活をそのまゝ詠出するものであることを述べた丈、

— 國文學の傾向 —

その結果は古今集の歌風の上に現はれてゐる。花實相兼といふ事を彼は新撰和歌序中にも叙べてゐるのである。しかし、新撰萬葉集序(道真か)に「新作花也舊製實也」と論せられた通りで、延喜天曆の社會状態において、すべてが漸次形式過重花本位に趨くことは既に留め難い事實であつた。公任なごも荐りに、姿より心を本位にすべきことを論じてはゐる(新撰髓腦)。しかし論するだけで、事實は滔々と實より花へと流れていつてゐたのであつた。

しかるに、同じく推移するとはいへ、そこに自ら兩様の態度が現はれて來た。これを大まかに言へば保守黨的舊派と進歩黨的新派といふことになるが、それが左右に相分れて彈劾を交へ始めた。そのいかに熾んに行はれたかは、輔親卿集の中なごにも見えてゐるが、難後拾遺とか良玉集とかいふ如きに至つては全く勅撰集の揚足取のためにのみ物せられたものである。こゝに歌論といふものが益々隆盛になつてきた。

しかもかゝる論議そのものが、各自のあらさがしの才幹にまつ所が多い。公任なご、いふ一派は、歌論によつてのみ、その生命をつなぎ得たのだと言つてよい。さうした歌人にさうして、眞の質實性味が求め得られよう。彼れ公任が、新撰髓腦において「めづらしきことば」を佳賞してゐるこ

— 新古今の調の完成 —

と、既に心本位の態度を裏切つてゐる立派な證左ではないか。公任の作と稱せられてゐる九品和歌の上品上の歌を、「これは言葉たへにしてあまりに心さへてある也」と評してゐることも、また一つの傍證とならう。源經信は、難後拾遺抄において、堂々後拾遺集の平凡無味な點を批難摘發した。かくてこの詩において清新な格調を見せた歌人に師氏、曾丹、經信、俊賴なきがあつた。

貫之や躬恒の作の味ひと言へば、てにをはや助動詞を豊かに使用して、のびくと無理のない所にある、いはゞこれ見よがしの態度が露出してゐない。さうかすると、餘りかすかすぎる味のため、我々はその眞價を見逃したりする。しかるに、新派の歌人の作は、かなり盛り澤山で、時には銜ひ氣味でさへある。

— 國文學の傾向 —

卯の花の盛りになれば時鳥夜ふかき音にぞ有明の月(師氏)

ませちかくこふる花しもにほふ哉こや木枯の秋の初風(師氏)

山深み杉の村立見えぬまで尾上の風の花にちりかふ(經信)

自ら秋は來にけり山里のくすばひかゝる旗の伏屋に(經信)

朝日さすけさの雪けに水まさり世をうき橋の行衛しら波(好忠)

秋風はまだきな吹そ我宿のあばらくせるくもゆいがきを(好忠)

山のはに雲の衣を脱ぎすてゝひとりも月の立のぼる哉(俊賴)

あさましやこは何事のさまぞと戀せよとては生れざりけり(俊賴)

これは、目についた例歌をたゞ漫然とあけたものに過ぎないけれど、これらの中にさへも、新しく展開すべき境地の暗示は十分あるであらう。

さて説明をもつと深めて行くと、理知に偏した機智と、修辭における織巧味の増加に就いて更に言はねばならぬ。まづ前者に就いては枕草子とその作者の生存した時代の空氣とを豫め聯想して置いて貰ひたい。その時代前後において如何に、機智頓才が尊ばれ、キツトが歓迎せられたか、文鏡秘府論では秀句といふ語が麗句の意味に用ひられてあるやうであるが、當時は、掛詞や縁語を巧に使ふことを秀句法といふやうに用ひられ始めた。清少納言はその才幹の長けてゐたために全く、女官中の一王公の觀があるのである。しかしその地口、語呂の性質たるや、現代諸新聞のゴシップのそれと大差ないではないか。何とか奇警な語を弄して相手方をあつと言はしたいといふのがかれらの一念である。(源氏物語中に、紫式部が語戯縁語の類を卑下した口調を示してゐるのは、彼女の明敏

— 新古今調の完完 —

な自覺力が時代の弊を見抜いてこれを諷したものであらう。後拾遺や金葉、詞花の雜部なきを見る
と、一層さうした掛詞や縁語が濫用されてゐる。例の清少納言が、海布を出した機巧、平忠度の愛
してゐた女房が、「野もせにすだく蟲のねよ」と言つたといふ様な巧智は、至る所に行はれたもので
あらうが、きざと言はうか嫌味と言はうか、さうした俗味をそこに免れ得ないではないか。

今日よりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひ渡らむ

増基法師さへこんな語戯を言つてゐる。

秋の野の花見る程の心をば行くとやいはむ止むとやいはむ

こんな赤染衛門の歌も金葉集に見える。(長明無名抄に見える和泉式部と赤染衛門の優劣論はこの
意味において見るに値する。)

最後にあらはな技巧ぶりである。縁語、掛詞の愈々發達して來た點は前述の通りで歌學書では悅
目抄がその説明において最も詳細である。その他色々の方面に形式重視の傾向は現はれてゐるが、
その中巧妙な語句の倒錯、一句目における頓呼法、對句的詠法、纖巧な譬喩法なきを列擧すること
が出來よう。これらの各々に就いての細説は、餘り本題に遠ざかるので省略することとして、要す

るに、新古今調に近づく程、歌一首が一技巧品的に獨立し、意識的に案配されたことが諒解された
ならばそれでよい。他人の毀譽褒貶如何が、もつばらかれらの腦裏にこびりついてきてゐたのであ
る。

(三) 題詠の流行

第三には、題詠の流行に就いての實情を考察して見たい。作歌作詩において、それらの持つ生活
味の稀薄になつてゆく最初は、つねに、實感を伴はない作品の現出にある。それは、文化の發達と
共に、人心の餘裕が生ずるにつれて、避く能はざる現象であらう。爛熟した隋唐文明には、當然の
結果として實生活から遊離した思想や藝術が横行した。詩人といふ職業が生れ、創作の欲求が生じ
ないに係らず、徒らに詩文を製造する、麗句を案配する。殊更、題を設けて作詩する、奇巧に富ん
だ作によつて賞讃を得ようとする。これは、何れの國の文學においても同一轍の徑路であらう。定
家の明月記は如何に當時題詠が流行したかを實證してくれる。

わが萬葉集中にも、敢て求めるなら既に題詠的傾向の作も珍しくはあるまい。しかし寄物發思な
ぎと漢詩式を摸してゐるとはいへ、多くは歌の成立後題を附した迄で、そこになほ生氣が漲つてゐ

た。これを、新撰萬葉集なきに見える漢詩の焼き直しの和歌に比較すると、非常な懸隔差別がある。延喜時代には、かくて題詠法は漸く熾んになつた。貫之に比すると躬恒には、隱逸的態度と同時に題詠の態度が視へる。實自然をありのまゝに詠ます屏風繪なきに歌讚することを寧ろ巧みとした。かの俊賴が躬恒を貫之以上に賞讚した心持もこれで分るであらう。

かくて題詠は結題的傾向に進んでいつたが、これには一面句題和歌を参照しなければならぬ。句題和歌とは「大江千里句題和歌」の如く、漢詩の五言七言等を題として和歌を詠するもので、大略五字の結題と七字の結題とが専ら多くよまれた。生活に即した歌を詠じつくし、材料に窮してゐるもの、よい逃路である。これらに準じて漢詩的に「燈懸水際」といふ如き四字題、その他三字題、二字題の結題詠が行はれたのであつた。それは俳句における季題と、ほゞ同じ趣きのもつと考へていゝ。

さて、題詠をして愈々特殊の境地を開拓せしめたものには、色々の方面をあげ得るけれど、まづ次に讚畫歌と歌合の流行とを考へて見よう。讚畫の歌と言つてもその大半は屏風畫の讚で、延喜の御屏風に關する歌は、勅撰集にも多く散見してゐる。前にも一寸述べたやうに、叙景歌客觀歌とい

へば屏風歌以外のものは全く詠めないやうな歌人もあつた。賴基、清正、忠見、順、兼盛なきの歌が殆んど讚畫歌集となつてゐるのは、餘りに意外である。屏風畫は、かれら歌人に對して恰かも掲題に相當してゐたものらしい。詩の斷片にも、詩人の想が宿つてゐるやうに、屏風畫には、畫家の自然觀が出てゐる筈である。しかもその精神を抱擁してわが主觀を表現するのが讚畫歌の特色をなしてゐる。

歌合の起原は、かなり古いけれど、流行を來したのはやはり詠歌といふことが遊戯化されてきた以後に屬する。もとゞ歌合と題詠とは無關係のものであるが、歌合會の歌を屢々題詠にする様になつて、題詠の機會は益々多くなつた。

「題詠といふ事いできて和歌は衰へたり」とは、徂徠の題詠評である(南留別志)この言葉は一通りもつとものことと首肯されはするけれど、一面、必ずしもさうでない點がある。その理由を出来るだけ簡單に言つてしまへば、掲題によつて想像の範圍が限定された、め、却てその心境が深められたといふ事實である。それは、ここが禪家の公案に彷彿してゐる。「結題をよくく思ひ入りて題の中を詠じ」(後鳥羽院御口傳)といひ、「能々工夫して題の心を我が心にかまへ」(歌道抄)といひ、更に

「結題をばまはしてよめ」(愚問賢註)といひ「題を箱に入れて、其箱の上にあがりて箱をふまへ立上つて乾坤を尋る」(俳諧問答)といふ如き説明法は、すべて禪的玄妙と幽微さを持つてゐる。

戀の歌をよむには凡骨の身を捨て業平のふるまひけむ事をおもひ出てわか身をみな業平になしてよむ(正風體抄)

この言葉は題詠について述べたものではないが、寫實を離れて主觀界を詠出すべきを説いた點に、題詠の心構へをもよく語つてゐる。そこは氣分の世界である。掲題といふ示唆によつて、詩心に陶醉し、これを象徴化すれば、題詠は始めてその第一の目的を達し得たものと言へる。

(4) 自然心と古雅味

第四にあけておきたい點は、自然心及古雅味の世界に遊樂する傾向である。修辭尊重に始まり、題詠に深まつて行つた非寫實的傾向、風韻的傾向は、こゝに於いて愈々現實的色彩から離れていつた、所謂風雅精神の空間的に形成されたものが自然心であり、時間的に境地をなしたものが、古雅味であらう。何れにせよ、實感味を缺いて、風韻の界に清遊するものである。正風體抄の中の戀歌の辨の如く實感的戀愛すらこれを氣分化して詠するといふ遊樂的態度がそこに生じて來る。かくて

新古今調が、戀歌より叙景歌において特色を存してゐることは述べる迄もない。三代集から金葉、詞花と有名な歌人の特色を辿つて行つても、叙景歌人の増してゆく事實を首肯することが出來よう。新流新派と稱せられる歌人の特色も多く客觀的叙景歌的の點にあつた。

しかし、かく客觀といひ叙景といひ、すべて正しい意味の客觀や叙景でないことを豫め考へて見なければならぬ。このためには、風流とか風雅とか風情とかいふ言葉の嚴密な内容を吟味して貰つてもいい。八雲御抄とか井蛙抄とか後世の、古今調讚美派の屢々難とする點の中心は、「風情のいりほが」といふ缺點であつた。これは、三代集の風情あるに對し、千載新古今には、風情のいりほが、が多いなどといふ批難がそれである。劍術の型、能樂の型といふ如く、自然觀照の心構へにも一つの型が出來てゐた。それに執することをいけなしたものである。ともかく、時代とともに自然の歌ひ振にある様式、ある傾向の固着しつつあつたといふ事實は認めなければならぬ。それは客觀的といふべくあまりに、詩心に依て自然を詠めすぎてゐたものであつた。

自然鑑照の態度の相違は、その如何に依て文學上のイズムの別を生ずる程に、文學精神にとつては重大視すべき點である。藝術精神を、この點からして人間的のものと自然的のものと二大別して

見ることにすら至當のことであるかもしれぬ。ともあれ本論においても自然愛の精神が、如何に成長して来たかを歴史的に窮めるべきであらうけれども、こゝにはその項目をあけるのみに止めておきたい。一、社會より自然への隱遁 二、漢詩的自然觀の影響 三、嘆美的傾向の叙長。この三方面である。

さて、千載集や古今集の撰述された時代、如何に隱遁回避の思想が、深くなつて行つたかは、隱遁者の多かつた史實、並に能因西行の歌、方丈記などのよく立證する所で、贅言を茲に要しない。彼等はひたすら煩雜と醜惡に充ちたこの世俗から逸出して、玲瓏透徹な月の光、純淨無垢な花の匂ひに、傷いた心を慰めようとした。即ち彼等の求めた所は、赤裸で原始的な自然美を味到しようとするものではなかつた。峻峰曠野の雄偉な美を求めず、物やさしい庭園の優美さを憧憬した。勿論、四季の歌には、春になほ雪ふるみ吉野が詠ぜられ、氷りゆく滋賀の浦波も歌はれてはるよう。しかし遂にそれは、作者の唯美的詩心の中に育まれた心の庭にすぎない。又、追憶の世界に幻想化された慈母の懐にすぎないのであつた。彼等は、題詠的清遊の場合のやうに四季の詠作においてしばし濁世塵土の垢埃を洗ひすてる事が出来た。俊成にしても、定家にしても、若りに古今調の風情への

復歸を主張してゐる。しかもその主張その執着は、やがて「風情のいりほが」であり、幻想の形成であつた事實に氣付かなかつた。貫之は、別に、傳統や規範や形式美といふやうなものに捕へられずに、すなほに面白く自然を詠じた。しかるに俊成や良經の心には、すでに藝術美の意識が顯著であり、「かやうに」といふ標的が、眼前にぶらさがつてゐた。かれらは苦吟すればするほど、結果として唯美的傾向から抜け出ることを得なかつた。すなほさは、すでにかれらの後方はるかに遠のいてしまつてゐたのであつた。西行は、そんなに月を見れば月心つきこころ、花を見れば花心はなこころといふ、自然の本懐に入るために悩んだことであらう。

三代集以後、漢詩的自然味の漸次詠歌中に浸潤して来たことは、説明を要しない。

——常によき詩を吟じて心をすますへきなり詩は心をたかくすます物にて侍れ蘭省花時錦帳下廬山雨夜草

菴中 此詩をそ亡父卿は詠ぜられし 故郷有母秋風淚旅館無人暮雨魂 是亦すぐれたることにて感をうこ

かすたくひなり 白氏文集の中に大要の卷有 つねに披見せよとそ古人も申たる(三體和歌)

三體和歌は恐らく、定家の末流が定家の書いたもの、やうに假託したものであらうが、新古今時代の歌人は時に詩人でもあつたので、定家など特に文選唐詩を愛讀した。彼の句法の中から「浦

— 國文學の傾向 —

風寒く残る月影「都の山は月織うして」なご漢詩の影響を求めらるなら決して屈指に止まるまい。これは句法の上のみならず、前述の隱逸的趣味なごも繰れあつて、特殊な叙景歌を生ぜしめたもので、その成行きは當然の事だつたと思はれる。嘆美思想の流行は、以上の説明からもすでに歸納せられたことであらうが、こゝに享樂的傾向をもその参考として出しておきたい。と言ふのは、隱逸思想の熾盛な時代は、必らず半面に享樂的精神の燃えてゐる時代である。これは關白道長時代を回顧しただけでも、直に首肯されるであらうが、官庭に漲る享樂的態度の裏には、反抗的逃避の氣分がみち／＼してゐた。享樂者の背後には、必ず犠牲者の群れが號泣してゐるのが世のつねである。かくて享樂は、頽唐美を生んだ、頽唐美は隱遁美に共鳴を求めた。殊にも、鳥羽上皇の時代から兵戰の絶間なく、末世的觀念は、たゞに位置を覆された公家のみでなく一般に普及していつたのである。(保元物語)。

かゝる時代に、人心が強い美を求め。その中に感溺しようとすることは、史上乏しい事柄ではない。頼阿は井蛙抄に、艶美なこの時代の歌を、濃彩の繪に比較してゐるが面白い見方である。われ／＼は、こゝに濃彩にして情景を描かざるを得なかつたところの彼等の心持を考へて見なければな

らない。人間世界の混濁したあまりに、艶美な自然の心を強く把握しなければ、絶えられなかつたかれらの氣持を考へて見る必要がある。

自然の中へ逃避してゆく精神と、古雅な世界や過去の世界を憧憬する心とは其の心理において、極めて近いものがある。悦目抄は、藤原基俊の作となつてゐるが、その實、袋草子、八雲御抄等より後のものであることは考證され得る。後の世のものだけに、同書には古典味に沈潜して、その氣分の中から文學を味はうとする態度がよく出てゐる。

これ(歌をさす)を心えんと思はゞたゞ、よき歌をうちあんで、その歌をわがよまんする心地に我心のう

ちにもたせて 天をばしらかし 山野河海をも思めぐらせば心得られ侍る物也

このよき歌といふのは、書中にも説明してあるやうに主として萬葉集三代集中の名歌のことである。この態度はかの三體和歌の作者が、漢詩的雰圍氣に沈潜してゐると、全く好一對ではないか。心の中に詩歌乃至古雅味の醸成を待つて、それを幻想裏に詠出しようといふので、感覺的に外相を凝視しようなご、いふ態度は少しも見えてゐない。かうした要求は、遂に髓腦(新撰髓腦等)を作らしめ、文鏡秘府論あたりに見える歌病といふ制約を敘長せしめ、歌詞の制定固著の弊を來らしめた(俊

— 新古今調の完成 —

頼無名抄)。本歌取と稱する不思議な遊戯歌の發達したのも、また歌人に師弟關係が結ばれ傳授的事實の起つたのも、上述の傾向を立派に例證してゐるものと考へる事が出來よう。髓腦、歌病は、誰も認めるやうに、多く形式上の束縛にすぎないから、その法則に従ふものは自繩自縛に陥るだけのものである。しかし一つの型であるだけ、巧に型に入り得ることは特殊の興味感をひきおこしてくれる。特に古制のものである程、それが神秘化されて温古的な愉快がその中に感ぜられる譯である。勿論「所狭き髓腦」や、勿体づけられた歌病が、三代集の精神に共鳴を持ち來す筈がない。俊成や定家が、歌病を輕視することは當然事であらう。しかし、その輕視の心理を考へて見るに、それは理論上からであつて感情的には、かなり強い保守的傳統精神を示してゐると思ふ。これは、俊成と六條派の對立を見ても分る。顯昭が六百番陳狀において、俊成を難じた點は、俊成の保守的態度に對して、はなかつたか。定家も、つねに寛大らしい口吻を漏らしてはゐるが、彼の消息(定家卿消息)を見れば、題詠法を論じ、歌病を是認してゐて、決して裸のまゝ古今集の中に入り得たやうな歌人とも思はれぬ。

古往を追慕する心には、純眞な情味が溢れ出てくる。しかしそこに約束を作つて、それを是認す

る態度には、理智的冷靜さが君臨する。これは、今迄四項目を立て、説明して來たすべてに通ずる不思議な矛盾である。第一の文學尊重の精神において、第二の讀者意識の精神においても、第三の題詠流行の精神においても、つねにその傾向が見える。私はこの疑惑から、最後の問題に移りゆかねばならぬ。

三

さてこれから愈々最後の斷案に入るのであるが、今更私は、ペンをすて、亡羊の嘆を繰更へざるを得ない。さうかして私の心の纏もつれを巧くほぐし出したものだといふ焦燥を感じる。所で、知と情の混融と言つた、その知の性質は仰も何物であるか。私は、極く簡結に、之れを藝術的意識だと言つてしまひたいのである。無論それも始めの間は、かなり、潜在的のものであつたとも言へようが、最期の歌人の生活を見るに、すでにそこには生活の藝術化の精神が、著しく出てゐるのである。「詩の心好みよむべからず」

それは、千載新古今の反動として、言はれた戒であることはすでに述べておいた。詩の心、それは

正しくこの藝術意識をさすものではあるまいか。藝術意識の文學は、かの南歐文學の特色としても考へられるやうに、唯美的であり、技巧的であり、叙景的であり、情緒的である。更に藝術的幽玄と藝術的三昧の心を現はして來る。茲に私は幽玄と三昧との二階段に就いて、更に新古今調を味はつて見たいと思ふのである。

幽玄心に就いて叙べる前に、一寸好きといふ事について考へておかう。心敬の言つた「たゞ、數奇と道心と閑人との三のみ大切の好士なるべく候」の數奇もこれである。文學を特に尊重する精神は、文學に對する強い愛着の心ともなつてくる。これも、このすきの心であるが、俊賴は無名抄の中に「たゞあやしくとも好むべきなり 好むものを歌よみとはいふなり」と言ひ、俊惠が賴政について

賴政卿はいみじがりし歌仙なり 心のそこまで歌になりかへりて常に是をわすれず 心にかけつつ鳥の一聲なき風のそよと吹くにもまして花の散り葉の落、月の出入雨雪などの降につけても立ち起臥に風情をめぐらすといふことなし(長明無名秘抄所載)

と評した心持、何れもこのすきの心を言つたものである。二條良基は、近來風躰抄に、「新古今ほこ

面白き集はなし」と言つてゐるが、これら千載新古今調には、確かに獨特の幻妖魅力がある。われわれを捉へて心の底まで歌に染み入らすのではないかと思はせる力がある。されば、濃厚豊醇なその雰圍氣に耽溺して、しまつて歌はざる歌人さへも輩出するであらう。

しかし、危険は専らこの點に潜んでることを知るべきである。こゝに於いて私は「先づ幽玄的であれ」といふ語を以てこの境地を説明したのであるが、實は、その幽玄といふ語に明確な定義を與へることは困難なことである。今は暫らくそれを「意識された藝術の窮境」であると言つておきたい。由來、新古今調の第一特色が幽玄にあることは誰しも認めながら、その字義は甚だ漠然としてゐた。かゝる私の用法において、諸書の使用法と支障を來たさねば幸である。ともあれ、我々には藝術を忘れる瞬間と共に、強烈な藝術意識を抱く刹那がなければならぬと思ふ。たとへば

先 歌をよむ人は ことにふれて情をさきとして物の哀をしり つれに心をすましてはなちり木の葉のおつるをも つゆしぐれ色かばる折節をも めにも心にもとめて歌の風情を立居につけて心にかくべきにてぞ候らん(阿佛口傳)

なごいふ日常生活の風情化藝術化といふ態度を、もつと押進めて、美といふ坩堝にわれわれの心

を注ぎ込み、さうして美の髓心に觸れようとする要望は起らぬものだらうか。それは、面壁九年の達磨の心持にも類したものである。私は、次にかゝる境地を求めた歌人の様々を紹介して見なければならぬ。

むかし女などは、或はふし、或はともしびを、かすかにかゝけて、こゝろぼそくして案じたる人もあり。西行が一期行脚にいで、うたをよみしゆへ、行道して案じ、あるひは北面の戸をほそめにあけて、月のかげを見、定家は南面をとりはらひて、ま中におゐて、南をほるかに見はらして、衣文たゞしくきて案じ給ひき。これは内裏仙洞などの、はれの御會にてよむやうに、たがはずしてよき也。俊成は、いつもすけたる淨衣の、上ばかりうちかけて、桐火桶にうちかゝりて、案じ給ひしなり。かりそめにも、自由になしたりなど、案じたりしことなし(徹書記物語)。

故刑匠爲世をさす被語云、はれの歌よまむとては 法輪に參てよみし也 (水蛙眼目)。

その他、「青雲に向ひて案じ」「己、束帶にて陣座に着て公事をこなひたる様に」して詠むなご様な態度習慣をあけることが出来ようが、惟ふにこれは結局、各自獨特の概念法にすぎない。詠歌的氣分を醸酵せしめるための独自の型式にすぎない。しかし、その人工的(?)感激の中に、やがて藝術

陶醉の境が現出されて、數十首の作が詠み出されるならば(啄木のそれの如く)われくは更にかの即興的作歌の意義を反省して見る必要がおこるであらう。

以上は、詠歌における肉體の構へ方の特殊なものに就いてのみ述べたものであるが、われくは、次の如き言葉に依つて、もつと深い心理的用意を考へることが出来よう。

幽玄といふ物は、心に有て詞にいはれぬものなり。月に薄雲のおびたる、山の紅葉に秋の霧のかゝれる風情を幽玄のすかたとするなり(清巖茶話)。

古人、歌のすがたどもを、物にさまぐたとへ侍り。これ等にてさとりべく哉。

水精の物に留り、なもりたるやうにといへり。清く寒かれと也。

五尺のあやめに、水をかけたることくなどいへり。さしのびぬれくとしたるさまなり。

大内裏の、大極殿の高座にて、ひとりさしてもうでぬやうにといへり。たくましく強力にと、いへるこゝろなり。

大なる時は虚空もせばく、こまやかなる時は、芥子の内にもあるやうになといへり。淨藏法眼の神變のこゝろなり。

とくなどをしへ侍り(さゝめこと)

民部卿入道被_レ申しは、歌をば一橋をわたるやうによむべし。左へも右へもおちぬやうに、斟酌すべきなり。心のまゝによむべからず。又被_レ申しは、塔をくむやうによむ。塔をば上より組むことなし。地盤よりくみあぐるやうに下旬よりよむなりと云々。(水蛙眼目)

或は、「浮文の織物なぎを見る如くそらに景氣の浮べ」るを賞し、「枯野の薄の如くひえさび」よ、と言ひ、「雲の風にふかれ行たる體」即ち行雲回雪の體を立ててゐるもの、何れとして、詠歌心理の暗示でないものはない。俊成が、西行の御裳濯川歌合の判詞を見ても、長高、姿、さび、艶、優といふ如き評語を多く用ひてゐる。それは、呻吟中における心の些細な屈折を指的したものであり、又かゝる象徴的暗示的用語を以てせざれば、到底表現し得ない境地を示したものである。佐々木博士は、幽玄とは、古今調の物のあはれの結晶であるといふ意を述べられてゐるが、い、比喻だと思ふ。結晶、美の結晶には炫耀の彩華はあるであらう。しかし、そこにあるこだはりの心持の結滞を否定することは出来まい。

さて、かうした境地が、宗教的氣分との共鳴を持つて來るは、自然のことではあるまいか。それは單に態度の上のみでなく、無常觀にも共感がある。私は、發心集、寶物集、乃至心敬等の諸書を參考する迄もなく、俊成、定家の心理に宗教味の浸潤してゐることを感ずるものである。幽玄文學は宗教的文學であると言つても決して獨斷にすぎはしまいと思ふ。

和歌は隱遁のみなもと、菩提をすゝむる直路、眞如實相の理、三十一字におさまれる。

と源經信も言つたさうであるが(さゝめごと)、かうした文學に對する信仰心の一般に漲つてゐたことは争はれない事實である。後世、耕雲心敬なぎが歌は陀羅尼である(耕雲口傳)とさへ言つた程、當時の歌の自然觀には深い宗教的哀調がある耳をすまして人生の暗示を聽かうとする眞面目さが感ぜられる。心敬僧都庭訓や吾妻問答に、飛花落葉を見ても無常を觀得すれば、幽玄の境に出入し得ると説明したことは、幽玄中の神秘を誇張した迄のもので、俊成、定家には確にその精神が見えてゐる。二人が住吉神社を歌神として尊敬した事は諸書に出てゐる話で眞實のことらしいが、歌神を尊ぶ心は歌を尊ぶ心であり、すなはち詠歌を宗教化する精神と見做さなければならぬ。さて、私の新古今調についての説明は、こゝで打切るのが至當の事かとも思ふ。しかし、私の心

はなほ竿頭一步を進めることを要求する。それは何か。これに就いて、私は本題である藝術意識、或は美の意識の文學といふ點に立歸つて來なければならぬ。さうして唯美的藝術は、結局、過程の上にあるものであることを是認しなければならぬ。しかし美の意識が、いかに生活意識の藝術の前景に存するものとしても、それは缺く能はざる前景であり、過程であることを附言したい。かの心敬が、

自在無窮不可説の風雅を盡し、此道のさとりを得べきは、新古今邊の歌仙の歌なるべし

と言つてゐる一句は、眞によく新古今調の意義を釋明したものと云ふべきであらう。

さて、單にすぎに停滯しないで幽玄に入つた所に、歌人の心境に一段の進歩があつたことは前説したとほりである。しかし、幽玄精神の中に、風情のいりほが、風情に凝りすぎた傾向の存することを否みがたかつた。この點はさうしても、もつと滋味を加味して來なければならぬ。もつと心が押へられ、澄まされて來なければならぬ。定家が父俊成の作風にやゝ不満不足であつたのは、この點に理由があつたと言つてもよい。定家は、心をおちつけよとしばしば繰更していふ。ここに新古今調から、更に、新しい世界へ展開されようとする第一の暗示があるのではあるまいか。そこ

は、既に意識の極點である。頂點である。八雲御抄には

歌を見しり心うるごと、此の道の至極也。(中略)歌もよくばよめども、心をしらぬおほし。

ともあるが、これは新古今集と程遠からぬ時代の評語として吟味に値する。歌は詠むといふことを必ずしも第一要件としない。人生における詩歌の意義を直観することを第一の要目とする。私は次に、前述した宗教思想の問題から、第二の暗示を受けとるものである。即ち阿佛尼は、その口傳の中に、歌道の修業を、佛道の修業に比較して、歌道にも佛道の如く無上菩提があることを説いてゐる。無上菩提は、眞如の境地、もしこれを歌道に適應するならば、歌人にして歌道を忘れた境地でなければならぬ。これは至極、入るに困難な境であるが、又、意外に手近いところにある世界とも言ひ得よう。私は、三代集の歌仙に、殆んぎ飛躍的に、この世界を觀照しえた者のあつたことを、本論の始めにおいて述べた。

抑も、詠歌の態度に、能見と所見とこの二大別のあることは、當時の歌論者のすでに指している所である。即ち、山がつを見て、それを山がつとして客觀的に詠むのが能見であり、山がつと自己と一體になつて歌ふ場合が所見の歌ひ方なのである。されば所見とは大自然との冥合を意味する

新古今調における自然的精神については、既に觸れても來たけれぎ、そこには屢々自然と人間の融和が見られた。しかし、その自然の多くが、大自然そのものの姿でなく、あまりに傳統的のもの幽玄的のものであつたことは到底これを否定することは出来ない。大自然の核心へ——かういふ風に考へてゆくとき、私は、西行も芭蕉も、すべて新古今の世界に育くまれたことを、はつきり認めるものである。これには、爲兼の歌道に對する態度なきをも、参考すれば一層諒解されうること、思ふ。

— 國文學の傾向 —

新古今調と古今調は、正に歌調の上に對角線上に立つてゐる。しかし、兩者は反對價値となつて今後相互に影響されてゆかなければならない。文學の成長、展開は、やはりこの問題によつても、一層明瞭に指示されてゐると思ふ。最後に、愚秘抄にある一つの逸話を参考までに採録しておく。

木の葉ちる宿ばそれとも聞わかず時雨する夜もしくれせぬ夜も

此歌の作者、年比住吉明神に、秀歌一首よませて給へと祈申けるが、病にしづみて、つゝに命の期にぞめりけるに、心中に住吉をふかくうらみ申て、秀歌一首よませて、命をめせと申たりし、そのしるしもなくて、すでに身まかりなんことよと、泪のうちに思出侍ける時、前にさふらひける、六歳の少女に物付し

ていはく、汝秀歌をばよませたりし物を、いかに我をばうらむるぞ、怒れるけしきにてせめければ、神詔としりかしこみて、病席を立、手を洗、口をすすぎて、されば愚作の中に、いづれの詠歌にて侍るやらんと申ければ、彼少女、うつくしき聲さしにて、「時雨する夜もしくれせぬ夜もは、いかに」と仰られてやがて本心になりきとなん。神感の通じて、まさしく住吉のさづけ給へる歌、さこそいみじきためしなるらめど、作者猶しらざりける事、猶々ふしぎに侍り。

— 新古今調の完成 —

源氏物語の「薫」の描寫

—

—源氏物語の薫の描寫—

源氏物語を通讀し卷を閉ぢた時、さて、物語中のどの人物が最も、巧みに描き出され、深く印象に残されるだらうか。自分はこの問ひに對し、躊躇なく薫大將の描寫であると答へるものである。わたくしと感を同じうせられるものも、必ずしも尠くはないであらうと思ふ。

作者が力を入れて描寫した、らうと思はれる人物は、薫以外に、男では、主人公の源氏を始め、桐壺帝、朱雀院、冷泉院、頭中將、夕霧、柏木、匂宮等があり、女では、藤壺、紫上、葵上、夕顔、明石上、六條御息所、女三宮、朧月夜内侍、明石中宮、宇治大君、中君、浮舟等があつて、次々に算へて見ると、かなりの數に昇るであらう。しかも、それらの中で何故に薫が殊更目立つてわれ／＼の注意をひくのであらうか。その性格が、強い力を以て讀者の肺腑に浸潤してくるのであらうか。

これには、(一)薫といふ人物の點出が五十四帖の後半を飾つて居るといふこと、(二)主人公の源氏に

對照的の位置に立て、描かれてゐるといふこと、(三)その描寫が散漫に流れず、さりとて簡結にすぎるといふ嫌ひもなく、澤山の人物描寫の中では、最も要領を得てゐるといふこと、(四)その一生が暗い運命の手に弄ばれて悲劇的であつたといふこと、等を考へて見るこゝが出来らうであらう。しかし、そこには、もつと根本的問題がありはしないか。すなはち、作者の性格と、薰の性格との接近がそこに感じられはしないか。薰の性格描寫には、たしかにある場合、他の如何なる人物——例へば紫上とか空蟬とか夕顔とか、よく作者の個性の一面を表はしてゐると思はれる——よりも、一層作者自身に近いものが内蔵し、作者自らの息づかひがそのまゝ、その中に聞かれるやうな點がある。人としての作者紫式部——この問題については、拙著「國文學の序説」の第一章を参照して頂けば、甚だ、幸である。ともかくに、源氏物語を通じて、作者を見ようとする者には、薰の描寫は、是非参考すべき一つであらう。この意味に、作者が如何に、薰といふ一人物を描出してゐるかといふことは、源氏物語研究者にとつて興味ある問題でなければならぬ。

二

さて、本論では、作者が如何なる程度に、その薰といふ一人物を表現描寫してゐるか——と言ふことを検討して見たいのであるが、その前に、小説における性格描寫の意味について、基礎的に多少考へておく必要があらう。

小説、特に長篇小説の客觀的内容(描寫の要素)を、事件(occurrence)性格(character)周圍(milieu)の三つに分けて見ることに就いては、誰しも異論は無からう。さうして、作家の態度によつて、ある作品は事件を重んじ、他の作品は性格を主にする、乃至、事件と周圍、性格と周圍と言ふ様に兩者を均等的に併用する、進んでは、事件、性格、周圍の三方面を渾融調和せしめて輕重なく表はす——といふ様に、作品それ々に色彩調子の差別が出来てくる。かういふ見方にも別に不都合は起らないやうに思はれる。

もつとも、誰か「文藝時代」の作家の作を、事件ばかりで性格の表現に乏しいとて非難したところ、作家の方から、「性格の無い事件があるものか」と逆ねぢを喰はしてゐたのを近頃よんだことがある。一應その抗議は正しからう。しかし、言ふ所は、焦點を餘り結構や筋におきすぎて、個性(individuality)の表現におかなかつた事實を指摘したわけで、批評者は事件描寫にも性格感が潜在し

てゐる位のこと、心得てゐたものだと思ふ。要するに、事件なら事件、背景なら背景を重んじたといふことは、そこに重點を立てた丈けの意味で、如何なる場合にも、性格を無視して文學は存し得ないといふことが言へる。

近代小説の最大の特徴が、精巧な性格表現に存してゐることは、こゝに縷述するまでもない。歐米において嚴密な意味に、小説(novel)といふ稱呼を與へられた始祖であるリチャドソンのパミラの特色はいふ迄もなくその嶄新な性格表現の點にあつた(書簡體小説ではあるが)。しからば、小説に描かれた性格は、さういふ點において、物語に寫された性格と區別されるか。わたくしは、大まかながら、これを獨自的と普遍的、乃至個性と類性といふ様に分けて見たいと思ふのである。

言ふ如く、自然主義の主張は、必ずしも獨自的性格(個性)の描寫でなく、平面的普遍的取材の上に存してはゐた。しかし、「破戒」の丑松(藤村)、「蒲團」の時雄(花袋)、「何處へ」の健次(白鳥)の性格描寫を考へて見よ。われ々には、さうしてもこれを、多血質膽汁質神經質液質といふやうな類性的見方で評し去ることを許されない。すなはち、性格の表現といふより、個性の表象と見る方が、如何にもこの場合恰好である。しからば、類性と個性との差別は、どの點に存するか。

かう尋ねられると、説明に甚だ困つてくる。個性の現はれは、人物の言葉(speech)行爲(action)他の人物に與へてゆく反應(effect)等に、間接的に見られるもので、いはゞ客觀的具象的描寫の中に渾然として出てくるのであつて、説明以外のものでなければならぬ。直觀的のものでなければならぬ。此れに反して、單に、類性の表現は、解釋や解剖等によつて、直接的に寫し出すことが出来る。古代や中世の物語中の諸人物を見よ。多く、勇敢とか英邁とか聰明とか優美とかいふ概念的辭句によつて説述されてゐる。とは言へ、勿論、「宇津保」の主人公なかに、しる、「保元物語」の花形爲朝にしる、「住吉物語」の悪役繼母にしる、その言語、行爲、環境等の描寫において性格の顯現はあるにはある。しかも、その筆致が甚だ、套習的のものであり形式的のものであつて、生々とした個性が明確に刻み出され浮かび上げられてゐないことは、一目で分らう。いはゞ、それらの人物には、未だ生々しい血が流れてゐないのである。われ々は、描寫を通してそれら人物の呼吸を感じることも出来ない。更には、それら人物には、はつきりした現實性が缺けてゐる。人物描寫の筆が板についてゐないのである。

三

自分は、こんな見地から、源氏物語の價值を回顧して見たいと思ふ。作者紫式部の性格描寫の貫目を計つて見たいと思ふのである。

しかし、なほ、一言つけ加へておきたいことは、自分は、個性表現の巧拙からのみ、文學者の價値を定めようとは思つてゐない。もし、文學の價値を個性の表現の上のみおこならば、古來の叙事詩や物語の多くは、すべて評價の圏外に放棄されなければならぬまい。われ／＼は、ホオマアの大叙事詩を、個性描寫の缺けてゐるといふ不満を忘れて、なほ鑑賞玩味し得てゐるやうに、古事記の神話、平家物語、近松の淨瑠璃文を、十分賞玩し得てゐるのである。

源氏物語も、これを大觀すれば、やはり小説といふよりも、物語といふべきである。たゞスケールの大きい戀物語である。作者は獨自な個性を表象したい心の示唆より、むしろ筋の展開、事件の交錯、背景の据方、位置の取方に、多くの興味を感じ、努力を拂つてゐる。それはそれでよい。しかも、われ／＼はなほ、多くの事件叙述、周圍描出の合間々々に、作者が、性格描寫に多大の妙

味を抱いて、その表現の三昧境に沁り込み、殊にも、奇しき運命の糸に織り込まれてゆく人間の悩み、性の蠱惑と戦ひ／＼果ては敗殘の身を横へる怪しき人の姿を、生き／＼と描き出して居るのを見逃すことが出来ない。すくなくとも、その點は完全な創作といふべきである。現代小説の性格描寫に比肩して必ずしも劣らない立派な小説もその中にある。

前述もしたやうに、こゝに考へて見ようといふ薰といふ一人物は、主人公源氏の性格的對立者として仕組まれてある。しかも、薰の性格の方が、源氏の性格に比して、より鮮かに出てゐる所以のもの、源氏の位置は事件のために、多少傀儡となり、統一感に乏しく、無駄が多いからである。源氏五十四帖に、序破急の韻律を求めらるなら、源氏の位置はその序破に存し、薰の位置は急の上に存してゐる。故に、薰をめぐる様々の行爲は、展開的よりつねに集中的である。従つて行爲者（人物）の性格は鋭角を示して、それ／＼對立してゐる。かうした間に、薰の性格は、織り込まれ描き出されてゐるわけである。

四

帖名	柏木	横笛夕霧御法	幻	勾宮
薫年一	一歳	二歳ヨリ四歳迄	五歳	十歳ヨリ四十歳
薫に關する主要な記事	●源氏を表面の父、女三宮を母として出生、實は柏木が女三宮に通じたために生れたものである。 ●六條殿にあつて、勾宮を友として日を送る。(横笛卷)	●源氏、薫の遊んでゐる所へ尋ねてくる。	●冷泉院、薫の後見となり給ふ。 ●十四歳の時侍従となり、やがて右近中将となる。 ●生前の秘密に氣づき悶えを重ねる。 ●十九歳にて、中將兼三位宰相に昇る。 ●進ふ女多少出來たれど、その中、典侍腹の六君に覺召しがふかい。	●玉蔓の兩女に思ひあつて出入する。(竹川) ●春、六條院に行はれた賭弓に出る。(勾宮) ●宇治の阿闍梨が冷泉院の御前で宇治の八宮の御身上話を申上げたのを、薫は傍からきいて、八宮の高徳を敬慕する、かくて遂に自ら宮を尋ねてゆく。
参考すべき記事	○女三宮は出家、柏木は病歿する。 ○柏木の一周忌。 ○紫上逝く。	○源氏みまかる。	○玉蔓の長女冷泉院女御となる。 ○同次女は尙侍となりて宮中に入る。	

つぎに、多少、煩はしいが、便宜上、薫の年立を帖名と對照して表記しておかう。それで、薫についての小説の筋の説明はこれを省くことにする。

本	椎	姫	橋	川	竹
廿三歳	廿三歳	廿二歳	廿二歳	廿二歳	九歳迄
●この年秋、薫、中納言となる。 ●七月、久しぶりに宇治を尋ね八宮から兩君の行末を依頼され、姫君の琴の音をさへきく。 ●九月、父宮の薨去をきいて宇治を尋ね、大君と始めて直接に言葉をかへす。 ●十二月、宇治を尋ね、中君に勾宮を媒介しようとする。	●この年秋、薫、中納言となる。 ●七月、久しぶりに宇治を尋ね八宮から兩君の行末を依頼され、姫君の琴の音をさへきく。 ●九月、父宮の薨去をきいて宇治を尋ね、大君と始めて直接に言葉をかへす。 ●十二月、宇治を尋ね、中君に勾宮を媒介しようとする。	●秋の末、たま／＼八宮の不在の日、薫宇治を尋ねて琴をひく宮の兩君を垣間見る。 ●京にある某日、薫、勾宮に宇治宮の兩君のことを洩らす。 ●十月五六日の頃、薫宇治を訪れる、姫君に仕へてゐる老女は、薫の實父柏木に仕へてゐた女房で、その口から薫はわが奇しき運命の程をきゝしるのみか、父の遺書をも貰ひうける。	●秋の末、たま／＼八宮の不在の日、薫宇治を尋ねて琴をひく宮の兩君を垣間見る。 ●京にある某日、薫、勾宮に宇治宮の兩君のことを洩らす。 ●十月五六日の頃、薫宇治を訪れる、姫君に仕へてゐる老女は、薫の實父柏木に仕へてゐた女房で、その口から薫はわが奇しき運命の程をきゝしるのみか、父の遺書をも貰ひうける。	●春、六條院に行はれた賭弓に出る。(勾宮) ●宇治の阿闍梨が冷泉院の御前で宇治の八宮の御身上話を申上げたのを、薫は傍からきいて、八宮の高徳を敬慕する、かくて遂に自ら宮を尋ねてゆく。	(以上勾宮) ●玉蔓の兩女に思ひあつて出入する。(竹川)
		○春、勾宮初瀬詣の途、宇治に遊ぶ。 ○八月、八宮薨去。	○勾宮、宇治宮の兩君に對し、見ぬ戀心を抱く。		

寄	蕨	早	角	總
五 廿			四 廿	
<ul style="list-style-type: none"> ● 蕨は涙の中に新年を迎へるが、大君を失つたかれの心は、自ら中君に向けられ、二條院に尋ねてゆく。 ● 大君に仕へてゐた辨のおもとの尼になつてゐるのと昔語りをする。 ● 二月廿、あまり新造の三條院にうつる。 ● 今上は、蕨を二の宮の婿と望み給ふに、蕨はむしろ大君の方を慕つてゐる。 ● 蕨は、匂宮の正妻を娶ると共に、中君に對する同情と愛慕との念いよく増し再三中君を尋ねて慰める。 ● 中君は、蕨に義妹浮舟のことをつけて、わが身を蕨の誘惑から逃 			<ul style="list-style-type: none"> ● 夏の始め宇治を尋ねる。 ● 秋、八宮の一周忌の見舞かたゞ、宇治にゆき、無理に佛間において、大君と對面したが、大君の心はうちとけぬ。 ● ある夜、大君と誤り、中君と情を通ずる失態を演ずる。 ● 八月廿六日、匂宮を宇治に案内し、中君と契を結ばしめる。 ● 九月十日頃、宇治に到り、大君を再三口説く。 ● 大君病む。蕨、宇治を訪ふ。遂に大君は蕨に身を許さざるまゝ逝去する、十一月。 ● 蕨、匂宮を久しぶりに尋ねるが、匂宮の中君を疎くすることを責めることが出来ない。 	
○二月七日匂宮、中君を二條院にうつす。			○三條宮焼けて、蕨の母入道宮、六條院にうつる。	
○中君匂宮の胤を妬む。			○匂宮紅葉見に宇治に行く。	
○匂宮大君と婚を結ぶ。				

蜻	舟	浮	屋	東	生				
七 廿		六 廿			歳				
<ul style="list-style-type: none"> ● 蕨、浮舟の身の上をき、匂宮と語りつゝ泣く。 		<ul style="list-style-type: none"> ● 二月朔日、久方ぶりに宇治の浮舟を尋ねる。 ● 同月十日すぎ、宮中に文作りの事行はれ蕨もまゐる。 ● 蕨は四月十日頃、浮舟を京に移すつもりであると、手紙のことから匂宮と浮舟との關係に氣づく。 			<ul style="list-style-type: none"> ● 二月朔日、大納言に昇り右大將を兼ねる。 ● 同月廿餘日、二の宮と婚を結ぶ。 ● 四月、二の宮蕨の新造した三條殿にうつらる。 ● 同月廿餘日、宇治に新造の御堂を見にゆきたまゝ、初瀬詣のかへるさの浮舟をかいまみる。 ● 浮舟の、その頃二條院の西のひさしの北に来てゐたのを、蕨はしたつてゐる。 ● 匂宮をさけて、浮舟の三條の家に来てゐるのを、蕨は何とかしてわがものにしたかと思ふ。 ● 晩秋宇治にゆき、辨と浮舟を盗み出すことを計り、九月十三日夜その目的を果して浮舟を宇治にうばひさる。 			<ul style="list-style-type: none"> ● 九月、蕨は宇治宮の御殿を山に移し寺を建ててゐることに定め、辨の尼の所にゆき浮舟の事をきく。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 中君男子を生きて見る。
○浮舟宇治河に投身		○匂宮、宇治にゆき浮舟にあふ。							
		○二月十日之夜、匂宮浮舟をつれ出して始めて契をむすぶ。							

橋浮夢	習手	蛤
歳	八 廿	歳
● 浮舟のこと横川僧都の口より中宮に傳へられる。 ● 薫、浮舟のため供養をいとむ。 ● 薫、わが愛してゐる小宰相から、浮舟の永らへてゐることをきく。 ● 四月八日、浮舟の行方を探るため比叡山に登る。 ● 薫、横川僧都を訪ね、浮舟のことについて尋ねる。 ● 浮舟の弟、小君をして浮舟に手紙をつかはずが返事がない。	○ 浮舟出家する。	

一六二

この表に現はれてゐるやうに、薫の出でくる帖名は、柏木より始まつて夢、浮橋に終り、約十七帖に亘り、年齢の方は廿八歳まで、終つてゐるが、その描寫の筆は十四五歳より漸く密に入り十九歳に至りいよ／＼作の中心人物となり、従つて叙事も枝葉にまで及んできてゐる。

世に、橋姫以下夢、浮橋まで十帖を宇治十帖と呼び、それまでの四十四帖に對し、續篇としてこれを見做す習ひがあるが、構想の上から見れば、その間には更に何等正續的關係を立てる根拠は無

いのである。竹川から橋姫への展開は極めて自然な行き方であつて、只橋姫卷から宇治八宮一族の説話が始まるといふ點だけ注目される。つまり宇治十帖とは、八宮一族の物語が中心になつて來た最後の十帖といふほどの意味にとつておけばよろしいことになる。

そこで眞に續編的構想を索めるなら、むしろ、匂宮の卷まで、これを逆上らなければならぬ。すなはち、そこは、前半の主人公の死を受けて、後半の主人公薫が、漸く中心人物に押出されてきた區切に當つてゐるから。しかしこれはごちらでも大きい問題ではない。

五

さて、個性の本質については、これを、精神諸活動の統一の中にとし(カント)或は、意識の統一點にありとし(シヨツペンハウエル)乃至、意思の中(ヴント)感情の中(ロツチエ)に求める等、古來哲學者の立場は種々雑多の様であるけれど、それが何物かの統一精神である點においてはごの

説も一致してゐるやうである。

しば／＼二重人格(例へばオスカア・ワイルドの如き)の性格所有者の話は聞くけれど、それは多

一六三

く自我の分裂様式の比較的顯著な場合を指すので、その人が精神病患者か、狂人で無い以上、二重三重に見える性格分裂の底にも、多少の統一性は存すべきである。しからば、表現の對象そのものが物心的存在の形式において有すべき個性も、統一を離れて存在しない。われ／＼は、作中人物の性格描寫を評價する場合、第一その表現には統一がついてゐるか、扞格矛盾するところはないかと言ふことを見る必要があるであらう。

しかし、個性の個性たる所以は、そこに意思の自由が存するためであることを考へねばならない。凡そ、性格の成立には、天賦的のもの、環境的のもの、意思的のもの、三要素を認めることが出来るが、前二者は外部的のもの必然的のもの宿命的のもので、人力のよくし得る範圍外のものである。しかし後者の意思的のものだけは、本來自由的創造的のもので、理想をめざしつゝ、小さい統一から大なる統一へと、絶えず流動して止まない相である。すなはち、意思の發動は、行爲を生み、行爲の習慣的連続はこゝに個性を構成し、個性はやがて意思に連なりつゝ、不斷に生々發舒する相である。

そこに矛盾と統一、破壊と建設、不信と信、憎悪と抱愛等の對立性が繰更され、その反覆によつ

て個性の伸長展開の存すること説明すべき迄もないことである。もつとも、作品中のすべての人物に、この變化展舒的方面を索めることは無理である。假令、個性の本體が、理知と感情といふ如き矛盾體の統一であると言へ、かゝる性格内の葛藤以外に、統一され建設された方面のみでも、相當に人物を動かし得る領分はあるからである。

なほ、環境と個性の關係であるが、環境の力は前述したやうに、必然的に個性構成の一要素となるものであるが、われ／＼は、環境の仕掛けてくる影響に對し、全然、無力の人格體を想像することが出来ない。故に、同一の環境でも、甲乙丙丁……各人物に及ぼしてゆく力は均等ではない。そこで、環境の影響を如何なる形式にうけ得たかといふ所に、作品内に、個性の綾が織りなされる。性格描寫の研究の最後において、この方面をまた見逃してはならないのである。

六

上述の見地からして、薰の描寫の効果を概評して見ると、まづ第一の表現上の統一といふ條件は、優に適合してゐるといふことが言ひ得られる。

しかし、かれの性格描寫の筆の見えそめた十四五歳から廿八歳まで十四五年間にわたり、すべて性格の基調に變化が無く、あまりに終始一貫しすぎた嫌ひが無いでもない。われ／＼は、終生ほとんご個性の變化發展を見ず、つねに同じ調子を持ちつゞけてゐる人をしば／＼知つてゐる通り、薫の如き人物の實在を否定することは出来ない。普通、性格に推移が無いといふ場合は、感情的偏執か意思の薄弱かに原因してゐる。薫の如きは、その後者の場合で、その環境や本能欲は、しば／＼かれの生活に、新生命を賦與するやうに導いてはゆくののであるけれど、女性的優柔なかれの意思薄弱さが、その境地に立つて更に飛躍を試み得ない。結極、些細な動搖が起つても程もなく、復、動搖前の調子に落付いてゆくのである。

この氣持は、源氏物語の中に、巧に描けてゐる。しかし、作者は、意思の薄弱なため特に、薫の性格の上に發展を來たさず様、意圖したものとは言へない。それは、作中の如何なる人物のどの性格描寫を選び出して見ても、自我の意識に乏しいといふ點はすべて共通してゐるのである。秋の野に咲く千草の如く、色様々、姿色々ではあるが、その性格には伸長更新が無い。ほつとしたある形體を備へてゐるだけのもので、人物に自照の精神が無いから、緩織る運命の波に、水に浮く藻の

如く、あるは左されあるは右されてゐるだけで、そこに自發的の動きが無い。頭中將や匂宮の行爲は、なるほど動的積極的には出來てゐるけれど、これらも、賦與されたまゝで、意識的に働いてゐるものとは思はれない。それは必然的であつて自由的でない。

これには、平安朝中期以後における一般の男性の氣質といふことをも考へて見なければならぬ。なほ、現代人の様に、強く自我に目ざめてゐない時代の人々といふことも考察に入れて見たい。ともあれ、紫式部の描いた薫の性格が、あまりに平板で、單調で、退屈すぎる缺點は、これを否定することは出来ない。われ／＼は自然主義の作家によつて、オプロモフ（ゴンチャロフの作品の主人公）や、健次（白鳥の「何處へ」の主人公）の様な、かなり陰鬱で退屈な人物を多く見せられたけれど、それらの人物には、ちやんとした自意識がある。現在こそ意識が弱からうが、過去において潑刺としてゐたであらうことを推測出来る。

前述もしたやうに、われ／＼は、匂宮卷以後の通讀によつて、結構上に多大の興味を持ちこそすれ、薫を始め諸人物の性格の動きには、餘り統一にすぎ形式化されたといふ理由で、始めから多大の期待を拂ひ得ぬ所以である。

さて、表現上統一の基調をなしてゐるものは、薫においては、宿命的天賦的性質のものである。これは、薫に關する性格や事件の上のみならず、源氏物語全體の筋の展き方が、多く宿命思想の操りに、係はつてゐることは、誰しも認め得る所であらう。これは、作者自身が、佛教の宿命觀、因果應報思想をとり入れてゐるためであつて、當時一般に浸潤したこのフェタリズムは、人々の心を内氣にし、奔放の情熱、自由なる意思の發露を差止めた觀がある。

薫は、いふ迄もなく、光源氏が繼母に通じたむくい（柏木卷にこの「むくい」の語がある）として生を享けたもので、表面は光源氏の子となつてゐるが、實は柏木が女三宮に密通して出來た子である。光源氏自身も、この事實を知りながら「この人のいでものし給ふべき契にて、さる思ひの外の事もあるにこそありけめ」（横笛卷）と、罪障の應報を認めなければならなかつたのであつた。

作者は、薫の一生を支配すべき確乎たる出發點（因縁）を作るために、そこに出來る限り伏線を設けてゐる。

（薫は）幼心地に、ほの聞き給ひし事の、をり／＼いぶかしう、おぼつかなく思ひ渡れど、問ふべき人もなし。宮（母三の宮をいふ）には、事の氣色にても知りけりと思されむ、かたはらいたきすぎなれば、世ととも的心にかけん、いかなりける事にかは、何の契にて、かう完からぬ思ひそひたる身にしもなりいでけん。善巧太子のわが身にとひけむ悟をも得てしがなとぞ、ひとりこたれ給ひける。

おぼつかぬ誰に問はましいかにして始めもばても知らぬわが身ぞ

いらふべき人もなし。事にふれて、わが身に恙ある心地するも、たゞならず、物嘆かしくのみ思ひめぐらしつゝ、宮もかく盛の御かたちをやつし給ひて、なにはかりの御道心にてか、にはかにおもむき給ひけむ。かく思はずなりけることの亂れに、必ず憂しと思しなるふしありけむ。人もまさに洩り出で知らじやば。猶ほつゝむべき事の聞こえにより、われには氣色を知らする人のなきなんめりと思ふ。あけくれ勤め給ふやうなんめれど、はかもなくおほどき給へる女の御悟のほどに、蓮の露もあきらかに玉と磨き給はむこと難し。五つのながしも、猶うしろめたきを、われこの御心地をたすけて、同じうは後の世だにと思ふ。かの過ぎ給ひにけむも安からぬ思ひにむすほれてやなど推量るに、世をかへても對面せまほしき心つきて、かうぶりばものうがり給ひけれど、すまひはてす。おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまで花や

かなる御身のかざりも目につかずのみ思ひしづまり給へり。(匂宮卷)

惟ふにこれだけの心理描寫の中に、すでに立派に薫の全生涯が暗示されてゐる。薫は十四歳の時、不思議の運命の陰に生れたわが身の上を見知りひたすら遺孤の身(薫の生れた年に實父は病死し、母は出家した)を佗びつゝ、呪はれた生の旅路に立つ漂泊者たらざるを得なかつたのである。見らるゝ如く、源氏物語特有の抑へくした雅味と重々しい書振が、かうした薫の心理描寫の筆致にもびつたり合つて、作者の意圖は十分效を奏してゐることが肯かれる。

なほ、薫の境遇の外観は如何にも華やかで、生前の光源氏からは殊更寵愛せられ(これは、光源氏の後めたい心からではあつたが——横笛卷)、その薨後は冷泉院と秋好中宮にわが子の如く後見され(匂宮卷)、竹河卷にも記されてある通り「けにた、昔の光源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ人の御覺なり」と言はれる程であつた。従つて時の帝並びに后を始め、右の大臣なきにも「こまやかにやむごとなくもてなされ」たわけで(匂宮卷、竹河卷)、世人は「匂宮兵部卿、薫中將と聞きにく、言ひつゝ、けて」譽め讃へてゐた(匂宮卷)。これは物語前半の主人公光源氏の多倖な一生に對照せしめ、薄倖な薫の運命を點出するため、豫め少年期を明るく描いた作者の用意でもあつたらう。しかし、性格的

— 國文學の傾向 —

悲劇がかれの生活内に巢喰ひつゝ、所謂、宿命として漸次その間に展開してゆく筆致は、まづ自然的に巧みであると言ひ得る。

まづ、運命の默契の最初の現はれ、しかも悲劇の中心となつた事柄は、「宇治橋の長き契は朽ちせじをあやぶむ方に心さわぐな」と彼が詠んだ如く(浮舟卷)かれ薫が宇治を尋ね、八宮を知り、さてその大君中君を垣間見た一事からであつた。これに就いて、作者が幾度も運命觀を繰更してゐる。却てわれ／＼はそのためにある煩累さを感じしめられる程である。列挙してみると、

(A) 薫の心理的並に作者の主觀的筆致に現はれてゐるもの

× さるべき契やありけむ。御子(宇治八宮)のうしろめたしと思したりしさまも、あはれに忘れ難く、

この君達の御有様はけはひも云々。(總角)

× 人やりならず心ばそつて、疎くて止みぬべきにやと、思ふ契はつらけれど、恨むべうもあらず。(同)

× いかなる契にて限なく思ひ聞えながら、つらき事多くて別れ奉るべきにか。(同)

× うたてかく契深くものし給ひける人(大君)の、などてかはさすがに疎くては過ぎにけむ……(宿木)

× 佛になりてこそは、あやしくつらかりける契の程を何の報とあきらめん……(同)

— 源氏物語の薫の描寫 —

(B) 薫の言葉の中に現はれてゐるもの。

× いかなる契にてこの父みこ(宇治八宮)の御許にきそめけむ。(蜻蛉)

× あやしくつらかりける契どもをつくくと思ひ續けながめ給ふ……(同)

× 大君へ——世の中に心をしむる方なかりつるを、さるべきにてやかうまでも聞え馴れにけむ。(總角)

× 中君へ——いばけなかりし程より世の中を思ひ離れて止みぬべき心づかひをのみならひ侍りした、

さるべきにや侍りけむ、うきものから疎そかならず思ひ奉りしひとふしに……(宿木)

× 浮舟の女房へ——かく契、深くてなむ参りきあひたると傳へ給ひかし。(宿木)

× 宇治姫の女房へ——(宇治への道は)人々のかく恐ろしくすめる道に、まるこそふりがたく分けてくれ

何ばかりの契にかと思ふあはれになむ。(東屋)

(C) 作中諸人物の言葉及び心理描寫の中に現はれてゐるもの。

× 匂宮、薫のわが中君を戀してゐるのを知り、中君へ——それもさるべきにこそとことわらるゝな……

……(浮舟)

× 大君、薫の切ない戀に對して心に思ふ——いと恥しけれど、かゝるべき契、そありけめとおぼして

されば、「珍しかりける人の御おほえ宿世なり」と夕霧の嘆賞した、(宿木) この薫も一度宇治との因縁を結ぶや、悲劇はそれを源泉として、様々の姿に延び出てゆく。まづ辨が言つてるやうに、宿縁によつて(橋姫卷) 薫は、宇治において父に仕へてゐた辨との奇遇から、己が運命の程を知悉して、「世の中に跡とめむとも覺えず」なるまで(椎本) かれの煩悶はいよく高調したのである。かくて大君は他界し、中君は全く匂宮のものとなる。そこに怪しき運命の導きから、浮舟が薫の世界に入つて來る。と、薫は浮舟を「たゞ覺なき物のはざまより、見しよりすゝろに戀し」「さるべきにやあらむ、怪しき迄ぞ思ひ悶ゆる」(東屋卷) のであつた。しかもその浮舟の姿は、忌月における結婚(東屋卷) と、所のさが(手習卷) との恐しい二つの力のむくいととして、宇治河の早瀬に投げられて、その美しい姿は薫の視野から幻のやうに消え去つてゆく、彼はいよく「かゝる事の筋につけて、いみじう物思ふべき宿世なりけり」(蜻蛉卷) と惱みつゞけるのである。

惟ふに、宿世とか契とかいふ用語は、盡く、因果應報といふ如き、嚴密な佛語的意義を持たず、われ／＼が日常軽い意味に、「運が悪かつた」「運と思つてあきらめる」なご、使つてゐるに近い意味も、その中にはあるやうである。薫が、宇治姫に對し限らない思慕を捧げながら、時の帝のすゝめにより、女二宮と婚したことを宿世だと言つてゐる(蜻蛉卷)その宿世の如きは、あまり因果的意味をその中に持つてはゐない。

ともあれ、宿世思想は、あまり技巧的なほど薫をめぐる事件の描寫に統一を與へすぎてゐることは、これを認めなければならぬ。

八

なほ今一つ基調を作つてゐる大きい結帶は、薫の抱いた大君(生前から歿後まで)に對する根づよい思慕の情である。これは、全篇を通じて如何にも自然的に、場面々々にしめく、りを與へてくれる。適宜拔萃して見ると、

A 薫の心理描寫並に作者の主觀的筆致に現はれたもの。

×(薫は大君について) 思ひしよりは、こよなく勝りておほどかにをかしかりつる御けばひども、倅にそひてなほ思ひ離れがたき世なりけりと心弱く思ひ知らる。(橋姫)

×(薫は己が暗い運命を大君がきゝしるだらうと思ふにも) 妬くもいとほしくも覺ゆるにぞ、又もて離れてばやまじと思ひよらるゝつまにもなりぬべき……(椎本)

×(八宮の薨去により、薫はいよ／＼大君に對し) かやうにてのみは、え過ぐしはつまじと思ひなり給ふも、いとちなる心かな、なほ移りぬべき世なりけりと思ひ居給へり。(同)

×(大君の不幸をきゝ) 身もなげむとおぼす……(總角)

×(大君の逝くなつた翌春) つきせず思ひほれ給ひて新しき年ともいはず、いやめになむなり給へり……(早蕨)

×(薫は女二宮との婚約が出来ても) 心のうちには、猶あかで過ぎ給ひし人の悲しさのみ、忘るゝ世なくおぼゆれば……(宿木)

×(今は匂宮のものになつてゐる中君を戀するのも大君の妹であるからで) などと昔の人(大君)の御心掟をもたがへて思ひぐまなかりけむとくゆる心のみまさりゆけば……(同)

×(薰はいよく女二宮と婚したが) 心のうちには、猶忘れ難きにしへさまのみ覺えて……(同)宿世の程(女二宮との婚) 口惜しからざりけりと、心おこりせらるゝものから、過ぎにし方の忘れらればこそあらめ、猶まざるゝ折なく、ものみ戀しく覺ゆれば(いよく薰は宇治に寺を建てること迄思ひ立つ)……(同)

×(浮舟を愛するものも、大君の人がたの意味で、浮舟を得ながら) 猶行く方なき悲しさば、むなしき空にも満ちぬべかんあり(東屋)

×(大君の)いとなえばみたりし御姿のあてになまめかりしをのみ思ひ出でられて……(同)

×(薰の心一宮にさそはれるについても) 唯かのひとつゆかりをぞ思ひ出で給ひける。(同)

B

薰の言葉の中に現はれたもの。

×八宮から、大君と中君の後見を依頼されて、八宮へ……一言にても承りおきてしかば、更に思う給へ怠るまじくなむ……變らぬ志を御覽じ知らせむとなむ思う給ふる。(椎本)

×大君が、中君を薰に娶らせんとした時、辨へ——かばかり思ひすつる世に、猶とまりぬべきものなりければ、改めてさば、え思ひなほすまじくなむ。(總角)

惟ふに、薰は大君を喪つてから、その遺瀨ない心を中君に移し、浮舟に移し、時に女一宮の上、更に小宰相(一品宮の官女)按察の君(女二宮の女房)にも投げかけていつたが、結極、それは大君に對する思慕の惱を忘れようとするためだけのものであつた。人形としてこれらの人々を愛慕しただけのものであつたのだ。

この氣持は、かなり緊切であつて、かの光源氏や勾宮の無節操に異性を狩るものとは、全然趣を異にし、全篇の統一の上に十分の効果をあげてゐるやうに思ふ。

九

以上統一方面に關する薰の性格描寫が、ともかくにある點までの奏效を得てゐることは、作者の

焦點が構想の中に、より顯著であつたといふことに歸着してゐる。しかるに、われ／＼は第二の性格内の葛藤の描寫においては、物語に對しかなり不満足のものを見出たさすには居られない。まづ一般に深味が足りない點が自分の最も遺憾と思ふ點である。

これは、つまり具象的(間接的)描寫が少なく、説明的(直接的)筆致が多すぎるためで、今、自分の書きぬいた大體の見當では、薫の性格描寫の筆は凡そつぎの割合になつてゐる。

具象的のもの——全部の三割五分

この内、言葉づかひの中に現れたるもの二割五分、容姿行爲の上に現れたるもの五分、その他の人物への影響、或ひは環境の中に現れたるもの五分。

説明的のもの——全部の六割五分

この内、心理の説明に現れたるもの三割五分、他の人物の批判の中に現れたるもの二割、その他作者の註釋説明として現はされたもの一割。

もつとも、後者の説明的に屬する心理描寫でも、深く鋭く行けば、必ずしもそれが具象的でなくても、効果を出し得るのであるが、次に列挙するやうに、それはあまりに皮相的概念的に傾いてゐる。

先づ一例を、薫の幼時の描寫の中に求めて見ると、

A 容姿(特に性格を表はしてゐる)に關する語句——

いと心やすくうち笑みて——いと貴なるにそへて愛敬づき——まなこ長閑に恥しきさま——けだかく物々しう様異に見えたる氣色——肩のいと氣色ある——月日にそへて此の君の美しうゆゝしままで生ひまさり給ふ。(以上柏木及び横笛卷)

B 行爲に關する語句

程よりはおよすけて物語などし給ふ。(柏木卷)

C 他人物の批評としての語句——

夕霧「二宮(薫)はこよなく兄心このかみこころに所さりきこえ給ふ。御心清くなむおはしますめる。御年の程よりは怖しき迄見えさせ給ふ」(横笛卷)

言葉づきや、環境の描寫なきによつて、十分性格を表現しにくい幼年時代では、専ら容姿と行爲との描寫をとほして表はすより他に道が無いではあらう。それにしては、これだけの敘述では満足しにくい。しかも「つぶ／＼と肥えて」とか「口つき美しう」とかいふ如き説明は、幾度も反覆されてゐる

のである。

しかし、作者が薫のものの女性的優美の性質と、冷たい理性とを、これらの描寫の中に暗示せしめてゐる意圖だけは十分諾はれる。殊に、氣色ある眉の特色については、母三宮にも父柏木にも似ず、光源氏の注意をひいた様に描いて、薫の將來を暗示せしめた手腕は、たゞく敬服の外ない。

さて、薫における性格内の葛藤も、つゞまる所、天賦的の理知(消極的)と環境的の感情(積極的)との齟齬に由來するのであるけれど、果してそのくひちがひが自然に展開してゐるであらうか。そこがわれ／＼の問題とすべき大きい疑問となる。

先づ、薫の理知的消極的性質は、如何やうに表はされて居るかと言ふ點から、這入つて見よう。

一、厭世超俗の心

薫は十四五歳になる。彼は幸福な環境に恵まれながら、陰慘な運命の暗翳は、程もなく清純な胸奥に浸潤してゆくのである。作者はこの間の怪しいプロセスを、例の落付き切つた筆致で敘してゐる。「たゞならず物嘆かしくのみ思ひめぐらしつ、」われこの(母三宮の)御心地をたすけて同じうは後の世とだに思ふ」元服は物憂がり給ひけれごすまひはてす」世の中をあぢきなきものに思ひすま

したる心なれば」(以上勾宮卷)と言ふ風に。

作者はさうした薫の心境に、純淨無垢の遁世者(宇治八宮)の姿を拉してくる。折から行きつまつてゐた薫の心は、何がなし信佛隱棲の魅力に誘はれざるを得なくなる。

×中將(薫)の君は、なか／＼御子八宮の思ひ澄まし給へらむ御心ばへを對面して見奉らばやと、思ふ

心ぞ深くなりぬる。(横笛)

×(八宮は)いとあてに心苦しきさまして、宣ひ出づる言の葉も、同じ佛の御教をも、耳近き譬にひき

ませいとよなき御悟にはあらねど、よき人はものゝ心を得給ふ方の、いと異にもし給ふべけれ

ば、やう／＼見馴れ奉り給ふ度毎に常に見奉らまほしうて、暇なくなどして程ふる時は、戀しうお

ぼえ給ふ。(橋姫)

宇治の自然は、二重に彼の無常觀を觸發した。

×あやしき船どもに柴刈り積み、各々何となき世の嘗みどもに行きかふさまども、はかなき水の上

に浮びたる、誰も思へば同じ事なる世の常なきなり。我は浮ばず、玉の臺に静けき身と思ふべき世

かばと思ひつゞけらる。(橋姫)

かくて、實の父柏木に對する追慕の心は、如何なる時にも、強く頭を擡けずばやまぬ。

いとゞ句まさり給ふ世の營に添へても思ふこと多かり、いかなる事といふせく思ひ渡りし年頃よりも、心苦しうて過ぎ給ひにけむ古へ様の思ひやらるゝに、罪輕くなり給ふばかり行なひもせまほしくなむ。(椎本)

いよく出家をも遂げかねまじく事態が進んでいつた刹那、かれの足を俗世に縛りつけてしまつたものは、八宮が臨終の床に、その二女の後見を薫に依頼した事實であつた。その楔機については、作者の構想がみごとに成功して事件を生かしてゐる。

×(薫は八宮の薨去をきき) いとあへなく口惜しく今一度心長閑にて聞ゆべかりけること多う残りたる心地して、大方世の有様思ひつゞけられて、いみじう泣い給ふ。(椎本)

×(薫、辨への物語り) いはげなかりし程に故院(光源氏)に後れ奉りて、いみじう悲しきものは世なりけりと思ひ知りしかば、人になり行く齡に添へて、官、位、世の中の匂も、何とも覺えずなむ。唯かう静かなる御住居などの、心になひ給へりしを、かくはかなく見奉りつるに、いよくいみじく、かりそめの世思ひ知らるゝ心も催されにたれど、心苦しうて、とまり給へる御事どものほど

大君の逝なき人となつた時も、この責任感にかて、母三宮の思はくのために、かれはやはり出家しかねたのである。

しなど聞えむは、かけくしきやうなれど、ながらへてかの御事あやまたず、きこえ奉らまほしきになむ。(同)

×中納言(薫)かく世のいと心憂く覺ゆるついでに、本意遂げむとおぼさるれど、三條の宮(母宮)のおぼさむことにもはかり、この君の御事の心苦しさとに思ひ亂れて、かの宣ひし様にて、かたみにも見るべかりけるものを……(總角)

×(薫、尼として生殘してゐる浮舟の身の上をききしつた頃、僧都に述懐して) こゝには俗のかたちにて、今まで過ぐすなむいとあやしき、いはげなかりしより、思ふこゝろざし深く侍るを、三條の宮(母宮)の心細げにて頼もしげなき身一つをよすがに思したるが、さりがたき絆に覺え侍りて、かゝづらひ侍りつる程に、おのづから位などいふことも高くなり、身の掬も心に叶ひがたくなどして思ひながら過ぎ侍るには……(夢浮橋)

かくて薫の生涯は、宿木卷に「獨寢し給ふ夜なくは、果敢なき風の音にも目のみ覺めつ、來し

方行く末の人の上にさへ味氣無き世を思ひめぐらし給ふ」て、積極的に現實生活を體驗しようとする意志は失せ、不斷に無常觀に沈んでゆくあはれな人の身の状態となつたのであつた。

しかし、その厭世思想、陰逸精神の跡を辿つて見るに、明かに、自分は衣を隔て、膚を搔くといふ様な不満を抱かすには居られない。さうして、これは描寫の巧拙といふ様な末梢的問題でなく、作者それ自らの體驗の淺膚といふ事實に歸着すべきことだと思ふ。さりとして、自分は、薰（作者の反映として）が、敢て大聖者として描かれることを望みもしないし、閑居に徹し得た厭世家になりおほせることを期待もしない。要は、もつと、それが深くあつてほしい。強い自己凝視の點を望みたい。自照と體驗との生活においてこそ、その個性は深められ伸び出される。勿論、薰の様な根の無い浮草の様な、趣味的の無常觀の中に浮沈してゐる人は、現存するにはするであらう。しかし、自分の望むところは、個性の創造的精神である。作者自身の張りつめた現實觀である。

今、參考として、篇中の諸人物の口に登る薰に對する性格評を摘出して見ると、

- ×夕霧大將——御心清くなむおほしますめる。御年の程よりは怖しきまで見えさせ給ふ。（横笛）
- ×玉蔓——恥しげなるまめ人云々。けはいのいとしめやかに、なまめきたるもてなし云々。（竹河）

×藏人少將——のどやかに、さまよくねたげなめれ。（竹河）

×匂宮——例のことにふれて、すさまじげに世をもてなす云々。（總角）

聖だつと言ひながら、こよなかりける山ふし心かな云々。（浮舟）

×中君に仕へてゐる女房——心をあまりなまめ給へるこそにくけれ云々。（宿木）

×中君——いと恥しげに心深く云々。思ひ初めつる事、執念きまで軽々しからず物し給ふ云々。（東屋）

うちつけの心淺きには物し給はず。（早蕨）

×小宰相——まめ人云々。（蜻蛉）

×中宮——まめ人云々。（同）

×大君——こよなうのどやかに後やすき心。（總角）

これら「のどやか」とか「まめ人」といふ説明の仕方で大體見當が着く様に、見方が餘り概括に過ぎる。型に入りすぎた類性的の説明に終つてゐる。特に、薰の厭世的性格については、少しも突込んで解剖して見たらしい根跡が無い。惟ふに、薰の個性の、篇中諸人物に反應し、波及してゆく程度が弱く淺いからである。すべてが表現的で無い。客觀的で無い。現實味に乏しいためである。